

---

# 猫は多世界解釈派

天野冷夏

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

猫は多世界解釈派

### 【Nコード】

N8293J

### 【作者名】

天野冷夏

### 【あらすじ】

某二十三世紀の世界では、猫型のロボットがライン製造されていた。ある時その中の一体に、何処の誰とも知れない人物の、記憶の残滓が。その彼が織り成す、ダラけたみっともない凡庸なファンタジー小説が今ここに。

## 人物設定

みなさん、どうもこんにちわ、私です。

ごめんなさい。著者です。

ここは主に人物の設定を書き出しておく、本編とあまり関連のない場所となる予定は未定。ネタバレ浮気バレ何でもありとなっておりますれば、各々の責任に於いて読めばいいじゃん。そんな曲がり角。コーナーです。だが、私は謝らない。

あ、原作キャラについては記載しません。オリキャラオンの設定です。予めご了承ください。

### 【登場人物】

・桜内 さくらい 御門 みかど

・身長：178cm 体重：62kg

> 備考<

某二十三世紀に製造されたネコ型ロボットの記憶領域で、意識だけが浮上した。その世界での生活に馴染めず、扉「ゲート」と名付けた移動用魔法を使って飛び出す。すると、ある世界の願いに惹かれ、そのまま引っぱり込まれて体を再構成された。よって、現在は人間の姿。ロボ時代の名前は「衛門「えもん」」だったが、次の世界のとある人物から「御門」と名付けられた。今はその世界を飛び出して、ハルケギニアに居ついている。

外見は肌の色から顔つきまで、純日本人そのもの。肩甲骨くらいまである長髪はある理由で伸ばしたもの。顔はまあまあにしてなかなか。エロゲの主人公になれそうな感じ。補正はない。

能力については一言で任意全能。でも護身完成には至らない。至れない。

設定上の性格は「切れ者は昼行灯と信仰しているタイプ」などの、ちよつと分かりにくいものが揃っている。普通に真面目で優しい部分の方が大きいかもしれない。でも、「どこかで暴走したくなつて失敗するタイプ」。クールダウンが必要。

一人称の小説において、心理を曝かれる主人公。彼の視点で描写が変わる。おい、カメラ、そっち動け。反則技で>遠見くを使えばどこでも見れる（描写できる）。

#### ・フラーマ

・身長：163cm 体重：50kg 年齢：18〜20 B：  
86 W：58 H：83

#### >備考<

13歳の頃から使用人をしていた女性。ド・ラエモンの苦しい時期を良く知っているが、分を超えた行いはしなかったため、詳しい事情を知っていた訳ではない。あくまでも使用人や応接秘書だった。現在は内政を司るド・ラエモンになくてはならない人物。

髪は茶系で腰まである長髪。瞳の色も茶色。白人種で体つきも女らしく、顔で選ばれただけあつて美人。

かなり真面目なタイプで、鋭利な眼鏡とかあれば完璧。でも性格がキツイという訳ではない。むしろ、尖った部分は使用人をしていくうちに消えた。色恋沙汰にも興味はあるらしい。

#### ・マスト

・身長：182cm 体重：73kg 年齢：16〜18

#### >備考<

トリステイン貴族の三男。すぐに熱くなる性格が災いして、賭け

事につき込んではいけないものまでつき込み、親から勘当されている。現在はド・ラエモンでミカドに雇われ、軍を統括する隊長を務めている。

顔は男っぽいソース型。髪は薄っすらオレンジに見えるブロンドで、碧眼。白人種。火系統のラインメイジ。

書類仕事より運動が好き。瞬間煮沸しなければ、おおらかで頼りがいのある男。訓練でミカドに勝てなかったからと、トリステインの魔法衛士隊に関する本で研究中。負けず嫌い。ミカドとタメ口で話すのも、それが理由。

#### ・エルサ

・身長：152cm 体重：39kg 年齢：15〜17 B：  
76 W：48 H：75

#### > 備考<

フラーマと同じく13歳の頃から使用人として働いていた。現在は内政担当で、ド・ラエモンに必要な人材。

ボブカットに近い金髪で碧眼。白人種。見ての通り、小柄で細身。スタイルも悪くないかもしれないが、細くて分からない。

明るい性格で、物怖じしない。

t・en v a p a s を歌わせたい感じの子。この歌は暗いけれども。だつて「パパ行かないで」な歌だし。名前もその歌手から引用してますが、濁点は除外した方がいいかなと考えまして、エルサ。フランス語で女性表記の名を、日本語にすると濁点付くようでした、ルイが男なら女はルイズみたいな。youtubeとか行けば見れると思いますが、確か80年代。完全に口りです。本当に（ryという、ある意味それだけが狙いで付けた名前。

\*\*\*\*\*

ま、こんなものでしょうか。彼らが目立って動くような話を作るべきなのか、躊躇しますね。外伝でなら書いてもいいかな。気力があれば。

私が書いているのはあくまでも二次創作。原作キャラの性格も生き写しにはならないでしょう。当然、未完の原作が題材である以上、何らかの決着を付ける場合に必ず着地点を用意しなければなりません。願わくば魅力的にできればな」といったところです。

## プロローグ（前書き）

息抜きの練習作。

推敲、校正が甘いのは仕様、だったのですが、あまりに酷いから改訂中。そこまできつちりじゃないので、あんまりだぜ、という所は遠慮なくご指摘ください。

そのうち直します。そのうち。

## プロローグ

### 第零話

ぼく、猫型ロボットでした。

意味不明なのは分かってる。でも、そうなっていた。

黄色い体は雪ダルマのような体型で、耳は猫耳がピヨコンと生やされ、手足の先は丸い形。まるでデフォルメされたぬいぐるみのようだった。

目を覚ましたのはベルトコンベアーの上。僕の周りには似たような黄色いロボットが山ほどあって、それらと同じ場所で流される僕。通路との境のガラス窓を見ると、黄色いロボットと同じモノが僕を見ている。近寄ってみると、そこに映る黄色のロボットも、僕と同じ行動を。

「こ、れはない……」

抜け出したベルトコンベアーの方に視線を戻すと、次々に現れる同規格のロボットたちが押し流されている。また、ある場所では立ち上がり、綺麗に整列したまま何処かへ歩いて行く。

僕はあれらと同じなのか。

「んなわけない……」



僕は僕だと断言できるモノを、確かに持っていた。

脳、というよりも記憶領域に、ある程度の基本的な動きや機能があらかじめインストールされている僕は、今の状態でも生活に困らない動きが可能となっている。全身の詳細なデータも頭に入っているし、現存する『道具』の情報も満載。

にも拘「かわ」らず、全身の3割ほどもある顔を見た時、僕の頭の中では無視できない強烈な違和感が湧き起こる。

そう、インストールされた情報に疑問を抱いた思考こそ、僕の自我を形成する情報からの産物。以前の暮らしを覚えている。この情報、これだけは僕自身だ。

悩みというか、戸惑い始めて数十分は経っただろうか、もっと現実的なことを考えなければならぬ。とにかく情報を。今は僕が何であるかよりも、これからどうなるのが重要だ。

室内は無人で、完全自動化された工場そのもの。その中で僕はまず、歩きながら人を探すことにした。少なくとも、ハードのメンテナンスや工場内の管理をする人間が、一人は居るはずだと考えたからだ。

そして、落ち着かない規則的な金属音を聞きながら、今の自分の事を考え続けて約30分が過ぎた頃、ようやく一人の中年男性を見える。

「あの、ちよつといいですか」

「うおつ。な、君は何をしとるんだ。なぜ勝手に出歩いて……もしや、プログラムの不具合でもあったのかい？」

なんとということだ。ガラスに映る自身の姿を確認してなお、胸の内にあった一縷の望みが、人としての尊厳が、学者風の白衣を着込んだ彼の言葉によりたった今、潰えた。討ち死にだよ、マイハート。

「……いえ、少しややこしい話なんです。聞いてもらえますか？」  
「おお、おお、構わんよ。向こうでお茶でも飲みながら聞こう。おいで」

そんな僕の想いも知らず、軽い調子で頷いてくれた彼に、少し感謝した。

連れられた先は給湯室と休憩所が一緒になった、工場と違い人間の味のある畳張りの部屋。そこで彼は急須と保温ポットと湯のみ二つの乗ったお盆をちゃぶ台の上に置いて、お茶の準備を始める。ふわりと漂う緑茶の香りが、僕にも感じられた。匂いフェチでは断じてない。ないったら。

「ありがとうございます」

「ふむ……おまえさんさつき出来たばかりなのに、情緒があるのかい？」

「それなんです」

僕は自らの見解や憶測を挟まずに、端的な僕自身の状況だけ伝えた。昔の記憶の中に、この世界の話がインプットされているという事実を隠して。

話を聞いた彼は剃り残した顎鬚をジヨリジヨリと擦ったり、頭をガリガリと搔いて考えに耽る。

「信じられないですね？ 僕も我が身でなかったら、どうだったか」

面白がつて話は聞くかもしれない。それでも、信じるか否かという話題に踏み込んだら、僕は考えるのを辞めてしまっただろう。おいおいって感じで。

しかし、彼の反応は違った。

「いやな、とかくこの世は不思議だらけだよ。起こり得ない事象など、存在せん。矛盾だな。

おまえさんも『道具』のデータは入っとるんだろう？ その由来や根源の情報までは入ってなくともな。アレらに使われとる『根源の力』は今だ謎だらけ。

滑稽な話だが、『道具』の力を使ってそれを知ろうとした学者が居てな？ そうしたら、新しい理論が出るわ出るわで、今でも全部は解明されてないんだ」

馬鹿げた『道具』の力による世界の懐の深さが、僕の存在を認める要因になってしまった。

「ふむ……なぜ、こうなったかを知ったところで、何の意味も無い。か。覚えてもないだろうしな。

もし、おまえさんが望むのなら、『道具』を手にした時は好きに使ってみればいいさ。

よし、これも何かの縁だ。仕事をやる。おまえさんそういう口ボツトだし、良い案だろ？」

パンパンと僕の頭を叩く彼は、とても親切な男のようだ。  
でも、そこ顔だからヤメテ。

そのような経緯で、僕は彼の働く工場に勤務することとなった。  
うんそう、僕を産んだあの工場だ。

この、僕にとって都合の良い話の流れも、件の『道具』のおかげ。企業経営や市民生活に余裕を持たせているのが、他ならぬその『道具』。使う権利さえ保有していれば、この世界で何に困ることもない、万能な物なのだ。

彼の言った通り、この世は今だ解らぬ力を使って繁栄している。それどころか、ほぼ制約のない道具を、不特定多数が無制限に使用していた。

なにせ、時間旅行もお手の物。研究によってタイムパラドクスの概念は否定され、代わりに多数の分岐世界の肯定が一般論となっている。シュレディンガーの猫はどう転んでも半分死ぬ運命らしい。その上なんと、犯罪にさえ使わなければ、過去の書き換えさえも咎められる事はない。社会は現社会に対する犯罪にしか罰則を設けておらず、分岐した世界まで管理しきれなかったのだ。

最初に力の根源を発見した人物は、「人類を終わらせた」と言っただけらしい。僕もその言葉には共感させられたものだ。

科学とは名ばかりの何かが、二十三世紀を牛耳っていた。

そして、僕はその力で自由を得る。

何故かははっきりと言えない。なにか座りの悪いという輪郭のぼやけた、それでいて強く拒否感を催す何か。それとも単にこの現実味の薄い未来都市を眺めると、ノスタルジーに惹かれる女々しい想いが先走ったのかも。

いずれにしても、僕は恩人への答えを心に決めた。

紹介された工場で、社会に貢献し続けて数年を数えたある日、僕は目的に必要な『道具』を手に入れる。『魔法を自由に創造できる道具』と『吐いた嘘が本当になる道具』という、出鱈目な能力を備えたものだ。

一体、誰が考えた？ いや、考えるだけならまだしも、実際に作るか？

科学者たちの欲望はのつぴきならないところまで来ている。そう、考えていた。

僕の吐いた嘘は数種類。作った魔法も数種類。

まず、それらの『道具』を自分に対してのみ有効なものとした。これは『道具』を使用する際、その影響を自分だけに留めるためであり、僕の持つ『道具』自体も、不特定多数からの影響を受けなくするためだ。

『魔法を自由に創造できる道具』で創る、言葉を鍵にした魔法の取り決めでは、決まった言葉を口にした者なら誰に対しても有効だ。それと同時に、魔法の解除条件である、『鍵となった言葉を逆から口語で言う』という決まりも、不特定多数の誰かで構わない。

この範囲指定を僕限定にしてしまう事で、弱点を取り除いた。もう一つの道具も似たような感じだ。

続いて『道具』の能力に頼るのではなく、二次的な能力を『道具』で創ることにした。その能力とは『想像、実在を問わず認識した能力の登録と使用』。暴発防止に言葉「キーワード」と想像「イメージ」による制限は付けている。

とんでもない理論展開ではあったものの、難なく僕に能力を付与できる辺り、この世界の『道具』はぶっ壊れていると改めて認識した。

法の抜け道も考慮して、最悪の事態にも備え、旅立つに問題のないところまで至った時、僕は彼に僕の考えを告げ、彼はただ一言「そうか」と返す。

僕の、ここでの生活は終わった。

そして今日、僕はこの世界を去る。

僕の猫型ロボット物語は、今この時が最終回なのかもしれない。それでも世界は変わらずに動き続けるだろう。僕という存在が途切れても、この先を継ぐ彼が居るから。

「バイバイ、後は頼んだよ」

軽く交わした別れの挨拶。  
相手は僕に酷似したロボット。

「任されたよ、元気で」

「ああ、君も元気で」

そして、お世話になった彼に別れを。

「おじさんも、お元気で」

「ああ、長い間、ご苦労さん。頑張ってくるといい、後悔のないようにな」

「はい」

僕は迷うことなく、扉「ゲート」に足を踏み入れた。  
何処かにある不確かな未来を求めて、僕の望みを探すために。

## プロローグ（後書き）

十話以上を書いたところで、世界観のクロス作品でもないから、タグを色々と弄りました。

少なくとも、ゼロ魔編で未来道具などは使用しない方針で固まったので。

行き当たりばったりも楽しいかな〜と考えて書きましたけど、不具合も沢山ですよね、そりゃそうですよね。ハハハ……。

## いちわ

僕は今、追われている。2メートルほどの体躯を持つ熊に似た動物に。

その熊（仮）はハアハアと荒い息遣いで、獲物（僕）の鼓膜とチキンハートを刺激しながら、その動物らしい円らな瞳では穴が開きそうなほど僕の尻を見つめ、完全にロツクオン状態だ。お尻だけはヤメテ。

一見すると鈍重そうな熊だが、その動きは印象を裏切る速さだ。少なくとも、人が熊と徒競走するとはば人の方が負ける。

よって、対処はまず熊から視線を切らない事から。これは警戒を悟らせて、熊に攻撃を許さないための手段。そして、そのままゆっくりと後退するといいい。熊の視線が途切れるまで油断は禁物だ。

しかしまあ、今更そのような正しい対処法に意味は無い。何故なら、扉「ゲート」の出口に居座る熊を目撃した僕はつい、反射的に逃走していたから。

「ええいつ！ うつとおしいつ！」

叫ぶように声を上げて反転。涎を垂らして追い縋る熊と正対する。よくよく考えれば、別に逃げなくてもいい。熊を止める手段くらいは持っている。突然の出来事に慌ててしまったが、それほど危機的状況という訳でも……多少はある、主に精神的な。

ともかく、少し大人しくしてもらえば、それで僕は全て事もなし、だ。

「>眠りの雲<」



その名の通りに、対象を夢の国へご招待する魔法。どここの世界の魔法使いでも、それなりに使うメジャーなもので、安全かつ穩便に敵を封殺するには有効な手段だ。

森の熊さんも例外ではなく、走っている勢いのまま顔から地面へ突っ込み、滑り終えた体勢からピクリとも動かない。辺りにはコーホーコーホーと大きな呼吸が響いている。

「はあ……いきなりこれか」

少しうつとおしく感じた長い髪を片手でかき上げ、盛大に息を吐く。サラサラと肩甲骨辺りまで流れる黒髪が、妙に気分を鎮めてくれる。僕の体のモデルとなった彼と、そちらの世界を思い出すから以前は完全に機械の体　螺子「ねじ」ではない　だった僕も、21世紀にお邪魔した時から人間と全く同じ形に変化していた。不可抗力でもあったし、僕の奥底にあった願いの形だったのかもしれない。いずれにせよ、今の僕は黒髪黒目の純日本人と言える顔立ち。

「森の中……ね。ここ、どこだろ」

溜息の数だけ幸せが逃げる、などという迷信を、僕は信じてはいない。でも、なんとなく吐きかけた息を押し止め、木の葉に覆われた空を見上げる。隙間から漏れ出る光の道筋はなかなか美しかった。

## 第一話

### 古きよき幻想世界

どこを見ても緑生い茂る暗鬱な、樹海に近い森。霧も多くて、マインスイオン豊富な健康スポットとして紹介されそうなほど。しかし、カラフルで危険そうな植物や、一目で魔物と断じてしまえる動物がうろついているのは、健康も癒しもあつたものではない。

扉「ゲート」をくぐる前に、下調べをしておけば良かったのだが、安全な場所にはかり居たせいで失念していた。ちよつと反省。

必要なのは最低限の情報だ。まず、現在地と周辺の地形。出来れば文化圏の特定が望ましい。全くの無人世界なら、再び扉「ゲート」を使つて移動する。誰も居ない世界など、僕はそんなのゴメンだ。魔法による飛行で、地形が分かる高度まで飛び上がり、肉眼で確認していくと、面白いことが判明する。眼下に広がる大陸は欧州に似ていたのだ。そして、驚く事に大陸の北部海上辺りだろうが、一つの島が浮いている。

「ラピユタは本当にあつたんだ……っ！」

独りでボケると、誰も突っ込んでくれない。急激な恥ずかしさで頭を抱え、ゴロゴロ転がること数分。ちよつとした寂しい気持ちになる。

落ち着いたところで、建物の多い地方へと移動することにした。飛んだままの状態でも、この荒地や畑の多い世界なら大丈夫。コソコソ隠れずに堂々と飛べるのも、なかなか悪くない。

そして、北部の海と湖の近くにある、比較的大きな都市に目を付ける。その上空でまず町全体やそこに住む人々の観察。

街の人は見る限り軽装。夏ほど開放的な雰囲気ではなく、春か秋かという感じ。また、全体的に簡素な服を着ている人が多く見られ、綺麗な服装の人はすべからくマントを羽織っている。

視線をずらしてゆくと、城のような建物が。いや、間違いなく城。

ブルグ。キャッスル。その城を囲むように建設された、いかつい城壁。見張りの塔だろうか、円柱状で背の高い建物が数本。城門の傍には槍を持った衛兵が、仏頂面で立っている。金属製の防具を着用している事から、荒事も考慮しているようだ。

「中世？」

先程の傷も忘れて、ひとりごちる。

電気が存在しない町であることは明白で、更に中世欧州風味の外観。大きな城もある。衛兵の持つ武器が槍という事実も、何気にこの世界の技術を物語る要素だ。

「あとは……町を見てみるかな」

> 変身くの魔法で、先ほど見た町の人と似た服飾にしておき、意気揚々と町の近くに降り立つ。多少の認識障害も仕込んでおいたから、誰も僕に関心を払わない。

僕は周りの人たちを追って、町の入り口まで歩いた。

目の前に広がる通りは、様々な物を売る店が軒を連ねており、商品の木箱や日除けの傘などが通りへ飛び出していた。店員は時折、道行く人に向かって商品の名前や値段を叫び、客引きに精を出す。

街に活気が満ち溢れ、人が生き生きしている。数字のやり取りだけでなく売買を済ませ、機械的に家へ配達されるような生活じゃ味わえないものが、そこにあった。

ついでに言葉が通じていないと分かって、> 言語翻訳くの魔法を使う。こんなにやくは必要ない。

「おっちゃん、これいくら？」

洋ナシに似た、ひょうたん型の果物を持って聞いてみる。

「んー10ドニエだ」

単位が意味不明だ。

それを確かめるために、近くの客を観察する。じーっと見ていると、何か手に取って店の主人へ金貨を渡した。

とりあえず、僕のすべき事と言えば、金貨の解析と複製。10枚ほど創った金貨を見ても、特に偽造対策などは見られない。金も純度の高いもので、混ざり物は少ししか入っていないかった

「ほい、おっちゃん、コレでいいか？」

「あ？ おうつ、なんだあ？ 今日金貨ばかり出てくるな」

「ごめんごめん、それしかないから勘弁してよ。数は……25個ほど貰うからさ」

小物を買うのに、どう考えても3つの貨幣の中で最も価値のありそうな金貨を出せば、店の方もつり銭で困る。

「ああ、それならな。……ほれ、釣りは70スウと50ドニエだ。袋は持ってねえのか？」

「うん？ あ、ないね。なにか適当なのある？」

「仕方ねえな。これ、古いがまだ使えるだろ。持ってけ」

「ありがとう、また来るよ」

つり銭で単位などは分かった。銅貨がドニエ、銀貨がスウ、金貨は知らない。価値は金貨1枚で銀貨100枚、銀貨1枚で銅貨100枚だろう。果物に見るドニエの相対価値は10ドニエで果物が1個。それ以上は果物の価値を知らないと、判断が出来ない。

買った果物は4次元に放り込んでおいて、お金だけは袋に入れて

持ち歩くことにした。

次は近くの服屋にも寄ってみる。

周りの人と比較しても、僕の服におかしな部分は見当たらないはずだけど、現地に売っている服ならより確実と言える。なにより、気を揉まずに済むっていう。

「ども、こんちわ。僕くらいの年代の人に人気の服とかある？」

店先の椅子に座っていた、眼鏡の老婆へ尋ねる。

ふと、人の良さそうな彼女の顔が、訝しげな表情へと変わる。一体どういう事なのだろう。僕が何か妙な事を口走った、とは思えないのだが。

「うちは平民向けの、安い服ばかり置いてるからねえ。人気の服と  
言われても困るよ。」

大通りを城の方へ行けば、貴族様にも卸してるような店があるから、そっち行ってみたら？」

平民と貴族。

あの、歴史の教科書に少しばかり登場する、あの貴族か。通りを歩く人の中に居る、綺麗な服とマントを着用した人間を指して貴族と言っなら、確かに納得しそう。これはなかなか興味深い。

「ん、分かった、行ってみるよ。お邪魔したね、案内ありがとう」  
「あいよ」

老婆に礼を言い、とりあえず言われた方向へと歩を進める。

平民と貴族という概念が存在していて、大きな城が町の傍に居座っている世界。これはもう中世の、しかも欧州と見て間違いないだ

ろう。大陸の形が変形しているのと、「天空の城」が実在するのを除けば。

言われた通りに大通りを城方面へ行くと、先程までの街並みと違い、建物の様式や外観が洗練された雰囲気を持つ地域に様変わりする。綺麗な印象を与える店が多く建ち並び、その客層も貴族が中心のようだ。

道まで突き出たカフェテラスに居るマントを着けた若者たちが、談笑しながら優雅に紅茶を飲んでいる。その仕草は確かな教養を感じさせ、人に見られるという意識を表しているように見えた。

そこを通り過ぎて更に行くと、立派な商店街。その中の一つに目的の服屋もあった。

「ども、こんちわ」

「いらっしやいませ。今日は何のご用件ですか？」

応対する店員は立派なスーツを着ている男性だ。髭を伸ばして正装したその姿は、ともすれば男爵と表現されそうな、長身細身中年。マントは着けておらず、貴族というわけでもないらしい。

「僕くらいの年代に人気の服とか、おすすめがあれば教えて欲しい」

言い終えた時、若干ながら意気消沈した彼の様子が見て取れた。僕が貴族ではないから、という理由であろうが、店員としてはどうかな。

「平民のお客様とは……驚きましたよ。」

確認を致しますが、ご自分の服をお探しですか？」

不躰な質問だ。

「もちろん」

「ですが、当店の服は貴族様への販売が主でして、少々値が高くなっております。

ご予算の方はいかほどでしょうか？」

再三にわたる無礼、この人はもしか、僕を追い払いたいのか。平民の財力と貴族のそれとは、桁が違っているという線もある。最悪、京都でお茶漬けをすすめられた客のような立場が今の僕、かもしれない。

しかし、例えそうだとしても、来たばかりの人間がローカルルールまで知るものか。いいだろう、お茶漬け結構。喰らってやる。

「この金貨を100枚ほど」

1枚だけ取り出し、親指で弾いてみせる。

すると、男爵（仮）さんは姿勢を正し、間を置かずに返答してきた。

「大変失礼しました。では、こちらへどうぞ」

促されるままに店の奥へ。何か釈然としない。

あの片手で5個から10個は持てそうな果物を、10ドニエで1個とするなら、1ドニエは1円くらいだろうか。男爵（仮）さんの豹変ぶりを見るに、金貨の価値が1万円以上の可能性が高い。これは失敗したか。

「試着用の服を用意させておりますので、少々お待ち下さい。

今の内に寸法を取らせておきましょう。お体に合わせて手直しをしますから」

現れた女性店員が手早く採寸にかかる。

僕の尻と胸、身長、股下を、遠慮がちな彼女の手が這い回り、無事その役目を終えたようだ。

「股下が86センチ。身長178センチですね。ウエスト65センチ、長身の方にしては細いですね。」

黒い御髪と瞳も珍しいものですが、この服とよくお似合いですよ。」

また単位が。ポンド法みたいなものですかね。

「参ったな……」

「は？ どうかありませんか？」

呟く声が届いてしまったようだ。

「あ、うん。『センチ』って長さの単位だろう？ どうも、僕の国と違ってみたい」

「あら？ やはり東方からいらっしゃった方なのですか？」

「まあ、そんな感じかな。どうしょ」

トウホウね。「東方」ならそのまま東の方。

彼女の様子からすると、少し珍しそうな感じだから、国交が断絶している状態なのかもしれない。無理もないか、中世欧州と東洋の交易は難しい。

「文字の読み書きはなさいますか？」

「そっちは問題なく」

読み書きの出来るかどうかを尋ねる、という事を逆説的に考える



と、読み書き出来ない可能性が高い、という事になる。

昔は聖職者と商人、貴族、騎士、などの一部しか文字の読み書きを出来なかったはず。もちろん、僕の元居た世界での話だが、ここでも的外れというわけではなさそうだ。

「でしたら、王立図書館の方でお調べになってはいかがでしょう？」

これは僥倖……っ！

便利なものは利用するに限る。

「場所を教えてもらってもいい？ 服を選んだら行ってみるよ」

「はい、後で町の地図をお見せしますね」

「ありがとう」

服など、どうでもよくなってきた。

図書館の本で知識を補填しなければ。この世界の事を記した本が僕を待っている。ここで最低限の一般常識や、こちらでも使われている技術の存在を確かめよう。

そんなわけで作って来たのは王立図書館。王の名を冠しているだけあって、素晴らしく豪華で大きな、見る者に圧力の掛かる外観だ。王権の誇示とでもいうのか、特権階級の見栄はこういう場所でも発揮されるものなんだろう。

それは大いに結構なのだが、この建物に果たして平民は入れるのか。

最悪の場合は自称「いつでもどこでも検索エンジン」という名の

万能な情報媒体 別に物体がある訳ではない で、欲しい知識を引っ張ることも検討する。しかし、無駄こそ楽しむべきだから、出来るだけ使用は避けたい。

ここは一つ、穩便に済む方法を採用する。

「スニーキングミッションスタート。＞姿消し「インビジブル」＜

問答無用の消える魔法。

我ながら汚いが、誰もが幸せになれる方法なのだから、細かいルールは置いておく。僕も好きでやっている訳では…… 多少ある。

得てしてこういった場合、様式美が大事になってくるものだ。

例えば姿は消しても、音や体温はバツチリそのままだったり、人の居る場所で蹴っ躓いたり。他にも枚挙に暇が無いほどの「お約束」が存在する。

そこを蔑ろにする心算は無い。

ガバツと大胆に開けた入り口を通り過ぎ、足を踏み鳴らしながらガンガン先に進む。

背中がぞくぞくするほどの緊張感と背徳感は、見つかるかどうかの瀬戸際で発揮される。偶発的であれば尚良いが、流石にそこまでは求められず、仕方なく故意にギリギリ感を演出。

「……何か、聞こえない？」

「え？ 君じゃなかったのかい？」

若い男女のカップルがこちらに視線を向けるも、見破った様子はない。そう、君たちがリア充ならば、僕も君たちを餌に充実させてもらう。ぬははっ。

さて、トラブルは期待しているものの、遊んばかりもいられない。図書館に潜入した主旨は、本の閲覧による一般常識、及びお役立ち情報の入手だからだ。

本棚の高さや長さを見るに、本の数はかなり多い。

闇雲に探したところで、良い情報を得る事は難しく思え、ならばと探查系の魔法を使う。何処に欲しい情報が眠っているかだけ調べ、非常に限定された効果の魔法だ。や、メディア問わず探查してくれるお陰で、意外に重宝するのですよ。

「おー、あつたあつた」

特定の語句にヒットする本だけを検索。僕の視覚に光って見える本を全て手元を集める。

次は同時に10冊以上の本を閲覧出来る魔法を使用。どこの読書馬鹿が考えたんだと、少し突っ込んだりした魔法だが、これも便利なのだ。情報が直接頭に入ってくるお陰で速読となり、必要な情報にヒットしなければスルーする事も出来る。

今必要ない本は他の情報媒体に複写。そのうち必要な時もあるだろう。

「>ディテクトマジックくあ、あなた、なんですか!」

「のおつく! あ、いえ、こんにちわ、マダム」

どうも発見されたらしいから、素直に姿を現しておいた。

しかし、注意してきたおば様は、突如として冷静な面持ちとなり、僕の方をジッと見つめている。不穏当な表情をしているが、なんぞ。

「未婚ですわ」

「これは失礼しました、ミス」

ほんと、失礼ですよね。

見た目が少し太めの、眼鏡をかけたおば様だったから、ついマダムと言ってしまった。

「それで？ これは何ですか？ 悪戯をなさるようなら、罰を与えねばなりません」

先程のカップルか、ちくしょう。

「いえ、申し訳ありません。特に騒いでは居ないのですが、驚かせてしまったようで」

「まったく……次は魔法禁止の処分とさせていただきます！」

彼女はぶんぶんと怒って去って行った。

魔法って、あれ？

「魔法あるのかよっ」

誰も居ないのに、掌で突っ込みを入れてしまった。

これは好都合というか、魔法関連の本も出来れば全部コピーして覚えてしまおう。この世界の魔法を使っているなら不自然な事は何もないのだから。

そんなこんなで読書に集中し始める。

静かな図書館もたまには良いものだ。

にわ

青い空の色に朱色が混ざり始めた頃、僕は漸く図書館から開放された。道に街灯もそれほどないため、建物の影で暗くなった通りは、家から漏れる明かりで照らされている。

多少、疲れてはいるものの、見合うだけの情報は手に入れた。満足満足。

しかし、考えていたより遅くなっていた。僕は急いで服屋へ向かう。

到着した店の外では、男性店員が仕立てた服を携えて立っていた。僕の姿を確認した彼は、微笑みながら遠慮気味に手を振っている。

「ごめんごめん、少し長引いて」

「いえ、ご無事でなによりです。王都とはいえ、夜に一人歩きすれば、よからぬ事に出会います」

「気をつけるよ、ありがとう」

出来上がった服を受け取るついでに、今からでも泊まれる宿の場所を聞くと、彼も僕が貴族ではないと知っていたからか、平民でも入れる店を紹介してくれた。

「御代は92エキューとなります」

なんですとっ！？ ちょ、ちょっと待て、待ってくれ。図書館で学習した僕は知っている。エキューとは金貨だということを。そして、平民の年収が大体120エキューだという事を。

オーダーメイドでもない服が、92エキューだと……。これがよく耳にする「後悔先に立たず」か、不覚。

「……はい、丁度ね」

「ありがとうございます。今後ともごひいきに」

良くしてくれたことに感謝はしても、素直にサービスの良い店とは言えないのが残念なところだ。少なくとも、店で男を見た時まではその感じていたというのに。

この値段設定はなんなんだ。貴族はバケモノか。

気落ちしながらも教わった道を往き、間もなく辿り着いたのは「魅惑の妖精亭」だ。

酒場、飯屋、宿屋を兼任する店で、明るく素朴な木造。両開きの扉は欧米の西部開拓時代を思わせ、この外観だけ見ればマカロニ・ウェスタンの世界。

中へ入ると目を惹くのが、性的な意味できわどい格好をした女の子たち。笑顔と挨拶で迎えられ、木製の円卓までご案内。彼女たちはお酌もするし、話し相手にもなる。

それも、完全に無料というわけではなく、チップ制。羽振りを良くしていれば、客も女の子もそれなりに楽しめるようで、貴族の客も多い。

しかし、そこで勘違いをしてはいけない。同意の無いお触りは禁止だ。

店のルールを破ると、店長の接客を受けるハメになる。スカロンという名の、筋肉質な髭オカマがその店長だ。彼は自らを「ミ・マドモワゼル」などと呼ばせ、クネクネしながら厚化粧の顔で笑顔を振りまいている。

食事中にその彼が話を振ってくるから、仕方なく宿の話をする、快く空いた部屋を用意してくれた。いいから、あっち行ってくれと、心の中で愚痴っておく。僕が何かしたのか。

## 第二話

世の中のことわり

ハルケギニアと呼ばれるこの世界には、五大国家がある。

大雑把に言えば、西にガリア王国、東に帝政ゲルマニア、その間に今、僕の居るトリステイン王国。ここから少し北の空に浮かぶのがアルビオン王国。南にロマリア連合皇国。

領土の広さは圧倒的なまでにガリアとゲルマニアが広く、アルビオンやトリステインなどはその二大王国の10分の1ほどしかない。ロマリアはそこそこ。

それぞれの国の支配体制はロマリアを除き、王制と断言していい。例外のロマリアは系統魔法の始祖「ブリミル」を崇めるブリミル教の総本山であり、指導者もその教皇。

一般的に貴族とはメイジを指す。メイジとは系統魔法を使う者のことだ。彼ら貴族や王の社会的な立場を一言で表すと、支配者。

それに対して、一般的に魔法を使えない人が平民と呼ばれる。当然、平民は被支配者。高い租税を取られて所得は低く、身分も低い。

語弊を恐れずに言うなら、魔法という技術を支配者層が使う、封建制度チックな社会。これを6000年も変わらず続けているのが、このハルケギニアと呼ばれる西欧と東欧を含めたような地域の特徴だ。

図書館で学んだ基本的な知識の中で、このように大きな視点でのあれこれ把握できた。しかし、本で得られる知識というものは概ね貴族寄りで、一般常識とは言えない。それもそのはず、読み書き出来る人しか書けないし、読むのも文字を読める人。平民の識字率

は低い。

そこで、暫くの間はこのトリステイン王国の王都であり、僕の現在地でもあるトリスタニアで生活をしながら、一般常識を学んでいこうと考えている。

この町では武器屋、秘薬屋、賭博場などの、普段は行かないようなお店が沢山あるようだから、それらを中心に観光がてら町歩きだ。

そして、僕が最初に向かったのは賭博場。

金持ちと荒くれの集う法の外側。賭け事に関わる場所が、間違っても健全であり得ない。とは、僕の思い込みかもしれないが、全くの見当違いということもないはずだ。

宿屋の　ゼルダの大妖精が男になったような　主人からその場所は聞いておいた。午前中でも賭場が開いているかは知らないが、もし閉まっているなら他へ回るだけだ。

つらつらと考えながら裏通りをしばし歩くと、すぐに辿り着いた。その扉の脇には見るからに物騒な男が立っている。

茶系の短髪で、身長は僕より10 سانتほど低く筋肉質。無精髭を片手で撫でながら、薄笑いを浮かべながらこちらを観察していた。用心棒や傭兵の類だろうか、剣を携えてその場所から動こうとしない。

「やあ、今もやってるの？」

「ああ、まだ客は少ないがな。おまえさん、良い服を着てるな」

僕の体を下から上まで舐めるように視姦した男は、何かを納得するように繰り返して頷き、手で顎を摩っている。

「若いな。金は持ってそうだが……平民だろ？　あまり熱くなるんじゃないぞ。貴族でも負けが込んで、借金までしてる奴を知ってる



ぜ。博打つてのはな、引き際が大事だ」  
「忠告ありがと」

意外に親切な男の横を通り抜け、賭場の扉を開けた。

中は全体的に薄暗く、酒や煙草のにおいが漂い、独特の空気感を醸し出している。適度な間隔で並べられた木製のテーブルの上には、魔法で明かりを灯す工芸品が置かれ、その傍に数人の人が座っていた。

僕はすぐ傍のテーブルに着き、先客と店員の様子を観察する事から始めた。

「初めてですか？」

「そうだよ」

「ならば、少しルールを説明しましょう」

遊びを続けながら、説明もこなす彼の言うことをまとめると、このテーブルで行われているのはサイコロ博打。いわゆる、チンチロリンと言われるもの。役は決まっているし、親や子といった概念もある。

「おっしやつ！ アラシだぜ！」

隣に座る貴族風の男も、同じ卓で遊んでいる。

身分の差を気にはしない、というよりも、僕を視認していない気がする。

「今日は勝つぜ」

「ははっ、参りましたな」

あまり困った素振りも見せず、そのような言葉を返したのは胴元

の、つまり店側の雇われ従業員。何人が全く同じ黒のスラックスと上着、そして白のシャツにネクタイ姿の人物が居るから、彼らの制服なのだろう。

「む、揃わないな。次はおまえもどうだ？」

「あー、悪いけど持ち合わせが少なくて。子が分相応なんだ」

親は子の賭けた金額を、役に応じた倍数だけ払う義務がある。もちろん、勝てばよいのだが、そう上手くはいかない。普通なら。僕のパスにより、親は店員に渡る。そこで、貴族風の男がやらかった。

「これで、昨日の分はチャラにさせてもらっぜ」

賭けた金額が桁違いに多い。具体的に数えるのも面倒だが、1000エキュー近く。

しかし、店員の顔に焦りは見られない。

「これはまた…… よろしいのですか？」

「どうせあぶく銭だ」

負けたことをもう忘れてる。これが賭け事にハマる人間の性というものか。

「分かりました、ではいきますよ」

宣告した彼の掌が、スツと手首から袖口まで隠すように動いた。その手にはサイコロが握りこまれ、茶碗のような形の物に賽を投げ込むべく開かれる。その手から落ちたサイコロは互いにぶつかり合い、自らも回転を続けながら、運動エネルギーを消費してゆく。

問題はその回り方だった。人の肉眼で把握するのは困難かもしれないが、サイコロの重心がブレている。一定方向へ向かうよう、予め設定されているかのように。

そして、出た目は……。

「2のゾロ目、アラシです」

「くっそっ、おい、こないだも大きい勝負で出してなかったか？」

「長くやっておりますから、そういったこともありますね。」

疑う気持ちが起こるのは仕方ありません。しかし、私はメイジですらありませんよ」

肩を竦めて、負けた貴族風の男を退ける。

そりゃ、系統魔法の>操りくでも使えば、こんな遊びは成立しない。それは店側も客も理解している。だからこそ、入店時にメイジは杖を預けなければならず、店内での魔法は事実上禁止なのだ。

とはいえ、魔法を使わなければイカサマが出来ない、などという言い分には何の根拠もない。貴族の思考を袋小路に誘導するための、詭弁のようなものだ。

「くっ、倍付けか……」

サイコロ博打では同時に3つの賽を投げる。ゾロ目、即ち3つが同じ出目であるとき、「アラシ」という名の役が成立。その時の取り決めとして、賭けた金額の倍額を払わなければならない、とある。彼は2000エキューに近い額を払うことになったのだ。

だが、忘れてはいけない。店員の使ったサイコロに、仕掛けが施されているということ。

彼は手品師のやるような手管でもって、僕たちの注意を引き、その間に件のサイコロを回収した。もっとも、僕が確認している時点

で試みは失敗と言える。

気付かれさえしなければ、イカサマも一端の技術。そしてそれを、賭場の胴元が認めるといふならば、僕が遠慮してやる義理もない。そつ、「リミッターを外させてもらつ」というやつだ。

店に入ってから2時間余り。お腹も空いてきたし、頃合いかと博打を止めて席を立った。僕を見送る店員の顔は苦々しく、それでいて笑顔を作っている。

陰気な賭場から外に出ると、暖かい光と新鮮な空気で生き返った気分。軽く背伸びをして空を見上げると、昼まであと少しといった位置に太陽が来ていた。

賭けの勝ち額は上々だ。

さて、手持ちの金も増えたところで、秘薬屋と武器屋へと向かう。大通りから少し狭い路地に入っただけで、手前が見えた秘薬屋。その少し奥に武器屋の看板も見えている。

大抵のお店で使われているこの看板。文字が書かれている事はほとんど無く、商品象徴するようなマークなどで店の種類を表している。これは文字の読めない人が多い時代に、多用された文化。

手前の秘薬屋の扉を開くと、棚に置かれた色とりどりの壘が見えた。

薬の中には法で売買が禁じられている物もある。大まかに言うと精神感応系の強い薬。幻惑、惚れ薬、心神喪失させる薬、その種類は様々。だが、原材料の取引までは合法。素敵な法ですね。

主人は接客する気がなさそうだから、早々に秘薬屋を出た。何を

しに來たのか分からない。僕も何故、この店へ入ったのか分からなかった。

武器屋は秘薬屋を出てすぐ目の前だ。

両開きの扉を開いて中に入ると、カウンターの向こうに座った主人が肘を突いている。億劫な眼差しでこちらを一瞥したあと「らっしやい」と抑揚のない挨拶を寄越し、そのまま眼を閉じた。

「勝手に見させて貰うよ」

「ああ」

全く興味のなさそうな主人を捨て置き、店内に並ぶ多くの武器を物色。

まず探査魔法を使って魔法の反応を示す武器を探した。系統魔法があるのだから、魔法の武器とか防具とかあってもおかしくないという、至って単純な考えだ。

しかし驚いた事に、置いてある武器のほぼ全てが反応。歩けば当たる状態。なんぞこれ。

「主人、武器に魔法がかけられてるけど、これは？」

「おまえさん、メイジだったのか？」

そりゃあたりめえだ。武器が壊れちゃ話になんねえからな、大抵の武器は作ったメイジが>固定化<を掛けてんだ」

>固定化<とは、好ましくない状態変化を防ぐことが出来る土の系統魔法。詳しくは調べても解らなかつたが、剣に掛ければ100年単位で経年劣化を防げたりするし、食べ物に掛ければ腐らない。

実に魔法らしい、理屈の通用しない類のものだ。曰く系統魔法はイメージが大切。で、その最たる魔法がこれ。

効果の強さ、持続力はメイジのレベルに依存するらしく、ドット

メイジの>固定化<では、鉄が折れるほどの衝撃をカバー出来ないかもしれない。

「値が張るんじゃないの？ メイジに労働させると」

「ああ、武器の値段のほとんどはメイジの懐中だ。

土の魔法なら、ドットでも一瞬で剣の完成だぜ？ 平民の鍛冶屋は商売あがったりだ。今じゃよっぽどの物好きくらいしかやらねえよ」

店内にある武器は大半が幅広の剣やレイピアのような、腰に差しても不自然でないもの。

メイジの大半が貴族だから、作られた剣も儀礼用や決闘用の形にされるのだろ。平民の実用を考えると、重量もそこそこある鈍器に近い大剣が売れそう。>固定化<さえ掛けておけば、「斬る」方の剣でも耐久性に問題は出ないかもしれないが。

置かれている剣を1本手に取り、試しに値段を聞いてみることにする。鎧に叩きつけても平気そう。120サント前後の大剣だ。

「これ、いくら？」

「あー、そりゃ150だったか、新金貨なら200だな」

新金貨。名の通り、最近になって新しく作られた金貨なのだろう。それにしても、主人の言う大剣の値段はかなり高額だ。

「平民の年収超えてないか？ 120エキューくらいって話だろう？」

「農民ならそんぐれえかな。農作物は税がたけえから、作っても作っても楽にならんよ。」

傭兵は命を張る仕事ってのもあるが、雇うのは金持ちか貴族だから、給金は高いぜ」

僕が見たのは領主の経営だかの本。その中の記述では、農作物を中心に、家畜や狩猟で獲れる動物など、様々な物が税として徴収されていた。農民の年収はそれらの相場から推察されたもので、実際のところかなり曖昧。

そうは言っても、92エキューの服は流石に高価な物だが。ちくしょう。

「それに剣を作ってくれる奴ってのは貴重だ。鍛冶屋はメイジの陰で物好きしかやらねえし、貴族様は平民の武器なんざ作ってくれねえからな。全く、生きずれえ世の中だぜ」

小声で「あーやだやだ」などと追加の恨み言を垂れ流した主人は、カウンターで突つ伏してしまった。接客しやがって下さいよ。

直後、後ろの方から男のだみ声が聞こえてくる。

「なーに言つてやがる。値段の半分はてめえの懐だろ」

振り向いても人は居ない。しかし確かに後ろから声が聞こえた。声が魚屋の発声っぽかったせいで、心霊現象の心配はしていないが、これはどういうことか。

「デルフ！ 客が居る時は喋るなつつつといたろうが！ 折うちまうぞー！」

「へっ！ やってみやがれ！ いっそ折れちまった方が清々すらあー！」

折れたり錆びたりした廃品の詰まっている箱から、カタカタと鈍い金属音が鳴っている。そこを軽く漁ると、長さ150センチほどの抜き身の大剣が出てきた。確かにツバの部分にある金具が上下に

動いて、金属音を鳴らしている。

「喋ってるのはこの剣か？」

「ああ、そいつはインテリジェンスソードつつてな、どこぞの酔狂な貴族が喋れるようにしちまったらしい」

「おう、坊主みてえなモヤシが俺様を使えるわけがねえ。放しやがれ」

や、草食系男児な風貌を否定はしないけどさ。そこまで言われると僕も若干ながら、米神あたりがピクピクしてくるわけ。

「上等。主人、こいつ引き取ってやるよ、いくら？」

手を額に当てて天を仰いでいた主人がこつちを見て固まった。間を置いているというより、値段を考えてなかったな。今から皮算用しても、駆け引きなんて出来ないぞ。

「1000でいいぜ。この鞘はサービスだ。もってけ」

「おい、やめる坊主」

「くくつ、元気だな、デルフよ」

大剣にしては安値だが、錆びているのは減点。それでもインテリジェンスソードなら魔法的価値を踏まえて及第点か。鞘もサービスだし、妥当と言えば妥当。

主人はデルフの方を見て、嘲るように笑っている。

「てめ、俺の話聞いて」

鞘に差すと喋れなくなるらしい。ギヤーギヤー喚いて煩わしいから、ほとぼりが冷めるまでこの状態にしておく。もう少し冷静にな



つてくれたら、色々な話も聞けるはずだ。

「主人、ありがとう。また来るよ」

「まいど」

店を出ると太陽も真上から傾いている。

いつもより遅い昼食をとるために、魅惑の妖精亭へ移動を開始。暫くはあの変態店長の居る宿でお世話になるから、昼のご飯もそちらで食べることにしているのだ。

それにしても、このハルケギニアは中世欧州よりも多様な格差がある。

魔法が技術として優れているのは間違いないとしても、メイジの大半が貴族からしか生まれない。その上で、魔法至上とも言える文化形態だ。

宗教という観点でも、それは顕著に表れている。系統魔法の始祖「ブリミル」が神の如く崇められ、王を名乗る権利があるのはその始祖の血族のみ。王はその考え方により、地位を確固たるものとしているし、宗教国家ロマリアでは存在意義そのもの。

全てのベクトルが貴族にとって都合の良い方へ向き、平民には見向きもしない。この世界の科学技術レベルからすると、豊かな生活と言えるかもしれないが、立場は全く違う。それは比較的豊かと言える、商人たちの話でも明らかだ。

ま、だからと言って、善い悪いでは語れない。

ただ、僕の周りが安寧に暮らすということすら、なかなか難しいことなのかもしれない。そう感じた。

さんわ

トリスタニアの賭場で荒稼ぎを始めて、数週間が経過した。今のところ僕の周りは平穏で、深刻なトラブルなど発生していない。

しかし、その兆候は見え始めている。

例えば、いつものように稼いでいると、店に居る監視役の傭兵が裏へ回って報告していたり、オーナーっぽい人物が僕の隣に座って、脅しとも取れる会話をして行くような事もあった。

初日に店員のイカサマを確認して以来、欠片も遠慮せずに稼いだ金は相当なもので、平民ならば、一生遊んで暮らせるような額にまで達している。

不自然な勝ち方をする僕に対して、胴元の対応は緩やかなもの。それを考えると、やはり賭場の利益は目も眩むような額にまで及んでいる、と考えるのが妥当か。僕の儲けた額で、少しは赤字の辛さを思い知ればいいのだ。

今日もまた、僕は賭場から金をさらいに行く。彼らの実力行使が起こる寸前で逃げる、ある種の「ピンポンダッシュ」的な刺激を求めて。手段とか目的とか、細かいことは他所に置いて。

### 第三話

#### 争う理由

「おい、待て」

いつものように賭場へ来ると、よく表に立っている男から声をかけられた。彼の顔は真剣そのもので、ある種の緊張感が伝わってくる。

「今日から傭兵の数が倍になってる」  
「それが？」

惚けてみせる。

こういった場合、積極的に聞こうとすればするほど、情報に付加価値が出てくる。もしも、彼が売りに来た時、取引条件が厳しくなってしまうのだ。

「酒場で噂になってるぜ？ 『賭場で一人勝ちしてる奴が居る』ってな。おまえさんのことだ」

義理もないのに警告してくれる。この傭兵は初日にも引き際を忠告してくれた人物だ。荒くれに見えるが、根は善い人なのかもしれない。

「賭場のイカサマは暗黙の了解つつつか、皆も疑ってたんだが証拠をつかめてねえ。でもよ、おまえさんの様子だと、分かっているって吹聴してるようなもんだ。……見破ったろ？」

オーナーはビビってたぜ。貴族を相手にイカサマで勝負してたって証拠が拳がれば、間違いなく投獄。下手すりゃ死罪だってある。ま、それで今日になって倍の傭兵を集めた。後は簡単、だろ？」

単純なセオリー。

「知ってる人間が居なくなればいい」

「そういうことだ」

確かにやり過ぎた感はあるが、向こうは最初からイカサマを前提に勝負しているのだ。他の客を根こそぎ集めて襲ったりしないだけ、僕は優しくないかな。

「ふふつ、忠告感謝する。対策はあるから心配いらない。  
あんたの職はなくなるけど、恨まないでね。これ、お礼」

懐のポケットから、金貨1枚を差し出す。

彼は嬉しそうな顔も、不満そうな顔もせず、静観するような感じだ。

「……そう言うんならな。職はまた探すさ」

肩を疎める彼に手を振り、賭場へと向かった。

今日は忙しい日になりそうだ。

目の前のテーブルでは僕と店員、貴族風の男の計3人が、お碗のような物に投げ入れられるサイコロを見つめている。というか、また来たのか、この貴族風の男。

彼は見た感じかなり若く、僕より身長も体格も大きい。金が余っているのかな。

「今日もツイてますね、ミカドさん」

もうとつくに、顔と名前は覚えられている。近頃はテーブルに着くだけで、非常に嫌そうな顔も寄越すようにもなった。チップくらい渡してるっていうのに、まったく失礼な連中だよ。

「まだ、勝負はこれからでしょ」

隣の貴族風の男もそれなりに頑張っている。勝っては負けてと繰り返しているが、一喜一憂するその姿からすると単に賭博が好きなだけなのかも。褒められた趣味とは言えないし、開店から居るというのも貴族としてどうかと思うが。

いつものより露骨に勝ちを重ね、2時間も経った頃には万の単位まで達していた。

そして周囲の目が集中し始めたところで、正装した小太りの中年から声が掛かる。

「失礼、ミスタ・ミカド。私はオーナーのオデムと申します。

ここからはレートを上げた勝負をしてみませんか？ 趣向の違ったゲームをご用意しましたので」

彼の後方には正装した体格のよい男が2人。大方、雇われた傭兵か何かだろう。

ゲーム自体はこつちも願ったりな提案だから、ここは乗っておくことにした。

「分かりました、やってみましょう」

「ではこちらへどうぞ」

彼に案内されたのは12畳ほどの広さの洋室。

床に敷かれた赤い絨毯の上を歩くと、凹む感覚が新鮮だ。他に高

そんな骨董品や絵画などは見当たらないが、置かれているテーブルと椅子はなかなかの物。

椅子に座っていた精悍な顔つきの男が僕を見て立ち上がり、軽く会釈をしてテーブル向かいにある椅子を勧めてきた。彼は席に着いた僕を見て、口元を緩めている。

「若いな」

当然。永遠のハタチは伊達じゃない。本来の年齢など知りもしないが、肉体年齢に精神年齢が引つ張られるだとか、そんな理論があった気がする。それ、採用。

「ゲームはこのカードを使う。ポーカーというが、知っているか？」

「ああ、念のため細かいルールを説明してもらおうか。それと、オーナーの……」

名前忘れた。

影が薄いんだもの、豚君。

「……オデム」

「ああ失敬、オデムさんね。

賭け金はここに持参している分だけ。後日の支払いは認めない。それでいいかな？」

「いいでしょう」

彼はパンパンッと大きく2度、手を鳴らす。すると、若い男が部屋に入ってきた。

オデムは男に金の用意を命令すると、すぐに退出してゆく。

「説明を始めるぜ。まず、役はこの表に全て書いているから、確認

がてら見ておけばいい。

次は賭け金の上乗せ。最初は1エキューでゲームが開始され、集まった手札に合わせて賭け金を上乗せする。最終的に親が子と同額を賭ければ、手札を見せ合って勝負。子は同額を賭けても、親が更の上乗せした場合は再び賭け金の上乗せが必要になるな。

降りる時はいつでもその場で言えいい。もちろん、負ければ金は持つて行かれるがね」

金持ちに有利すぎる。

「賭け金の上限は？ 無制限に上乗せされちゃ、僕は子の時に勝負すらせず負けるだろ」

「上限は1万エキューでいくか。サイコロで数万は稼いだって聞いているぜ？」

「ああ、それでいい」

目の前の男の説明が終わる頃、部屋に戻って来た若い男2人とオデム。

男2人は大量の金貨が入った箱を持って来ていた。その中には少し見ただけでも10万エキューを超ええると思えるほどの、大量の金貨。しかも全て旧金貨だ。

「いかがですか？」

「いいですよ。では始めましょうか」

僕の所持する金貨の入った皮袋を足元に置く。

中の金貨が擦れ合う音は鈍く重い。しかしオデムや周囲の男たちにとっては、何より艶やかな音となるのだろう。

彼らの顔は酷く歪んで見えた。

僕は開始から勝ち続け、掛け金の上限もなくなっていた。

足元にあつた自分の皮袋は、オデムの用意した箱の1つに重ねて置いている。つまり、その箱は僕のものになっていた。そして、用意されたもう一方の箱を賭け、現在のゲームは進行している。

机上のカードは僕の前に5枚。そして、相手の男の前に5枚。伏せたまま数分が経過しているものの、いまだベットは終了しておらず、上乗せする額は青天井に上がっていた。

「3万をレイズ。合計10万だぞ……」

絶対の自信があるのか、オデムが率先して掛け金の上乗せを宣言している。目の前の精悍な男も、負け続けで雲った眼に力が戻っていた。今回ばかりは自信あり気。

現在の親は僕。金額を釣り上げたのは当然、自信があるからだ。

「その箱、1つ15万はあるでしょ？ 8万レイズ」

「おいっ！ お、おまえ正気かよ！」

目の前の男は仕舞いに青褪め、その精悍な顔つきは見る影も無い。オデムの方も額に汗の粒を滲ませながら、苦しげに掛け金の上乗せを宣言。

「5万……5万レイズだ……っ！ これ以上は最初の決まりに反するぞ！」

「ああ、見えている金が実質の上限だったね。  
それでは勝負といこう。オープン」



カードを裏返してゆく毎に、嫌がおうにも緊張が走る。

オデムのカードはゆっくりと明らかにされ、同じ数字を表記されたカードが4枚、彼の汗ばんだ手でテーブルに広げられた。

「4のフオアカード……っ！ ふふふ……くっははっ！ 貴様もこれで終わりだ！」

「お、おい、なんだその……スPEEDだらけの、並び数字……だと……」

ジャック、クイーン、キング、エース、そして最後のカードを開く。

「ロイヤル……」

部屋に居る全ての人間は静寂の中で息を呑む。時間が止まったような錯覚を感じる中、煙草の煙と浅い呼吸の音、そして、流れ出る汗の滴がテーブルを叩く音で、どうにかその動きを認識できた。

「追加の箱は用意しないんですか？」

頃合いかと声を掛ける。

呼応するかのように男たちは息を吹き返し、活動を再開。

「くふふっ……ふははっはっはっはあ！ この役立たずめがっ！ おいっ！ こいつをつまみ出せ！」

「ま、待ってくれっ、こいつはイカサマしてる！ は、は・な・せっ！」

オデムの呼びかけに応じた体格の良い男が3人、座っていた男の

両脇と両足を抱えて退出してゆく。

更に彼は人を呼び、気付けば12畳の洋室の中に、10人の武器を持った傭兵とオデム、そして僕が残されていた。

「どういうつもり？」

「ふひひっ。借金でも作って、一生うちの店員として働けば死なずに済んだ」

圧倒的優位に安堵したのか、オデムは煙草に火を付けて一息吸うと、紫煙を吐き出して落ち着きを取り戻す。薄笑いで細まった目をこちらに向けながら、更に続けた。

「秘密を、貴族の連中に知られては困るのだよ。これがバレれば、賭場で働く者は厳罰。こうなったのも必然というわけだ。まあ、そこまで頭が回らなかった自分を恨むのだな」

言い終えたオデムは右手を挙げて「やれっ」と号令しつつその手を振り下ろした。それと同時に、短めの剣や斧を持った傭兵が輪を作るように囲い込んでくる。既に一足一刀の間合いだ。

「出番だよ、デルフ」

上着の内ポケットから4次元に接続。そこへ手を突っ込んで引き抜いた時には、150サントの大剣デルフリンガーが姿を現していた。

「てめっ、おう、荒事かよ。へっ、おめえがこのデルフ様を使いこなせるか見といてやるぜ。」

後ろ来てるぞ！ ひよっ子！」

武器を持ったことで、傭兵の頭も切り替わったらしい。あっさり殺しに来た。

デルフの忠告通り、背後からは傭兵の1人が袈裟懸けに剣を振り下ろしている。それをデルフで受け、小手を返して相手の側頭部に峰で打ち込む。すぐさま後ろに下がったその傭兵は、支えが無くなつたかのように膝から崩れ落ちた。

脳震盪でも起こしたかな。デルフもこれで重いし。

「やるじゃねえか」

「僕の技術って訳じゃないよ」

そう、武器を持った瞬間から、とある魔法を使っている。解析した剣で使われた戦闘技術を真似するという、新品の剣では意味を成さない魔法。

幸いデルフには6000年もの長い間、蓄積してきた技術があった。

って凄いな、中国が大ぼら吹かしても8000年だぞ。

「や、やれっ！ 殺せっ！」

この洋室は傭兵が10人も同時に動けるほど、広くない。

一方のこちらは遠慮なく振り回せる。しかし、死角は常に敵の位置だし、下手に大きく避ける事も出来ない。突きをかわず程度なら可能だけど、斬ってくるのは受けるか流すか。ちょこちょこ牽制され続ければ、すぐ劣勢になるのは確実。

「どうするんδει？ ジリ貧だぜ」

「こつする。＞昏睡の雲＜」

「なっ！？」

系統魔法でも使える、ありがちで利便性の高い「眠りの雲」「スリ―プ・クラウド」という魔法の進化版。上位の魔法だけあって、抵抗も困難で効果も高い。どこで知ったのか、僕自身も覚えていない。

傭兵の中にメイジは居なかったお陰か、耐え切れた人間は1人も居らず、全員が床に伏してピクリとも動かない。

「おめ、杖は」

騒ぎが大きくなると持ち出しが困難になるから、手っ取り早く4次元空間に箱ごと金貨を放り込む。デルフも何か言っていたが、ついでに放り込んでおいた。

「さ、行きますか」

「待ちな」

扉の前に立っていたのは、店の入り口で忠告してきた男。

「あんたも傭兵、だよな？　もしかして止めに来た？」

「馬鹿いうな。この人数の傭兵をあっさり倒す奴に喧嘩売るほど決闘好きじゃねえ。」

そんなことより、これからどうするよ？　このまま放っておいたら、必ず狙われるぜ？」

「何か良い案でもある？」

薄く笑いながら言うから、何かあるのだろう。

「ああ、簡単に確実なやつがな。ここで金を巻き上げられた貴族は山ほど居る。イカサマのことを衛兵にでも伝えれば、後は貴族連中が勝手にこの賭場を締め上げるだろうよ。証拠はあるんだろ？」

現物は持っていない。倒れていたオデムのポケットをまさぐると、数個のサイコロが出てきた。それを転がすと、何度振っても同じ目が出る。

「ほら、このサイコロ。特定の目しか出ない」

「マジか……よくこんな思い付いたもんだ。

それで、どうする？ 俺が請け負ってもいいぜ？ 仕事としてな」

なるほど。機を見るに敏。賢い男だ。

彼がイカサマの話を持ち込めば、彼の貴族に対する心証は良くなる。仕事もここで得られるし、僕の勝ちが前提であるから報酬の出し渋りもない。

一方の僕は貴族の事情聴取を受けると、最悪この場で搾り取った金貨を没収される恐れもある。貴族に理屈は通用しないから。

ま、足元を見て高額を請求してるわけじゃないから、悪い男でもないよね。

「じゃあ、頼もつかない。報酬は先払いしておくよ」

何度か握り込んだ金貨を、持っていた皮袋に突っ込んで渡しておく。我ながら滅茶苦茶に適当な感じだったが、恐らく2、300エキュールはある。

「ここの処理と貴族の件は任せた。僕はすぐにトリスタニアから出て行くよ。

戻って来た時に僕が追われるような事があつたら、ちょっとキツイ罰を受けてもらつよ？」

「ハッ、傭兵は信用で稼ぐ商売だぜ？ キッチリ処理しといてやるから安心しろ。」

しっかし随分と稼いだもんだな、ちよつとした仕事で200エキユーくらいか？」

傭兵が平民の中じゃそこそ高給取りだからって、先払いでその額は渡さないか。

「やってもらわないと面倒だからさ。後は口止め料みたいなもんだよ」

「口止めも何も、名前すら聞いちゃいないんだがな。俺はマルケスだ」

彼は右手を出して名乗った。その手を取りながら、彼に答える。

「御門・桜内」「ミカド・サクライ」だよ。ミカドでいい」

「そうか。ならミカド、俺はすぐ仕事にかかる。なあに、心配しなくても上手くいくさ。」

戻って来たら教えるよ。魅惑の妖精亭ならしょっちゅう行くから、探すならあの店だ」

「わかった。じゃ、またね」

「ああ」

それからすぐに賭場を出た。

マフィアに類する組織の存在を考えた場合に、「賭場を潰して上前をはねた」というレッテルを貼られると、非常に不味い。

また、マルケスに大金を渡して頼んだとはいえ、貴族の件もどう転ぶか。

総合的に考えて、ここは素直に次の目的地へ行こうと決心した。

「旅は道連れ世は情けってね。  
デルフってさ、誰に創られたの？ 物質に自我を持たせるなんて、滅多に見ない魔法だよ？」

鞆に付いているベルトを肩に担いで、とぼとぼと街道を東に歩く。道中あまりにも暇を持て余すから、デルフを4次元から引っ張り上げていた。

「あんな魔法は6000年の間でも見た覚えがねえ。しかも杖を持たずに魔法を使ってただろ。でもよ、おまえさん、エルフじゃねえなにもんだ？」

人生すれ違い。僕らもすれ違うの？  
冗談はさておき、この剣は質問を質問で返しやがる。タブーですよタブー。

「デルフ、会話にならないから、収納しちゃっていいかな？」  
「ちょ、ちょおつ。待て、待って、分かったからあそこは勘弁してくれ。大体、あの場所はなんなんだ？ 暗くて物音ひとつしねえ。気味が悪რიいぜ」

そういえば出て来た時は泣き入ってたな。さびしんぼさんめ。

「信じなくてもいいけど、他の世界から来てる。月が1つしかない世界からね。魔法もそっち関係の力を利用した結果。説明はかつたるいからしないけど、使えるものは使える」

そんな事よりこっちの世界。

質量とか重力とか、色々突っ込みどころがあるかもしれないが、そもそも太陽暦が元の世界と違っていている時点で公転周期も違う。この惑星は地球と環境が酷似していても、1年が約400日というか、一週間が8日。更に恒星がふたつ、つまり月がふたつ。ぶつからない、不思議。

この世界ではニュートンもアインシュタインも生まれまいだろう。明らかに、以前から住んでいた「地球」とは異なる。下手すると物理法則も違ったり……ないない、魔法はあれだ、あれ。駄目だ、考えすぎると壊れちゃいけないものが壊れそう。ゲシュタルトやら自己同一性やら。

助けてえ、ド〇えもっつ。あ、僕でしたか、そうですか。

「で？ デルフは？」

「6000年も前だぜ？ すっかり忘れちゃったよ」

忘れるって、魔法生成物が物忘れするのか？

いや、科学の産物であるロボットでも、物忘れをするような輩は多く居た。先入観は良くないな。

「錆びてるのは？ >固定化くって恒久的な効果じゃないけど、かかってたらまず錆びない。逆にかかってなかったら6000年も形を維持できるはずがない。その状態はかなり不自然だよ」

「そう言われてもな。お、なんか思い出しそうだな、それはあれだ、今のは仮の姿みたいだぜ。使い手でも現れてくれりゃあ立派にもなるんだがよ」

使い手、ねえ。

「って暗に僕じゃ不満だと言ってる？ 海に沈めて鮫の餌が望みなのかな？」



「うおいつ、違うつて！　なんだっけ、あれ、あれだ、デルフリンガー様はガンダールヴの左腕って相場が決まってるんだよ！　そういえば、おまえさんの動きはなんか使い手に似てたな」

ガンダールヴ？　なんだ？

「ふうん。ま、いつか。デルフを使って僕が殺し合いする事ってなさそうだし」

「剣は斬ってなんぼだぜ」

確かにね。でも、

「僕は出来る限り人を殺さない。けど、武器の否定もしない。矛盾してるけどさ、闘いを生まないために武力が必要な時だってあるんだよ。抑止力って言うんだだけだね。」

例えば僕がデルフを持たずに歩くと、賊からすれば力モでしょ。でも、剣を持っていると警戒するし、相手の戦力次第じゃ見逃される。

最善を尽くして争い事になるなら、それは不可避の闘争として諦めるしかないけどね」

特にこの時代背景を考えると、武力を誇示する必要は絶対にある。仮初でも平和的解決が望めるならば、こっちが武器を持つ事で賊が襲わないならば、結果論としての平和は揺るがない。拳で語れ！　違つか、武器で悟れ？

「理屈はわかるけどよ、お守りじゃ剣の立場がねえぜ。おまえさん、剣の腕は一流だったのにもったいねえ」

だから、僕の技術じゃないと言っに。

「いいじゃん。峰打ちでいいなら使うからさ。」

でも、片刃刀の峰って弱い部分だから下手すると折れるかもね」  
「やめてくれよ……」

目的地までは暫くかかる。

彼のお陰で少しは退屈も紛れそうだ。

よんわ

トリステイン王国の王都トリスタニアを逃亡気味に出立した僕は、街道を東へ向かい一路ゲルマニアへ。主要都市であるウィンドボナまでその旅路は続いた。

ゲルマニアは帝政という名の通り皇帝が元首。皇帝の一族に始祖の血が入っていないためか、他の王よりも格が低いと見られるようだ。

また他国家と異なり、メイジでない平民でも領地を貰うことで貴族になれる。自由な方針で大いに結構なのだが、各国の貴族たちから「ゲルマニア貴族は野蛮」と揶揄される要因でもある。

ウィンドボナに到着してからは情報を求めて毎日別の酒場に行ったり、賭場を回ってみたりしていた。トリスタニアの賭場から巻き上げた金は莫大な金額になるけれど、更にそれを増やしながら町を徘徊している。暇つぶしと後のための保険みたいな感覚だ。

この町の賭場も儲かっている。ゲルマニアの規模を考えれば、売り上げはトリスタニアよりも遥かに大きいだろう。

ハルケギニア全体の傾向として言えるかもしれないが、博打を規制する法がないせいで賭博場経営は濡れ手に粟のボロい商売となっている。胴元となるためには莫大な額の元手が必要となるから、起業する条件としてはそこまで緩くないが。

金持ちしか胴元になれず、上客も貴族を始めとする金持ち。一般の平民は蚊帳の外。

世の中は金ですな。

名のりを挙げよう

ウィンドボナは道の幅、商店の品揃えや規模、人の多さなど、トリスタニアよりも都会と言える規模の町だ。貴族の数もかなり多いし、平民だって立派な服を着て歩いている。

やや、トリスタニアよりも粗野な建物が多いのは、民族性が現れているのかもしれない。

最近の僕は町でお気に入りの酒場を見つけ、しばしば通っている。そこは貴族も立ち寄るような、大衆酒場の中でも人気のお店。内装は「魅惑の妖精亭」と似た感じで、綺麗なお姉さんのサービスはいい。

今も昼食をとるために、そのカウンター席に座っていた。

「マスター、家ってどこで売ってる？」

投げかけた言葉に捕らわれることなく、自分の仕事を淡々とこなすマスター。お昼時はいつもそんな感じで、忙しそうにしている。それを知っていて声を掛ける僕も、ちょっと空気を読めてないかもしれないが。

「いきなりだな。何処から来た？」

「トリスタニア」

このマスターからは以前にも宿屋を紹介してもらっている。酒場の主人という立場の特権なのか、このマスターもかなりの情報通として知られている、とは僕にこの酒場を紹介したそこの住人の言だ。

「なら、無理だな。どこぞの領主に金を握らせて許可を貰うしかない。身分の証明も出来ない輩がこのウィンドボナで家を買う事は出来ん。商人が店を構えるにしても、ここの住人じゃなきゃ条件は厳しい」

そのような質問をしたのも、宿屋を借りている今のうちに拠点が欲しかったから。どうも安宿では落ち着けない僕の、ささやかで可愛いわがまま。家の購入をささやかと言えるのは賭場を苛めたお陰だ。

「方法は無くもないが」

「お？ それは？」

「領地を買えば身分も付いてくる」

話が急に大きくなった。

土俵ごと買い取れっすか。

「参考までに聞くけど、領地って大体いくら？」

「最低でも15万、高いところで30万は超えるんじゃないか？」

買えない事もない。

「それは何処で売ってる？」

「おいおい、冗談のつもりだったんだが。ああ、嘘は言っちゃいない。売りに出す場所は決まっっていてな、教えてやるから後で行ってみればいい。」

しかしな、あまり良い噂は聞かないぞ。儲かるような領地はまず売ってないから大抵は重税を課しても赤字でな、鼻の利く商人ほど敬遠するって代物だよ。事情を知ってて買うのは、ワケありの連中さ。名を落としたメイジとかが多いかな」

儲かる領地は金なる木。手放す貴族は居ないよな。

どうも、平民が貴族にジョブチェンしようとおもったら、結構なハードルを越えなければならぬようだ。

「赤字と分かつてるにも関わらず、値段はそれなりに高いんだ。領地の取引で税を取られるからな。戦時には諸侯軍を出すよう催促もされる。」

利があるとすれば、領内での商売は税を取られないことと、貴族の爵位だけさ」

「なるほどねえ。あ、この羊肉のソテーお願い」

「あいよ、羊のソテーひとつ入るぞ！」

厨房に向かって彼が言う「羊のソテー入りましたーっ」と返ってくる。

それから、ちょこちょこと領地絡みの話を聞かせてもらうも、大体がネガティブな話。マスターも言った通り、値段と利権の割が合わないようだ。

情報料として少し多めのチップと、食事の料金を一緒に払って酒場を出た。マスターの言う領地の取引場所へは歩いてすぐのところにある。

然るべき公的施設で働く貴族の事務員さんに、僕が領地購入を検討していると告げたとき、ある領地を最初に紹介された。

それはゲルマニア北部の海岸沿いを占める、トリスタニアに隣接した妙な形の領地だ。ラステン侯爵の所有する領地を切り分けて、数年前から売買されているという。

この領地の状況を聞いた僕の感想を述べると、赤字の地域にもうしわけ程度の農地を付けた領、だ。

まず、領地の7割を海沿いが占めているのだが、漁村はひとつだけらしく、村民も約300人。そこから少し内陸方面へ入ると、荒涼とした荒地、草原が続く。そして、森を抜けた土地に約5000人の農民が住む。農地に使えそうな土地の広さは、領の2割程度。値段はともかく、領地としては下の下だ。

その、誰も購入しないような領地に、僕は手を付けた。善は急げとゲルマニアへの税を払って、ラステンへの取次ぎをお願いする。話はすぐにまとまり、次の週に領主の館で謁見という流れになった。これには深いワケがある。やむ得ずの購入だ。

謁見の当日、僕は約束の地に居た。

領主の館は豪勢なものではなかったが、それなりの大きさの2階建て庭付き一軒家。その門の前で待つ、スーツを着込んだ紳士風の老人は、現領主であるラステン侯爵の執事だ。

「こんにちわ。領地購入の件で来ました。僕はミカドといいます」  
「お話は伺っておりますよ、私はロゲル。ラステン侯爵に仕える執事でございます。」

それではご案内しますので、こちらへどうぞ」

彼に通されたのは館の応接間。

立派と言えば立派な内装ではあるものの、骨董品の類はあまり見られない。使用人も、執事の彼以外は紅茶を入れたメイドだけ。収入の低さが如実に現れている。

数分もすると扉が開かれ、40代に見える痩せ型の人物が部屋へ

と入って来た。

「待たせたな。私がシューベ・シウルツ・フォン・グリューク・ラステンだ」

「お初にお目にかかります。ミカドと申します」

領主の身長は160半ば。髪は金ブロンドで短髪。彫りの深い顔つきで、皺もかなりある。一般的な貴族の中年がメタボリック症候群なイメージで固定されていたから、少し驚いた。

「構わん、楽にしてくれ。君には是非ともこの領地を買い上げて欲しかったのだよ」

そうでしょうよ。聞いた話が丸々事実でもギリギリ赤字の印象。もしもバイヤーのリップサービスなら、色々と策を練る必要が出てくる。

「説明は受けているかと思うが、あまり領地の収入はアテにできない。もつとも、それほど酷くもないがね。

ラステン領はトリステインとの国境沿いでな、取り巻く情勢は良くない上に、アルビオンとも近い。軍を縮小する訳にはゆかんのだよ。今回の領地売却はそれが主な理由だな」

国に筋を通して以上、後はラステン侯から証書を貰い受け、残りの金を払えば終わりというところ。ラステン侯が素直に話すのも、そういう根回しがあつてこそ。

「いえいえ、こうして気を使って頂けただけでも、光栄の至りでございます」

「はっはっ。そう畏まらんでもよいぞ。トリステインならいざ知ら



ず、このゲルマニアでは平民から成り上がった貴族など山ほど居るのだ。魔法を使えん貴族さえ存在しておる。

ときに、ミカドはメイジなのかな？ 亜人や魔の物の討伐となれば、領主が兵を率いて出ることとなる。軍を維持するにも金は掛かるから、この領地を治める領主はメイジが好ましい。というのも事実なのだ」

先に「失礼」と断りを入れ、用意しておいた木製の教鞭っぽい杖を取り出す。長さ15 سانتほどのそれを振って「フライ<のルーンを唱え、軽く体を浮かせた。風系統の魔法だから、ラステン侯爵にもよく分かったはず。

「風のメイジだったか。ならば問題はない。安心したよ。

さて、悪いが私も時間がなくてね、ここに書類は用意している。払いの方はログルへ渡しておいてくれないか？ 領の仕事や使用人についての引継ぎも彼に一任している」

しっかりとした老執事を見やると、軽く会釈をしてくる。

「はっはっ、彼は私の領で雇っている執事なのでやれないぞ。君も有能な人材が居れば雇ってみるがいいさ。

それでは短かったが、これで失礼する。頑張って領地を治めてくれ、ミカド・ド・ラエモン伯爵」

「はっ」

颯爽とその場を去る侯爵を見送り、その場で書類を眺める。

領地を持つ地方の貴族で最下位となるのは伯爵らしい。子爵と男爵は王や皇帝直属の家臣に与えられる爵位であるから、宮廷で要職に就いている人物に多いようだ。その違いは成り立ちだけでなく、世襲するか否かという違いもある。

それよりも領の名であるド・ラエモン。これを名乗るために即決したと言っても過言ではないのだ。赤字など後でどうにでもなる。このミカド・ド・ラエモン伯爵に任せるがよい、ぬははっ。

「それでは、これから仕事の引継ぎや使用人の紹介、そして権利書の確認をお願いします」

盛り上がる僕をよそに、ログルは淡々と説明を続けていく。

領内の情報は以前に聞いていたものとほぼ一致している。

ラステン領から分けられた出廻らしが、ド・ラエモン領の出発地点。

「では使用人を紹介します。ラエモンの町から雇った者が10名ほど」

人数の振り分けは料理人1名、掃除関連5名、応接秘書2名、守衛2名。

料理人は地元の料理が得意な女将さんっぽい人。掃除は館の内側も重要だが、広い庭先もカバーするため一番多い。応接秘書の2名は領内でもそこそこ美人で、読み書きも出来る。守衛の2名は若い衆から選んだ、体力の有りそうな男。

紹介が終わると各々の仕事に戻ってしまった。彼らからすれば、領主が変わってもやる事に違いはないからだろう、顔見せ以外で積極的に関わろうとはしていない。もちろん、敬意なんてものはひとつも感じられなかった。

僕はアジア圏というか日本でしか生活してこなかった関係で、欧米人の微妙な表情なんか分かりはしないんだけどね。

「それで支払いの方は」

「馬車に乗せて行くよね？」

金貨数万枚にもなると、流石に重くて仕方がない。魔法を使えない人がやると、大の男でも2、3人は必要なんじゃないかな。

「はい、ですが確認の作業がありますので、ホールをお借りてもよろしいですか？」

「了解したよ、そちらに持って行くから」

当然、数えるよね。大変だな、ログルさん。

隣の部屋へ移動して、4次元から数ぴったりの金貨と箱を出す。ついでに入れたままにしておいたデルフも、外へ出してあげた。なにやら鞘がカタカタ鳴っているような気がしたけど、気のせいだろう。

出した金貨を>操り<の魔法で箱に収めて、>レビテーション<を使ってホールに持ち運ぶ。楽チン。

「ほい、ここでいいかな？」

「結構です。それでは暫く数えていますから、ゆっくりして下さい」

そう言つと、金貨を数えながら空の木箱に投げ入れていくログル。たかが金貨の1枚や2枚ならいいけど、あの数じゃ絶対に明日は筋肉痛だよ、ご愁傷様です。

なかなかの勢いで数えていたものの、それなりの時間が掛かって

時刻は夕方を回っている。

数はぴったり一致しており、変なモノを見る目で視られたのも束の間、ログルは杖を取り出して箱に>レビテーション<を掛けると、それを馬車へと収納した。

「ふうつ、漸く終わりましたな。少し休憩させて貰ってもよろしいですか？」

「そうですね、お茶でも用意させましょう」

控えていた秘書のひとりであるフラーマに、お茶の準備をさせる。

「ありがとうございます。しかし驚きましたな、金貨の数はぴったりでしたよ」

「ははっ、商人ですからね。お金の管理はしっかりしないと」「結構な事です」

書類上だけの話ですが。

騙したように心苦しいです。

「それよりログルがメイジだって事に驚いたよ」

「いや、お恥ずかしい限りですな。私も生まれは平民なのですが、貴族様のお手付きだった使用人の子だもので、杖の契約だけ教えてもらえたのですよ。幼少の頃は何が出来たのか、系統は何なのかさえ理解しておりませんでしたから、出来る事は>レビテーション<などのコモンマジックばかり。それですら拙いものでしかありませんがね」

自嘲しながら笑うログルも、系統別の魔法を使いたかったのかもしれない。

メイジの資質は血によってのみ継承される。王家に近い者ほど、

メイジとしてのランクが高かったりするのも、この性質が要因なのだろう。

実際、王家や公爵家で、本に載るような歴代有名人ともなれば、そのほとんどが個人として最高位の「スクエア」。低くても「トライアングル」という、強力なメイジばかりだった。

メイジとしてのレベルは「系統をいくつ足せるか」で定められている。ひとつなら「ドット」ふたつで「ライン」みつつで「トライアングル」よつつは「スクエア」で、このレベルの違いははっきりと魔法に影響するらしい。

「失礼します。お茶をお持ちしました」

「ありがとうございます」

少し疲れて見えるログル。ラストン侯爵も良い人材を発掘したものだ。僕もメイジの平民が居たら積極的に登用したい。

なにせ、些細な魔法でも武器になる。たかが>レビテーション<と言うが、平民が浮かされれば何も出来ないし、そのまま落とされれば高さによっては大怪我だ。

「魔法って便利ですよねえ」

「全くだす」

当たり前に使う事の出来るこの世界では、尚更そう感じる。

「さて、そろそろ行かなくては。本日はありがとうございました、ラエモン伯」

「こちらこそ。暇が出来たら遊びにおいでよ」

「はい、いつかまた訪れますから、その時は宜しくお願いします」

本当に時間がないのだろう。彼は適度に別れの挨拶を済ませ、帰

りの準備を始めた。御者や護衛の者たちも、彼の姿を見て準備に取り掛かり、数分もすると全員が馬車や馬に乗った状態にまでなる。

「それでは、いずれまたお会いしましょう」

「ああ、またね」

玄関先で見送っていると、ものの数分もしないうちに、馬車の音もはるか遠くまで行ってしまった。

終わった、と大きく息を吐きながら下を向き、腰に手をやる。

「慣れない事をするもんじゃないな。かつたるい」

「なーに言ってやがる。おまえさんが望んだ事だろう」

先程からカタカタと煩かったデルフを、鞘から出した途端に呆れ気味な声で言われた。疲れてるんだから、もう少し優しくして。

「まーね。譲れないものもあるですよ。」

僕の我がままで購入したからにはキツチリ領の復興までやる。本当は全部領民にやって欲しいけど、読み書きも出来ないんじゃない組織の運営とか無理だからね、僕が領地の運営から産業の開発、商売まで全部やらなきゃ駄目……なの……」

うわぁ……。これちよつと手分けしなきゃ、過労で死んじゃわな  
いかな、僕。かつたるいとかいうレベルを超えてるよ。

膝を落として両手を地につけた。鬱だ。

「はっ、何がしたいんだかわかんねーな、おまえさんもよ」

「僕も今そう考えてたところ。でも、今したいことははっきりしてる」

「なんでえそりゃ」

「風呂に入っただけでぐっすりして寝たい」

それからフラーマと、もうひとりの秘書であるエルサの案内で屋敷内の大まかな配置を確認して回った。このふたりは見た目重視で選ばれただけあって、なかなかの美人と可愛い子。

フラーマの方は茶系の髪を肩まで伸ばしていて、眼も茶色っぽい。身長は160センチ前後で凹凸のハッキリした肢体。欧米タイプの綺麗系な顔立ち。

エルサも欧米な顔立ちだが、どちらかというと可愛い感じ。金髪ショートで碧眼。身長も150センチ前後と低めで痩身。胸もBカップくらいだろうか。

貴族の応接を任されていただけあって、それなりに作法もできるしお茶を淹れるのも上手。むしろ僕の方が作法なんか分からないや。どうしょ。

「どうかなさいましたか？」

顔に出てたかな。

「ん、ああいや、平民が貴族になったはいいけど、作法に疎いのは致命的かもしれないってね」

「そうですね、他のやんごとなき貴族様を相手に、粗相はできませんから。ミカド様のお歳はエルサと同じくらいでしょうか？ かなりお若く見えますが」

身長178センチほどもあるんだけどね。確かに日本人そのままの顔立ちだから、欧米の人より遥かに若く見られるけど。年齢となると外見は20歳で固定だから、こっちに直すと。

「18歳ってとこ」

「おーっ、エルサより年上だったんですね。私はこの前、15歳に

なつたよ」

幼いと思っていたら、それなりだ。

「ちよつと、最初の印象が大事ななのよ、応接の訓練で習ったでしょう。綺麗な言葉を使いなさい、エルサ。すみません、ミカド様。私がよく言っておきますので」

フラーマは見た目も言葉遣いもお姉さんっぽい。歳は知らないけど、20代前半といったところではないかと思考する。

「構わないよ。ところで使用人の中にメイジは居ないよね？」

「はい。領民を含め、メイジは1名も居りません。以前は数人ほど居たのですが、今回のことでラステン侯爵の使用人として連れて行かれました」

やりやがったな、あんちくしょう。

もしかすると、他にも何か持って行つたかもしれない。

「はあ、風呂つてどうやって沸かしてるわけ？」

「それはお湯にするという事でしょうか？ 以前は火系統の者が」

オウ、なんてこつた。

「クソツ、五右衛門風呂を作っておくから、風呂に入る時は薪をくべる人間を付けるといい。木材の調達は？」

「はい、そちらは何処でも使いますから、木こりに言えばすぐ運んで来ますが、ゴエモンブロ？ とはなんでしょうか？」

木こりなんていう言葉を聞く事になろうとは。



「作ってから説明するよ。仕組みは簡単だから、使用人も使えるように大きなのを用意しておく。いいかい？ 最低でもウチの使用人は臭い汚いを許さない。常に清潔。いい？」

「は、はあ……」

「いいのっ！？ お湯のお風呂に入れるうー、おっふるーおっふるー」

フラーマは啞然としてこっちを見てるのに、エルサは小躍りしている。やだ、なにこのコンビ。

しかし、これは気合を入れて住環境を整える必要があるかもしれない。農民ならいざ知らず、貴族の館に勤める彼女たちでさえ、お風呂ごときに大喜びと不安気な表情が付いてくるのは異常だ。蒸し風呂に入って、布で拭くくらいしてるのだろうか。

「今日は説明だけしておくから、明日から実験的に使ってくれ。来週からはそれを毎日ね」

「はい、分かりました」

とりあえず、今日はもう風呂に入って寝よ。僕だけなら水を魔法で温めればいいわけだし。  
うう、大変になるかも。

いわ

## 第五話

NAISEI

チュンチュンと小鳥の囀る声に覚醒を促され、まだ少し寒い朝の空気に身を擦る。いつもの安宿と違う柔らかな布団の中、ずっとそうしていたい情動に駆られるも、意識の靄に差す光と熱がそれをはばむ。むくと体をおこし、貴族らしい豪華な寝台を見ると、怒涛の流れに追いつかない自覚が、少しだけ芽生える。

ここは僕の家、ミカド・ド・ラエモン伯爵の館だ。

「失礼します。あ、おはようございます、ミカド様」

「おはよう、フラーマ」

使用人の中でも経歴の長い、秘書的な仕事をする彼女。朝も早い時間だというのに、長い髪は綺麗にまとめられ、目もぱっちりとしている。

朝のおつとめは僕を起こすことから始まるようだ。

「もうすぐ朝食の支度も整います。食堂の方へは私がご案内しますので、準備が整いましたら声をお掛けになって下さい」

そう言った彼女は扉の傍で立ち、視線を真っ直ぐに固定したまま

動かなくなる。よく訓練されたメイドといった風体で、僕の視線を受けても、その鉄面皮を崩すにいたらず。

ならばと安心して、僕は魔法を行使する。起きぬけのダレた体に、整った服が備わった。

「出来たよ、それじゃ行こうか」

「は、はい。ではこちらへ」

あまりの短さに驚くも、すぐ先の用件を伝えるあたり流石だ。

僕のような小市民に、使用人の近くで着替えなどという、破廉恥な行為にたえるほどの高尚な精神はなく、やむないのだ。勘弁してほしい。

「お、おはようございますー」

「おはよ、エルサ」

もうひとりの秘書エルサも控えていたようだ。

彼女もその幼い体に見合う使用人の服を着て、短い金髪もふわふわ。準備は万端の様子。

「ミカド様、お風呂の件は使用人たちにも好評なようですよ」

「それはなにより」

作った風呂釜は香水を使ったもので、端にボイラー代わりの燃焼釜を設置している。非常に単純な構造で、外から焼く物を投げ込みさえすれば、風呂水が熱されるという具合。

「エルサもね、石鹸を使ったの久しぶりだったんだよー。気持ちよかったあー」

勘違いしそうだが、この世界、この時代背景でも、石鹼は作られる。オリブオイルと海藻を原料としたものを、ラエモン領の数少ない売れる特産品として、かなり以前から生産していたようだ。しかし、平民はそれを使わずに、税として差し出している。

ならば本来、館にも沢山の石鹼があつてよいはずだが、そこはそれ。ラエモン侯爵が退去時にその全てを持参して行った。とことんふざけたお人だ。確かに、ボディースープとシャンプーなど、僕が”鍊金”すればやすやすと作ることができる。だとしても、彼の配慮など微塵もないことに、ちよつとした苛立ちを持ってしまふ。

「あのような高級石鹼を使用人にまで使わせて、よろしいのですか？」

「うん、大丈夫。町長との会談は何時になる？」

「そうですね……町長の到着は今日の午後を予定しています」

僕が領主としてまず最初に行くこと、それは領民の代表との面談だ。既にラエモン領で最も栄える町ラエモンの町長と、海沿いの漁村シサイの長を呼ぶよう指示は出している。

ラエモン領の農地は、農民が約5000人も居るだけあつてそれなりに広く、各々の管理する農地ごとに集村を形成している。それらの代表である村長などが意見をまとめて町長に持つて行き、更にその意見書をまとめて領主に持つてくるのが通例のようだ。

漁村であるシサイの方は約300人が集まつて漁をしている。代表も決まっているから、こっちの対処は楽。

「どうした？ 浮かない顔をして」

「いえ……」

フラーマの顔は真つ青とは言わないまでも、不安の色を隠せていない。

「石鹼のこと？ あれ、僕が>錬金<で作った物だよ」

「い、いえ、そのような。申し訳ありません」

フラーマはの陰の取れた顔をして頭を下げた。

領主の散財が、税に及ぼす影響を恐れたのだろう。僕も大まかな資料で知りながら、それでも購入したから分かっているつもりだ。でも、石鹼だけでこうも怯えるとなると、想像を超えてくるかもしれない。

「ここが食堂です。準備をしますので、少々お待ち下さい」

「うん、ありがと」

案内された食堂はそれなりの広さで、テーブルと椅子も高そうな感じの物。財政を圧迫してまで用意するような物かな、貴族とは考えている以上に度し難い。

更に、用意された朝の食事は僕から言わせると、少しポリウムがある。以前ならパン1枚にジャムやバターを塗り、スープや野菜それに果物を食べ、コーヒーやお茶を飲むだけだったから、カロリーを考えるとずっと食べる方がいいらしいが。ご飯に味噌汁かトン汁、焼き魚、納豆、海苔、卵、なんていう純日本風御膳も好きで、ちよくちよく出勤前のサラリーマンに人気のある店などで食べていた。家では面倒でやらないし、やってくれる人も……ま、居るには居たか。

なんにしても、赤字の領としてはまともな食事に違いない。

さて、適当に切り上げて、次に向かったのは執政室。さっそく仕事に取り掛かる。

昼から来るラエモンの町長とシサイの村長には、これからのことを話しておきたい。出来るだけ具体的な提案をしておき、指導する

立場の者らに領の未来像を理解してもらうのだ。

大まかな方策はちらほら浮かんでいる。後は領の現実を見ながら、細かい修正と新規に必要なものを考える。

ところで、書類の内容が酷い。見るべき内容の幅が広すぎて、全く仕事が進まない。

なにせ税に関する書類と、住人トラブルの書類が同時に出てくるのだ。

仮に裁判が起こっても、裁判官や検察官すら領主の仕事なのだから、ある意味で仕方ない。しかし、この状況で書類仕事をしていると、紙の海に沈んでしまう。ド・ラエモンが新興の領だからだろうか？ 他の領はどうなっているのやら。

愚痴を零しながらも、ちやくちやくと仕事をしていると、すぐにお昼となった。

貴族にしては質素であるらしい料理を、秘書のふたりと堪能。その後に出てきた紅茶を楽しんでいると、貴族になった事を実感する。

「どうでしたか？ あまり豪勢な食事ではありませんでしたが」  
「いやいや、おいしかったよ。流石は年の功」

簡素な味付けのポトフなど、ウィンドボナでもお馴染みの料理だった。しかし塩加減が絶妙なのか、他に理由があるのか分からないけれど、とにかく美味しかった。

「そういえば、紅茶にミルクは入れたりしないの？ 柑橘系の果物もいいね」

「ミルクですか？ 青くさいですよ？ 果物はレモンなどは聞いた事があります」

「あー、私はオレンジ入れてみたいですー」

乳牛が放牧で青い牧草ばかり食べるのかな？

「ミルクを持って来てくれないか、エルサ」

「はい」

応接秘書として雇っていたのだから、それなりの作法や喋り方を教えられているはずのエルサはいつもこの調子。ラステン侯爵も可愛いからって甘やかしちゃったのかな、応接できるのか不安だ。

「ところでフラーマ。君は書類を処理する仕事なんかしてなかったの？」

「はい、領主様のお仕事ですから」

当然だと言わんばかりの返答だ。バアット、フラーマがそれでは困る。

領の赤字経営を打破するにあたり、内政を司る人物が、是が非でも必要なのだ。そこで、普段は特に仕事のない秘書を鍛えようと思う。

エルサに判断を任せるのは不安だが、逆にフラーマで駄目だった場合、どんな平民を連れてきても駄目だろう。

「じゃ、今日からフラーマは内政担当ね。そのうち人員を増やすから、フラーマはその時までには仕事を完璧に覚えること。将来的には教える側になってもらう。」

とりあえず今日は僕が仕事を選別するから、フラーマは選別の基準と割り当てられた書類の処理を勉強ね。出来るようになれば、もちろん給金も増える。頑張つてよ」

「は、はいっ。頑張ります」

簡単に了承を得られた。やはり給金が大きいのかな、信賞必罰は法人の鉄則なのだけど。

フラーマを育て上げれば、後は読み書きの出来る人材を連れてくるだけでいい。エルサの方も内政と一緒に勉強させよう。

「お持ちしましたー。そのままだとお腹を下すそうで、温めたミルクですよ」

「ありがと、エルサ」

受け取ったミルクを舐めてみる。

「ああ、確かに青いにおいがあるね。乾燥させた草を増やして麦とか豆を与えれば、もう少しタンパク質の入った感じの牛乳になるんじゃないかな。これじゃ紅茶には入れられない」

「乾燥させた草を与えれば、臭いが消えるのですか？」

「ある程度ね」

実際の程度のおいになるかは知らない。でも、今より遥かに良くなる。

「ですが、牧草の生える場所に放牧させますから、難しいですね。冬は家畜たちの餌を確保できなくて、置いてある牧草が腐ったら家畜は食べています」

屠殺に慣れているなら、食べる部位や加工食品の作り方を教えておこうか。先入観でゲルマニアがドイツっぽく見えてしまうせいか、ジャガイモと豚の腸詰めを推したい。

「飼料が無いってこと？」

「はい。人が食べるだけの食料もままならず、といった事情もあり



ますが。冬の飼料は限られますから、家畜の数もおのずと決まってきますね」

これは不味い。最初に領民の増収、それも食料の確保が優先される。内陸地域は少ないから、約5000人も居れば農地は飽和していそうだ。上手にやり繰りして生産性を上げると同時に、他の仕事を与えて収入を増やす事も検討しなければ。

家畜が冬を越せないなんてのは流石に論外だ。

「今のところ内陸の方はふたつ、政策がある。町長とは良い話し合いが出来そうだ」

「もうそこまで考えていらしたのですね。今までの領主様はこの領で赤字が嵩むせいか、あまり良い政策をしておらず、税が高くなる一方でした。ミカド様には期待しております」

ズバツと言いますね、フラーマさん。でも、あまり期待が大きいと失敗した時に困るから、曖昧に返しておいた。ヘタレですみません。や、ミカド・ド・ラエモンに不可能は稀にしか無いですけどね。

太陽が少し西へ下った頃、ラエモンの町長が領主の館を訪れた。使用人の皆も見知った彼の元気な様子に、つつい長話をしていたようだ。

応接室でエルサにお茶を頼み、長からは型どおりの挨拶を受ける。領主としての所信表明を適当にしておき、これからの細かい政策の話へ。

「それじゃ、これから行ってもらう事を話すよ」

「はい」

「ひとつは下水。つまり人の排泄物の処理問題で、長に協力を要請する。皆にお触れを出して、処理方法を徹底して欲しい。具体的な方法は……はい、これ。書いておいたから」

町の代表というだけあって、読み書きは普通に出来る人が長になる。全部口頭で説明するなんて面倒すぎて、領主やめちゃう。今でも僕に入る給料を全部使って、仕事を人任せにしようと目論んでいるのに。

「これは……しかし肥料としては使うのは少し、抵抗がありますな……」

「気持ちに分かるけど、川やら海、それに森なんかには捨ててるところのうち病気が発生しちゃうんだよね。今でもネズミとか多いんじゃないの？ 町も臭くなるしさ、トリスタニアですら裏通りは臭かった。それに、これからの農業を考えると家畜の糞尿だけじゃ明らかに肥料が足りないってこともある。

人の排泄物はそのままじゃ肥料として使えないから、一時的に保管する施設を作ろう。そこで発酵させとけば、必要な時に肥料として使えるようになるよ。

町や村に共同で使用可能な便所を作るから、家庭から出た排泄物もそこに集めて欲しい。更に公衆便所から保管場所まで運ぶ人を雇う。キツイ、汚い、臭いっていう具合だから、給料はかなり高めに設定するよ。仕事も増えて一石二鳥でしょ」

この政策の問題は領民の意識なんだよねえ。誰も従わなかったら、公衆便所を作ろうが隔離施設を作ろうが、全くの無駄骨に終わってしまう。

我がド・ラエモン領ではネズミに市民権など無い。ネズミダメ、

ゼツタイ。

「決まった場所以外に捨てたら罰する、という法律も検討しているから、早いうちに皆を納得させるよう努力してくれ」

「は、はあ……分かりました」

若造とはいえ僕は領主であり貴族なのだから、簡単に断れないんだろう。今回は立場を存分に利用させてもらって、多少強引にでも政策を進めるつもりだ。結果的に正しかったと思わせればそれで良い。

「ときに町長、今の時期の農地は何を作ってるの？」

「ほ？ 何も植えておりませんよ。小麦の収穫は終わりましたからな、今は放牧地として開放していますゆえ、牛などが草を食んでおりましょう」

春つらら。

冬小麦の収穫を終えて休耕期ということですか。

「次に育てる作物は？」

「夏に麦を」

「その後は？」

「土地を休めて放牧の時期ですが」

この農業を改めさせる必要がある。

「牛って何を食べてる？ 草の種類とか分かるかな？」

「その辺りに生える草でしょうか。種類は分かりかねますが」

「そっか。明日は視察に行くから、牛がどの辺りに居るかだけ教えてくれる？」

「はい、地図でいうとこの辺りでしょうか」

長は執務室の壁に掛かった地図を指す。ゲルマニアの形と旧ラステン領の載った地図を少し弄って、ド・ラエモン領とラステン領の境を区切ったものだ。それは見るからに不自然な形。長方形に海沿いを占め東側に少し内陸のある、いかにも切り捨てられた感じの領。あの侯爵はこのミカド・ド・ラエモンを舐めた、というより領地を購入して貴族になる平民をコケにくさっている。当然と言えば当然だけでも、付き合わされた領民はたまらない。

「先に計画だけ言っておくと、今の時期は土地に堆肥を撒く。それと同時に株分けした牧草、クローバーなどを植える。夏は麦と豆がいいな。それが終わったらカブの種まきね。これを家畜の飼料として保存。冬場の飼料を確保する。冬は小麦。この方法により増えた飼料で家畜を養う。」

農作物だけに頼っていた以前よりも、ずっと安定した収入源を得られるからね。忙しくはなるけど、農地の範囲を考えながら、皆で協力して成功させよう」

必ずラステン領よりも豊かにして、侯爵を見返してやる。

農業がより効率よく楽になる道具や施設も作らなければ。> 錬金<に似た僕の魔法を使えば一瞬で完成させられるし、この世界じゃ魔法で何かをつくるなんて常識。> 固定化<も併用すれば100年は使える。なるほど貴族と魔法が至上になるのも頷ける世界だ。何でもそれで解決するわけにはいかないけれど、大型の施設などは一向に発展していない技術を鑑みれば致し方がないか。

「し、しかし土地を休ませなければ、痩せてしまつて良い作物ができませんぞ」

「肥料を撒くし、土地の栄養を上げてくれる牧草を農地で繁殖させ

る。詳しくは後で持つて行くから、新しい種と牧草に関しては任せ  
てくれ。皆にはそういう風に農業を変えていくと、概要だけ伝えて  
くれればいい」

「は、はあ、分かりました」

またも渋々といった具合で納得してもらった。悪いね、町長さん。  
内陸に関しては牧草の選別と肥料の確保、それに種の購入を済ま  
せば大丈夫かな。家畜の種類も増やして、逃げないように困いも  
作るか。

初年度は大赤字も覚悟。財布の中身をひっくり返してでも、ラエ  
モン領を住みよく変えるつもりだ。収入はその後から付いてくる。

そして次の日、今度はシサイから長が来た。

訪れた人物は歳のわりにガツシリとした体格で、身長も170サ  
ントはある。体毛が伸ばし放題なのは平民の掟か何かだろうかと、  
邪推してしまうほどそういう人が多い。もちろんこの代表も。

前日と同じ流れで就任の挨拶やら、代表からの挨拶を済ませて本  
題に移る。

「これから海岸沿い地域でやっていく産業を説明する」

「へえ、わかりやした」

「これを読んで」

渡した紙の内容はその地域で興す産業について。海水を舐めた人  
ならば、誰でもチラつとは考える発想。端的に「塩を作りますよ」  
と書いてある。詳しい抽出方法は部外秘とする予定だからそこには

記していない。

「これは無茶でさ。何度か挑戦した奴は居ますが、誰も真つ当な塩を作れんです。大量の海水を沸かしても、底に残るのは辛いのか苦いのか良く分らん塩で、売り物にやなりやせん」

その方法でもろ過を2、3回すれば塩は取れるが、あまりにも非効率。僕は余っている土地を利用して天日塩田を造り、かん水を熱して結晶化という方法を採用する。

熱量や動力に関しては化石燃料などに頼らない。現存するアーティファクトの種類とその製作は資料で把握しており、それを利用すれば大抵の事は平気だと考えている。魔法万歳って感じた。

「製法については知っているし、塩作りに関してはミカド商会とでも名乗って人を雇うから、収入の心配はしなくていい。

問題は管理する人間の選別と、労働力をどこまでシサイから出すのか。あの膨大な海岸沿いの領地を遊ばせるつもりはないからね」  
「はあ、それなら皆は喜んでやります。管理とは何をするか知りませんが、うちの代表で仕切れば誰も文句は言いやせん」

随分とあっさり受け入れるもんだ。

「もしかして魚を食べるの飽きたりしてる？」

「うつ、いえ、食べるもんなら何でも、贅沢は言えやせん。しかし海岸沿いで魚をやってるなら、大概の奴が干した魚やらで食いつないだ経験があるんで、うんざりしてる衆も多いですわ。においも耐えられん奴らはとつくに町へ出て行ってやす」

魚の血と脂って臭くなるからねえ。

「塩を作れば商人を呼ぶから、色々な物を食べれるようになるよ。周辺で仕事も増やすから、漁師が嫌ならそっちをすすめてもいい。それと漁業が楽になる道具をあげるから、上手く活用してくれ。ミカド商会は海産物の買取も始めるから、そのうち安定した収入になるよ」

「みな喜びやす。ありがとうございます」

「それと別件でもうひとつやってもらうことがある」

やたらと素直なシサイの長に、今度はラエモンの町長に話した排泄物の件を説明した。

下水の件はちゃんと公共事業として予算を組んでやるから、民も仕事が増えてお金を貰えるし、それで買い物をするようになれば商人もラエモンに目を付ける。塩の件もあるから、積極的に喧伝して呼び寄せるのもいいだろう。

全部の計画を上手く繋げながら、総合的に領の体力を上げていくと考えている。

ラエモンとシサイの町長に話をしてから数日。溜まっていた書類をフラーマとエルサの教材代わりに使って処理していくと、後は新しく舞い込む書類だけとなった。

この領の問題点はかなり多い。中でも難しいのは領の治安維持と戦争時に必要な軍。人員や装備は丸ごと持って行かれ、完全にゼロからのスタート。今は雇う余裕も無いし、来年に先送りする予定。何かあったら僕が全て解決しなければならぬ。

いつから領主は便利屋になったんですか、このやろう。侯爵がメイジかどうか確認した理由がようやく分かった。許さんつ。

色々と考えつつも、とにかく視察と必要な施設の建造を済ますため>フライ<で領地の空を飛び回る。最初に視察したのは農地だったが、現時点で肥料や牧草を用意している訳ではないから見るだけ。牛は白黒のまだら模様ではなく、茶色が多い。酪農向きの牛を交配させて作るのは、まだまだ時間がかかりそう。鶏、豚、羊、牛、馬など多種の家畜をそれぞれの集村に振り分け、専門で飼育させるのが良いかもしれない。

視察ついでに公衆便所を建てておき、堆肥を作る施設も良い位置を探して設置しておいた。最初は人件費で凄い赤字が出そうだけど、その辺りについては諦める。農業の方は来年か再来年に期待しよう。家畜の増産と小麦以外の農作物で増益なのは見えているし、農家の余った人員は出稼ぎにも行ける。税収も増えてくるだろう。

#### 次にシサイの方面。

海岸沿いはラステン領との境に森があり、そこから海岸沿いまでの土地に塩田を築く。海水の引き入れは、よく貴族が風呂や水場に使っているアーティファクトを利用した。ここに労働力を投入すると、規模が大きすぎてシサイから漁師が消えてしまうからだ。その代わり攪拌するのに人を雇い、よく野球場などの整地に使われるトンボを持って歩かせる。出来たかん水で塩を作る施設には温床を作って省エネ。後は人を雇うだけだ。

堆肥の施設は「風石」と呼ばれる風の魔法の力を使い、空氣の循環を行っている。「火石」で温度調節もしていい感じた。

他にも様々な魔法<sup>アーティファクト</sup>工芸品を活用して、密かに便利な物を作っているつもり。そして、最後には僕の幸せ適当生活を満喫できる環境へ。



## ろくわ

ド・ラエモンを購入して1年の歳月が過ぎた。

買った当初に行ったのは、各施設の設置と、人材の雇用に加えて各仕事の作業内容と道具の利用方法を、各村の代表者に教える事だった。How toをRead meとして書いた資料も渡していたが、必要に応じて実地の訓練も行った。

並行して、町の商家と渡りをつけ、塩の商い全般をやってもらうと共に、農業で使っていく農作物の種や苗を購入。更に家畜も大量に買い付け。それを税の還付として、それぞれの村に配布。管理を命じた。

人材の方は便所や道の清掃と同時に、排泄物の運搬をさせる方と、塩の製造販売の方に分かれる。それぞれの部署には責任者を置き、新規で雇われたものたちの教育や管理を任せた。塩の製造販売は商家の次男を筆頭に、商いのわかる人材を置いている。

ひとりでもこなしてきた僕は、その病的なまでに真面目な姿を見せつけ、領民や使用人たちから多大な注目を集めた。しかし、それも昨年までの話。新しい春を迎えた今、僕に残った仕事と言えば、途中経過を見ての軌道修正と監査が主なもの。

時間の余裕は気持ちの余裕。ふと、以前のことを振り返る。

僕が逃げ出すようにしてトリスタニアを出たのが1年以上前のこと。それ以来、トリスタニアへは一度も行っていない。頭のどこかに掠めすらないほど、仕事に忙殺されていたのだから、なんつたる不覚。許すまじ、ラステン侯爵。いや、違うな、違わないが、つまり気になっているのだ。どのように決着したのかが。

そんないきさつで、休暇を利用したトリスタニア旅行へと出かけ

たのが、ついさきほど。

「飛ばばものの数分で着くじゃねーか」

「そりゃね。近くまで飛んだから、後は歩きでもいいじゃん？ のんびり行こうよ」

忙しかった煽りを最も受けたのが、何を隠そうこのデルフリンガ  
ー。や、4次元に押し込んだまま何ヶ月か放置してたら、すっかり  
拗ねちゃったんだよね。

「けっ」

「悪かったってば。そうだ、あの武器屋の主人のとも寄ってみるか」

「へっ、相変わらず武器を右から左に流して、適当な商売してんだろっよ」

その言葉に、僕も心当たりがあり過ぎて困る。商人と名乗って領  
を買収したのに、全くそんなことはなかったぜ。や、塩の製造販  
売を始めたのは僕ですがね、自身で交渉に臨んだのはラエモンの商  
家のみ。それ以降の商売は任せっきりでしょ。やってるのは大きな  
決定と監査のみ。

「やつぱり魅惑の妖精亭は外せないね。デルフの行きたい場所ってあるの？」

「鎗を落としてくれりゃ、他はなんでもいいぜ」

剣からすればマッサージなのかな。

「構わないけどさ、削れる？」

「やってみなきゃわかんねーな」

デルフのご機嫌を取りながら歩いていくと、王都トリスタニアの目の前まで来ていた。

相変わらずの賑やかな街並みに、ド・ラエモン領では見かけない、鮮やかな乳白色で包まれた建物の群。6000年もの長きを費やして、醸造するようにゆつくりと発展してきた国の首都は、そこにたかが1年の時を足らそうとも、微塵の揺らぎももたらさないようだ。

## 第六話

### 管理職の憂鬱

今の僕がトリスタニアの大通りを眺めると、以前と全く異なった印象を持ってしまう。とにかく雑多な雰囲気と道の狭さが目に付くのだ。

馬車2両と人が10人横並びになれる程度の広さは欲しい。ただし広さに余裕を持たせると閑散とした街になるから、商店街などはまた別の規格で。やはり都市計画の草案でも立ち上げ、交通網や各目的に応じた建物を区分するのが理想。

これは僕の目線が変わってしまった事に起因するのだろう。

「どうした？」

「ん、ああ。街並みを見てね、領内の建物をどういう風に並べるか考えてた」

ワーカーホリックなんだろうか。

今日は休暇だし、あまり仕事を意識しないように。

「あらら、この道も汚いし臭いねえ」

武器屋の小道に入っただけいいけど、ゴミは散らかってるわ、排泄物は転がってるわで、とても王都の姿とは思えない。僕の領内では

「あーっ、あーっ、デルフーっ、なんか喋ってよ」

「大丈夫か？」

武器屋の手前にある秘薬屋にも寄っておく。

希少な材料や秘薬を今のうちに購入しておけば、後に何か作るかもしれない。自作の香水作りつてのもなかなか高尚な趣味で貴族っぽいから、試してみよう。

それにしてもくさい場所が多い。ファ○リーズをぶっかけたくなくなる。

「いらっしやいませ」

あら、客に挨拶するような主人だったか。

「香水の材料になる物を出してくれないか？ あ、希少な秘薬もあるば」

「畏まりました」

奥に引込んだ主人をしばらく待つと、木箱を両手に抱えて帰ってきた。中を覗くと色とりどりの壺「ビン」が所狭しと並べてある。紫とかエメラルドって、化学汚染された川でもあるのかね。

「香水と言っても、匂いだけの物なら店頭に並べてあります。この

箱にある材料ですと、調合次第で様々な効果が望めますよ。そしてこの水の精霊の涙。これは以前から少ない物でしたが、最近になって水の精霊が現れなくなったという話があつて、少々高くなつてます」

棚に並ぶ壺をそれぞれ嗅いでみて、気に入った香水をふたつ手に取る。

「これと、香水の材料は小壺で全種類もらうよ。後は>ヒーリング<に使う水の秘薬をこの壺にみつっほど。水の精霊の涙はいくつあるの?」

「小壺でみつっ。しかしこの少量でもひとつ300エキューですよ」  
「構わないよ、それ全部もらう。いくらかな?」

主人は嬉しそうにながらも、売る事を惜しむ気持ちが見え隠れしている。入手が難しくなっているのは本当らしい。

買った物を4次元に放ると、次は武器屋へ。

主人は変わらずやる気のなさそうな顔をしているが、入った時から少し姿勢を正してこちらへ向き直った。

「貴族の坊ちゃんが何のご用で?　ウチは真つ当な商売をしていますぜ」

「武器を見に。あとデルフの里帰り?」

「は?」

懐からデルフを出すと、やっと彼の記憶検索にヒットしたようだ。

「お、おめえはっ」

「元氣そうだなオヤジ」

「へっ、おめえも元気にしてんじゃねえか。しかしまさかあの時の……が貴族様だったとは」

そうか、貴族が相手だから態度も変わってたのか。どうりで秘薬屋の主人も最初から愛想が良いはずだ。

「いや、当時は平民だったよ。ゲルマニアに行って領地を買った」  
「げっ、金持ちだったんだな……」

吹っかけときゃ良かったなどと本気で言っているあたり、ボツタクリ武器屋なのは間違いないらしい。この主人はもう少し考えて接客しやがないんですね。

「今度さ、領で軍を編成しなきゃいけないんだけど、武具をひとつ残らず前の領主に持っていかれてんだよね。少し安物でも良いから、大量発注したら安くなるのか？」

目玉をひん剥いたように驚いた主人は、真剣な商売人の表情を浮かべている。それなりに雰囲気も出ているし、最初からちゃんとしとけばいいのに。

「軍ね、武器は槍、防具は軽い防刃の鎧と兜ってとこか。武器より防具の方が高いぜ？」

やっぱりそうなのかな。

> 錬金くに頼って鍛冶をすると、どう考えても鎧の方が細かい作りになってしまう。薄い板金をのばしたような鎧だけならともかく、鎖帷子のように編み込むタイプは製造が困難だ。手工業の発展ってどうなんだろうか。

「意匠はこっちでやるからいい。ただし、あまり個体差のある防具は困るね。数はとりあえず武器を100、防具を100。期間はそちらの都合に任せる」

僕がチェックしてそれなりの格好に>錬金くしよう。

実のところ、必ずしも出金して購入しなくとも、>錬金くで作れば手に入る。しかし、商売の繋がりを無視して、全部作ったりするのは下策。僕以外の人が不可能な手段を使えば使うほど、領地経営を任せる時になって難航するからだ。

後の事を考えて、武具購入がどれほど領経営の負担になるか、書類に残しておきたいというのもある。

「お安い御用ですぜ。お抱えの土系統メイジに連絡して、全部作らせますわ。ひと月ほど時間をもらえますかい？ 値段はこのくらいで」

紙に書かれた値段はそれなりに納得できる範囲。それでも、数万エキューが軽く飛んでいく。武器や防具が高価になってしまう事情は知っているけど、これはちよつと痛い。

平時の軍は勿体無い。治安維持をさせながら訓練を課すにしても、それなりに給料を払わないといけないし。でも、隙を見せれば犯罪が増えるわけで。必要経費ですよ、はいはい。

「ああ、手付け金で3割払っておこう。期限を守らなかった場合は1割引きね」

「構いませんぜ。それじゃひと月後にこっちへ来てくだせえ」

「ん、それじゃ頼んだ」

手早く済んで助かった。なんとなく流れて仕事しちゃう辺り、職業病が本格的になってきたかも。あまり真面目にやっていると、反動

が怖い。

「おい、貴族に睨まれるような商売に手え出すなよっ」

「ったく口の減らねえ。ま、元気でなデル公」

「おうっ」

武器屋を出るともうお昼時。どことなく良い匂いがしてきて、お腹が減ってきた。ついでだから魅惑の妖精亭でご飯をいただくのが良いかもしれない。

魅惑の妖精亭と言えば、名物店長と可愛い女の子の接客を思い浮かべてしまうが、それは夜に限った話であって昼間はそこまで露骨ではない。店長がこれみよがしに毛深い体を見せつけているのは、彼の純然たる趣味だろう。

木製の円卓の傍にある椅子で腰を落ち着け、店員に注文をする。トリスティンは海と湖が近場にあるからか、他より魚介類の料理が豊富だ。調理法の殆どがバター炒めというのは少し勿体無いけれど、個人的には肉より好きかもしれない。

原因は香辛料の不足。それは魔法という特異な技術の弊害でもある。>固定化くという便利な保存技術があるせいで、食品の保存に苦勞を感じていないのだ。

しかし、魔法の恩恵を受けるのは、基本的に貴族のみ。

少なくともド・ラエモン領の平民は冬を越す時に、まず家畜の飼料がなくなってしまう、その家畜を食肉として屠殺「とさつ」するのが通例となっていた。その肉も春が来ると腐ってしまい、他にタ



ンパク源もないため仕方なく食べていたようだ。元来、この肉を美味しく食べるために必要なのが香辛料。

平民が強く求めても、世の流れは変わらない。貴族の連中でさえ手に入らなくなるまで、香辛料の不足は続くはずだ。いつそ作った方が早いように思う。

頼んだ魚料理をパクつきながら、店内を見渡す。

賭場の件で後始末を任せた傭兵から、その後の事を聞き出すのも目的のひとつだ。彼は魅惑の妖精亭に足繁く通っているような事を言っていたし、見つければいいな、と軽く考えている。

「ねえ、デルフ。賭場の傭兵してた男の名前、覚えてる？」

「さあな」

困ったことに、名前どころか顔もあやふやにしか覚えていない。

「ひでえなミカド。俺はマルケスだつつつの」

「お、こいつじゃねえか？」

件の処理を任せた彼であろう人物が後ろから声を掛けて来た。短髪と無精ひげが印象そのままで、少し背丈は低いように感じた。しかし、間違いなく件の彼だろう。

探すつもりでは居たけれどこんなすぐに出会えるとは、袖振り合うも多生の縁ってやつなのかな。

「や、久しぶり。その後はどう？」

「ま、ボチボチ仕事をしてる。あの賭場なら、オデムと店員たちは投獄。あの店をぶん取った貴族が後ろ盾になって、新しい賭場をやつてらあ。王宮の貴族様って話だから、前みたいにかねえぜ」

ニヤニヤと小気味の良い笑い顔を浮かべ、そう忠告してきた。  
オデムって誰だっけ？ それはともかく、潰すよりもトラブルが  
起きる限界まで搾り取って、他の賭場を回った方が効率よく金を稼  
げる。前のは少しやり過ぎたなと、今になって反省してしまう。

「もう賭場を潰すような真似はしないよ。これでも僕は領地と爵位  
を持った貴族だ」

「そっぴやマントを着てるな。領地を買うために賭場で稼いだのか  
？ 羨ましい限りだぜ。」

あ、そうそう、貴族と言えばあの時おまえさんの隣に居た貴族な、  
あいつ傭兵になったぞ。どうも親の物を担保に借金したらしくて、  
勘当されたらしい。全く、だから熱くなるなって言ったのによ」

彼は馬鹿な野郎だなどと言いながら、こなれた具合で店員に軽い  
食事と酒を頼んでいる。

しかし賭け事で借金して勘当か、碌でもないけど軍に欲しいな。

「知り合いなら紹介してくれないか？ 仕事の話がしたい。もちろ  
んマルケスも一緒にね。出来れば時間のある日の夕方からでも」

雰囲気からして何か欲しがってるし、食いつくだろう。

「早速かよ。おまえさんは何かしら俺の幸運を持つてくる気がして  
んだよな。前の時もこう、ビビツときてたんだよ。」

あの貴族崩れ、名前はマストっつーんだが、あれで火のラインメ  
イジらしくて仕事は結構あるんだわ。ま、明後日の夕方なら呼べる  
から、ここで落ち合っつてことでいいか？ 秘密の話でも宿を取れ  
るし、飯でも食いながらな」

「それで頼む。よし、今日は僕の奢り。再会を祝して乾杯でもしよ  
う」

店員の子にワインを頼んで、それから少しハメを外した。  
休暇ってこうだよ、うん。

魅惑の妖精亭で2階の部屋を借り、薄明かりの中で大の男が話をする。絵的にむさ苦しい感じなのは、マルケスが荒くれっぽく茶色い短髪に髭面で筋肉質だからだろうか。連れてきたマストという名の青年は貴族らしく清潔な印象がある。

「確かに俺は貴族の放蕩息子で、学院にも行っちゃいない。ま、こないだ家名を名乗るなと言われて、マントも没収。トリステインの貴族として終わってるんだけどな」

自嘲気味に言う彼も、多少凹んでいるらしい。歳は16。髪は薄っすらオレンジに見えるブロンドで碧眼。身長は180 سانتそこそこ。なかなか良い体格をしているから、傭兵に向いてたんだろう。

「んでもよ、内々の処置だったんだろ？」

「そこだよ、難しいのは」

マルケスと再会して2日後の夕刻。約束どおり魅惑の妖精亭に現れた彼と、連れてきた貴族の息子を連れて中へ入り、晚餐と多少の酒を頼んで談話していた。食事が済んだからは別室を借り、本題である僕の持ち込んだ仕事の概要を話したのだが、難航しそうだ。

「俺がゲルマニアの領地で傭兵なんかしていると、家が責任を取らさ

れるかもしれん。ま、問題視される前に勘当したって言うだろうけどな。

それに、ゲルマニアの貴族は評判悪いんだぜ？ トリステインは魔法至上で貴族は格式を重んじるから、メイジじゃない貴族なんてのが、平然と政治の舞台に立てるゲルマニアとは特に相性が悪いのさ」

言い方からすると、マストも影響は受けているっぽい。

「まだ坊ちゃん体質が抜けねえのかよ。先がおもいやられるぜ。とりあえず俺の顔を立てると思って、話だけでも聞いていけ」

「分かったよ」

マルケスも貴族にボロクソ言い過ぎだ。そこらの貴族なら不敬罪だとか難癖を付けて、町中でも切り捨て御免しそうなんだけど。マストって案外おらかなのかな。

「大まかに言うとな領内の治安維持部隊を編成している。もしも戦争が起こって国から軍を出すよう催促されても、金を払って拒否する方針。建前として武具はそれなりのをこちらで用意しといた。

マスト、君にはその軍のリーダー役になって欲しいんだよ。メイジなら遠くから攻撃しつつ指揮ができるし、書類仕事も出来る。特に読み書きは必須条件だからさ」

メイジ、とりわけ貴族や元貴族のメイジは確かに優秀なのだ。ただその能力以上に誇りや自信過剰さが鼻について、どうにも扱いづらい。マストも傭兵をしていてなお、そういった部分が残っているはず。

「戦争に行かねえのは願ったりだが、報奨も望めねえからなあ」

「や、例えばオーク鬼の討伐なんかだったら、倒した人に報奨は与えるよ。亜人が居るって報告は受けてないけど、森林伐採してるからこの先もそうとは限らない」

「ならいいな。戦争で前に立たされるよりや安全だわ」

マルケスは既に取り気な様子だが、マストは考え込んでいる。

「マスト、兄弟は居るのか？」

推測でしかないけど、放蕩息子なんてのは大抵の場合に家督を継げない立場なんだ。もしそうなら、こっちの領で便宜を図れるかもしれない。

「ああ、兄がふたり」

「家督の問題はないな。ならマストは軍の運営とは別に、領の仕事を手伝えればいい。ド・ラエモン領の経営や治安、その他諸々を勉強すれば、貴族として必要な考え方は身に付く」

「……………」

「将来王宮に仕えるとしても、実務経験の有無は評価に大きく響くよ」

「ゲルマニアの領地だけだな」

苦虫を噛み潰したような顔だ。

「確かにトリステインで重用されれば理想的だけどね。格式を重んじる国柄だから、魔法学院を出た貴族から順に登用するのが通例なんじゃないの？」

あ、話は変わるけど、軍の人員もまだ空いてるんだよね。ふたりとも信用できる人が居たら、僕が面接するから連れてきて欲しい」

軍は僕がある程度の訓練カリキュラムを組んでおき、実際に激を飛ばすのはこのふたりの予定。組織の最高責任者は、書類仕事と顎で人を動かすのがいいよね。

「信用できる奴ね。心当たりがない事もないが、ミカドに転がされたあの時の傭兵でもいいのか？」

あの中に知り合い居たのね。

「構わないよ。ただし契約違反は厳罰。契約書にも明記するけどさ、そこははつきり伝えてね」

「了解」

残るはマストがこの話を請けるか否か。

「すぐに辞められるような契約ならいいぜ、雇われる。代わりにこつちの家名で問題が起こりそうなら、すぐ辞めてやる。それでいいか？」

釣れたっ。

「その条件なら問題ないよ。契約書は作っておくから、後日また会おう。そうだな、1週間後にまたここでいいかい？ それまでに出発の準備を済ませておいてくれ。これは支度金だ」

金貨10枚づつを渡しておいた。

「ああ、分かった」

「了解したぜ」

最初は武具も届いていないから、体力づくりをさせればいいか。  
本格的な警備や巡回、魔物の討伐依頼の処理、その他の雑務はその  
後にも押し付けよう。

むふふ、ねんがんのめいじをてにいれたぞ。

## ろくわ（後書き）

今、読んでみると色々と拙い文章ですが、みなさんに楽しんで頂ければ幸いです。

改訂中につき、安定しない部分が見られます。数字の表記を英数字に変換しているので、少々見苦しいかもしれません。



## ななわ

「ほら！ 指導する立場でその程度だから舐められる！」

「無茶を言うなっ（ウル・カーノ・）」

荒くれの傭兵を連れて来て、既に二週間が過ぎた。

あれからラエモン領でも任意の徴兵を開始して、希望者の中から体力のありそうな人間を雇用。規定の人数まで達した軍の兵士たちは、毎日トレーニングに励んでいる。科学的根拠のある訓練プログラムだから、一般的な仕事より遥かに休みが多くて好評だ。

隊長に任命したマストとマルケスの二人、それと彼らの連れて来た傭兵六人の合計八人だけは、僕が戦闘訓練を施している。彼らにこの事を伝えた時、マストはニヤニヤして「大丈夫なのか？」といい、マルケスは苦笑いしていた。

「デルフ吸えっ」

「おうよっ」

放たれた>ファイアー・ボール<をデルフに吸収させる。

デルフリンガーの経験を読み取りながら訓練を行っていると、錆だらけの姿が綺麗な刀身になったばかりか、魔法を吸い取れる能力まで発動してしまったのだ。

主戦力が魔法の世界でそれを吸い取る武器というのも、ちょっと反則気味。だが、僕は謝らない。僕は最強、僕は無敵、僕は神いわるゆるGODなのだ！ ツハツハアー！ ごめんなさい。

「き、汚ねえっ」

口汚く罵ってくるマストも既に何度か経験済み。

彼から放たれた>ファイアー・ボール<は直撃コースから外れ、僕の足元に着弾する予定だったようだし、本人は目の前まで走って来ている。

「>錬金<で槍を生やした方が良いんじゃないの？ 相手の武具は>固定化<があるけど、足元とか建物の壁とか狙い目。室内なら土は四系統の中で一番厄介な魔法だよ」

スクエア並みの土系統メイジが近づいて>錬金<すれば、大抵の相手は効率よく殺せるはずだ。貴族の決闘はルールが優しいし、戦争では悠長に近づけないから、それが役立つかと言えば、微妙？

「余裕だなっ！」

この世界で武器を扱う時の基本は、突きと叩き潰し。

質量を大きくした大剣は鈍器と同じ使い方で、叩き潰すことに重きを置く。斬ることに特化した武器や幅の細い剣を持つと、板金の鎧「プレート・アーマー」に対抗できないからだ。

平民の傭兵が大剣を好むのも、これが大きな理由となっている。

貴族は武器を選ぶ時に、携帯した時の外観を重視するため、レイピアなどの細い剣を好んで使う。規範となるべき王軍の衛士ですらそうなのだから、他はお察しだ。

鎖帷子の存在があるため、斬るという攻撃方法はあまり効果を期待できない。残る方法論は刺突のみ。もちろん、それさえも鎧を着込んだ相手には通用せず、魔法を使う事になるが。

マストも例外ではなく、契約済みのレイピアで突いて来ている。

「余裕だよ。突きは有効な攻撃手段だけど、引きが遅いと武器自体を飛ばされたり、槍だと掴まれることもあるね。その場合は死に体つまり死んだも同然。ゲームオーバー。人生の負け確定」  
「くっそっ」

レイピアの刀身を弾いて、突きの軌道を逸らし、切っ先が流れた瞬間、懷に潜ってマストの小手を掴んだ。ついだからそのまま柔術で言う「崩し」を仕掛け、綺麗に投げておいた。

突き特化の武器を持った場合、間合いが極端に近いと何も出来なくなるのだ。ステイレットと呼ばれる鎧通しの短剣を用意しているものの、咄嗟にそこまで判断するのは難しい。

「魔法の運用は臨機応変に。それと武器に合わせた戦闘技術を磨いた方がいい。レイピアならトリスティンの魔法衛士隊で教えてる、詠唱しながら戦うやつ。確か本があったから、勉強しとくといいよ」  
怪我をしないように投げたけれど、受身を取ってすぐに立ち上がるのは流石だ。傭兵している関係で、戦闘の仕事なんかもあったのかな。

「真っ向からラインのメイジと戦うんざ、ゾツとしねえ。俺なら逃げるな」

マルケスは「おっかねえ、おっかねえ」と繰り返す。

僕の場合はデルフが魔法を吸収するから、無策ではないのだけだ。

「それは正しいんじゃないかな。これは正面对決になった場を想定した、あくまで訓練なんだし。本来、相手がメイジなら魔法を使わせないための努力をするべきだよ。傭兵なら弓兵なんかの対処。と

にかく遠距離が鬼門だね。

こっちが攻める側なら地形を駆使して罠を張ったり、後ろから襲ったりが常套手段でしょ。最初から真つ向勝負を仕掛けたりするのって、馬鹿のすることだよ？」

マルケスとマストが呆れているように見える。

僕は卑怯な手を推奨しているわけじゃなくて、避けられない戦闘ならば万全を期して挑むべきと言ってるのだ。特にルールの無い犯罪者との対決や、戦場の最前線などではちよつとした事が生死を分ける。と、デルフから吸った経験で分かる。

「おでれーた。使い手でもねえってのにな」

前から言ってる使い手やガンダールヴとは一体何の事だろう。そのうち調べてみるか。

## 第七話

### 入学準備

ラエモン領軍の隊長マストとマルケスがトリスティンから連れてきた人間は六人。考えるのもかったるい感じだったから、そのまま副隊長として補佐に付けた。

あまり知り合い同士で馴れ合わせると、俺ルール発動しまくって規律を乱す恐れもある。しかしそこは厳しく警告したし、命令に従わせるため僕との戦闘訓練でも力の上下関係をはっきりさせた。一度は賭場で戦った傭兵も居るし、そうそう無茶はしないはず。

軍全体の訓練は注文していた武具が出来上がった時点で終了。継続するトレーニングは隊長と副隊長にカリキュラムを渡しておいてきつちりこなしてもらうことにした。

マルケス隊は予定通りシサイへ送り、塩の製造施設を重点的に警備させながら、村の治安維持にも貢献してもらっている。

マスト隊に関しては少し特殊で、治安維持などの業務は副隊長に任せ、隊長だけ書類仕事のお勉強。秘書のフラーマにマストの教育役を押し付けた。隊長という肩書きがあるせいで軍の方も放置できない彼が、恐らく領内で一番忙しい。

フラーマとエルサには通常業務をしつかり行ってもらっている。

僕は重要な經理の書類を一週間に一回ほど見通して、次に行う政策を練ったり領内の視察。多分、領内で僕が一番楽だ。計画通り……ッ！

別に働きたくないでござるということではなく、必要不可欠だったというだけの話である。今年の収支が黒字転換したなら、来年は晴れて学生の身となる予定。

「でもなあ、領から僕に五年かけて返すって計算なんだよね」

一年目に大幅な赤字を計上した反省として、武具の代金は借り入れという形にしておき、僕に毎年返すという設定。經理の形式を気にしてはいないものの、分けて記す方が先々の見通しを立て易いのだ。

武器屋に頼んだ武具は、少なくともライン以上の>固定化<が掛かっていた。確認したのはマストで、彼の>鍊金<を全く受け付けなかったのだ。

仕方なく全ての防具の意匠と再度の>固定化<は、僕が一人で行った。

「黒字転換……微妙にギリギリな感じだ」

「むー、黒字になる要素は十分ありますから、大丈夫だと思いますよ？」

エレサも十六歳になって、経営や経理に慣れてきた。散々に仕事を押し付けた成果が、ここにきてようやく花開いている。

「税を減らしたのと、出費が嵩んだので前年度はかなり赤字でした。特に家畜と農作物の種を購入した分が、大きいです。その他にも排泄物の件で人をいっぱい雇いましたから。衛生管理？　でお風呂の管理人とか、排泄物の回収と運搬。シサイは塩田の管理と作業員」

あまりに排泄物と肥料の施設がくさいから、働く人のために公衆浴場を設置して管理させている。

湯の温度管理は火石で熱した湯と水を足せば簡単だし、ポンプのアーティファクトで水を貯水槽のような物に保存すれば、シャワーまでいかなくとも栓をレバー操作で開閉する事で水を出すシステムは出来る。福利厚生施設という設定にしてあるため入浴と石鹸は無料。桶やタオルは持参。

「税は他の領地より少し低めに設定しただけだよ。町を綺麗にしたのは病気を減らすと同時に、仕事を増やしただけ。農民が多すぎなんだよ、農地は少ないのに荒地が多いしさ。これじゃ食うにも困る」

以前は六公四民といった具合の税率でも赤字だったらしい。

でもそれはラステン領軍の規模が大きいからであって、ラエモン領軍の規模でなら黒字になる計算。それに加えて塩の製造販売が非常に強く、売り手市場なので何処でも売れる。戦略物資は伊達じゃない。

恐らく、ハルケギニアの何処かで掘られている岩塩について調べ

てみたが、詳しい採掘状況は分からず、相場からすると多くは無いと予想。

むしろ、採掘の調査をしている最中に、風石が地下から出てくると判明。ラエモン領でも採掘できるかと調べてみたら存在を確認。棚から牡丹餅な気分だった。

「あははー。他に仕事ってありませんでしたから。この一年で吃驚するほど変わっていますよ。」

農業が楽になる様々な道具を作ってもいまして、農民の出稼ぎも流行してます。次男三男などが居る農家はシサイに出たり、町の公的な施設で働いたり。

家に十分なお金が入るから、食べるに困らなくなった人が増えます。」

食うや食わずじゃ人口も減るばかり。結果、税収も落ち込むというのに、貴族たちは何を考えてるんだろう。税率を上げればいいなどと真顔で言いそうだから怖い。

「ま、それならいいか。農地と農民の比率が不自然なのは、最後まで謎だったけどね」

「あはは……それは侯爵様におっしゃって下さい」

またラステン侯爵なのか。しかしこの件に関して、彼は墓穴を掘ったと言わざるを得ない。何故か少ない農地に、嫌がらせのような数の民を置いて行ったのも、マンパワーを軽視しているのが要因だろう。彼は限りある現在の農地だけで満足しているのだ。

荒地の土を肥えさせる方法さえあれば、ド・ラエモン領の少ない内陸地域でもあと五倍の人口は賄える。それに必要な要素を集めてきた僕の領は、これから農地を拡大してゆくだろう。

ラステン領ならば、もっと広い土地が放置されているというに、

勿体無い。

「よし、一通り見た。黒字は確定かな、ドンブリ勘定で純利益三、四千エキユー」

と言っても、予定外の支出なども稀に良くあるため、吹けば飛ぶような額。個人の収入なら、それはかなり大きな収入となるけどね。

「ミカド様って時々ですけど、意味の分からない言葉を使いますね。皆の噂では東方から来たという事になっていますけど、本当だったんですか？」

勘定が正しく翻訳されるから、ドンブリが駄目なのかな。僕の場合はハルケギニアの公用語で喋っていないため、こういう事が稀によくある。

「ハルケギニアの外から来たという意味でならね。それはそうと、来年から僕は魔法学院へ行くから、後の事は頼むよ」

「うーっ、もしかして私とフラーマの仕事が多いのはそのせいですか」

凄く嫌そうだ。

「うん。予行練習と任せられるか試すためにね。いきなり領主の仕事を押し付けるのは流石に無理だよ。それに仕事が多い分、給金は高くしてる」

「うつつくう……そうですけどね。お金に余裕があるのは嬉しいです」

この二人の給与は一般的な領民とは比べ物にならない。マストよりは低いものの月に四十エキユーと言えば、下手な貴族よりも多い



場合だってありそうだ。

「そう凹まない。内政は一人雇うからさ、教え込めば楽になるぞ」  
「おーおーっ。どんな方ですか？」

「ラエモンの町の商人の三男。あそこの次男はシサイでミカド商会の塩を任せてるからさ、話もすぐにまとまった。本人も経営が本業だし、すぐ覚えるんじゃないかな。」

塩の方に興味あるっぽかったから、こっちでシサイ方面の書類を任せればいいよ」

他の領や商人に洩らしたくない類の情報は、いまのところ閉鎖中。塩の方の書類は問題ないし、塩田を見よう見まねで作っても必ず失敗する。堆肥の作り方や牧草の発酵、つまりサイロの情報、水車と風車の設計、他にも細々と秘密を保持したままだ。

「はあい。早く覚えて貰おうっと」

執政室の扉がノックされ、許可するとフラーマが入ってくる。手には数枚の書類を持っており、どうやら僕の方の用件らしい。

「ミカド様、こちらがウィンドボナ魔法学院の入学願書。こちらがトリステイン魔法学院です」

「ありがとうございます、フラーマ」

仕事ではなかったようだ。ラッキー。

「休憩にしないか？ お茶とお菓子を用意してくれ、エルサ」  
「はあい」

喜んで部屋を飛び出して行った。

この時間のために生きているような女の子なのだ、彼女は。

「どちらへ入学なさるのですか？」

「寮に入る規則だからね、どっちでも良い。デルフはどっちがいい？」

「ん？ どっちでもいいんじゃないのか」

ふむふむ。相変わらずだな、デルフ。

僕は礼儀作法を正しく学びたい。それに貴族の性質をあまり理解していないというのも、いささか拙いと考えている。このまま一切の交流をせずに居られるとは思えないから、教育の場で貴族を見極めると同時に対処法も覚えたい。

「トリステインに入学する。厳格な貴族が多いとマストに聞いているから、僕に必要なものは自然と身に付く場所だと思う。ゲルマニアは少し破天荒な印象があるね」

「いいんじゃないか？ >フライ<で数分も飛べば着くだろ」

「は？」

口を開けたままのフラーマが、間の抜けた顔で僕を見つめている。

「僕だつてメイジなんだよ？」

「あ、いえ、失礼しました。鎧に>固定化<を掛けていたり、必要な施設を>錬金<でつくつたと聞いていましたから、てっきり土系統のトライアングルかスクエアかと」

「ん、まあ、これでなかなか優秀なメイジらしいよ」

お茶を濁しておいた。

フラーマの堅苦しい言葉は癖になっていて、本人はそちらの方が楽なようだ。もう館で五年以上も使用人をやっているから、直すの

も面倒なのだろう。その分、エルサがホワホワしてる感じだから、中和されて丁度良い。

「お茶をお持ちしましたよー。開けて下さいー」

「はいはい、置いておけばいいでしょ？」

お姉さん大変ですなあ。二人で一緒にお茶の用意をしていると、姉妹のように見えてしまう。髪の色や体格なんかは全く違うんだけどね。

「ありがとう、それじゃいただきますかな」

「はい」

今日のおやつはワツフルのようなもの。トッピングにクリームやフルーツが置いてある。

上機嫌なエルサを見ると、微笑ましい。

「学院へ行っている間の仕事はいかがなさいますか？」

「今の僕がやってる仕事はこれから僕がやるから、執務室の鍵付き書庫にでも置いていて」

「いつも通りですね」

ふつ、いつも貯めてるからね。

若干フラーマの視線に鋭さがある。

「まあ、まだ半年以上も先の話だからねえ」

「内政の方の準備は出来ています。私としては軍の方が心配で……  
傭兵も多いようですし」

彼女の危惧するところは理解できる。

ゲルマニアが戦争をしていた頃は職にあぶれる傭兵も少なく、高い金で徴兵する貴族も多かったようだが、今は完全に平時なのだ。諸侯の軍から漏れた傭兵たちは、潜在的な賊と化している。

「マルケスは賢いからこそ僕を裏切らない。その部下もね。マストはフラーマも良く知ってるでしょ。傭兵たちは契約書にサインしてるから大丈夫。違反者は厳罰って明記してあるよ。」

でも、やっぱり民軍が一番頼りになるからね。兵士に関してはほぼ領民だよ」

「厳罰とは？」

口だけ動かして歪な笑顔を見せると、二人は体を硬直させてしまった。貴族や魔法が怖いのは理屈ではなく、条件反射の域に達しているようだ。僕を怖がってもらっても困る。

「犯した罪と法を照らし合わせるよ。奉仕活動から最悪は死刑。」

ほら公衆便所に溜まった排泄物を、保管場所まで持って行く仕事とかさ、堆肥を作る施設の仕事ってあるじゃない？ あれ、給金が高いから人も雇われてくれるけど、進んでやりたがる人って居ないでしょ？」

「いやーっ、お菓子の時間にそんな話をしないの！」

その形に似たクリームの乗っているワッフルを啜えたエルサが吼える。

悲しいけど、これって仕事なのよね。

「確かにあれは。でも、一般的な収入の二倍は魅力的ですよ。希望者は順番待ちですから、予定通りにどんどん人を入れ替えながら運営してます。公衆便所の増設の嘆願書はお読みになれましたか？」

排泄物関連の仕事は、どの過程も悪臭が付きまってくる。堆肥の施設はアンモニアが発生し始めると酷い。堆肥が発酵すると高温になるため直接の作業はさせておらず、間近でにおいを嗅ぐ事はないにしても、やはり施設の周辺はきつい。

体の臭いのフォローとして公衆浴場を無料開放しているが、それでも完全に取れないはず。この仕事が人気になるほど、まだ領民は貧しいということが。

「増設は無理。知ってるだろうけど、排泄物は数年ほど完全赤字だよ。領の発展に必要なだからやってるにしても、これ以上は駄目だ。せめて農地を拡大して一度目の収穫を迎えるか、若しくは肥料が余り始めた時に、他の領へ売れば。仕事を増やしたいなら、森の腐葉土を荒地に運ばせるよ」

考えずに増やすと、継続した赤字を延々と垂れ流してしまう。こういう売り上げの無い事業は、そう簡単に拡大するわけにいかない。

「分かりました」

「うう、もうやあ……」

下水処理って非常に重要な国家プロジェクトなんだぞ！？ 欧米が二十世紀までに何百億、何千億ドルと処理費用を食われてきた、国際的な大問題なの！

エルサは使用人の待遇が比較的良いせいで、少し贅沢に育ったのだろうか。もしかしてこれもラステン侯爵の甘やかしが原因？ またヤツなのか。

## はちわ

魔法学院へ入学するために必要な手続きを済ませ、僕が不在でも領に影響は出ないよう人も育てた。軍の編成と初期の訓練も終わらせ、重要施設の警備と領内の巡回などの実務をすることでここまできている。

よほどの事件でも起こらない限り僕に出番はなく、暇に飽かして香水の調合や各国の賭場を巡ったり、好き勝手に放蕩生活をして気付けば半年。魔法学院へと出発する時期に差しかかっていた。

哀しい事に領で得られる利益よりも、各地の賭場で巻き上げた金の方が多い。桁二つほど。

貴族の間では賭博が深く浸透してたらしく、各国の都市に賭場はあったのだ。賭場の売り上げの大半は貴族が落とすのだからと遠慮せずに勝ち続け、目を付けられては別の賭場へ移動。気付けば大枚が積み上がっていた。

いいのかな、僕。

そして魔法学院へと出発する日を迎えた。

「後は任せたよ。フラーマ、エルサ、ついでにマストも」

「俺はついだか。でもよ、何故ウィンドボナ魔法学院に行かない？ 言いたくないが、トリステインの貴族はゲルマニアを見下してるぜ。歓迎はされないはずだ」

マストには書類、実務、軍の方針までも任せている。

苦勞をした分だけ愛着も湧いているようだし、最近では軍の長としての余裕や貫禄も見える。賭場で借金作って勘当された男が、よ

くぞここまで成長してくれたものだ。

「そういう人間とは仲良くなれないから。選別の手間が省けそうで助かるよ」

逆に考える男、ミカド・サクライ・ド・ラエモン。

「ならいい。精々頑張ってこいよ」

差し出された手を握り、軽く頷く。

「マストもね。ああ、フラーマとエルサを守るように」

「領民を守るのは軍の務めだ。しっかりやるさ」

このご時世、狙われる要素など無くとも賊は襲ってくる。彼女たちも襲われないという保障は無い。

軍の長であり、個人の戦闘技能もずば抜けているマストに頼んでおけば、何かあっても対処できるだろう。むしろ、彼以外に頼めない。

「あ、これ忘れてた。矢避けのルーンの仕込みである工芸品。弓は最も動物を殺した武器の中の一つだからね、暇な時に作っておいた」

指輪、首飾り、腕輪の三種類。

「貴重なんじゃないのか？」

「や、領を運営する人材の方が貴重だよ。比べようもないな」

魔法を使えない集団がメイジ対策を考えると、必ずと言って良いほど弓の使用が前提となる。マストにとっては心強いお守りだろう。

女性の二人には意味の無いお守りになる事を祈っている。

腕輪をエルサ、首飾りをフラーマ、指輪をマストに渡しておく。

「おーおーっ、綺麗ですねー。ありがとうございます」

「光栄です。ミカド様」

「感謝する」

「それでは諸君の健闘を祈る。って綺麗に締めてみたけど、仕事あるから週に一度は帰ってくるよ？」

すっかり感動の別れにさせられそんな雰囲気だったわ。

「ちっ」

「そ、そうですわね」

「あはー」

「おい、ちょ、おま、舌打ちとか」

放蕩生活をやり過ぎて、求心力も何も無くなったらしい。

うだつの上がない窓際係長のような憂いを感じながら、館を後にする僕なのであった。

## 第八話

### トリステイン魔法学院

トリステイン魔法学院の周辺は草原が広がっている。王都トリスタニアまで繋がる街道の脇には、春の草花がその生を謳歌していた。  
燦々さんさんと降り注ぐ太陽の光に青い空、心地よい暖かな風。全てがその



地に息づくものたちを祝福している。

学院の広場では黒いマントを羽織った新入生たちが集い、つつがなく進行する入学式の緊張感と、これから始まる生活への期待感で胸が一杯の面持ちだ。

視線を戻すと、白い頭髪と髭をこれでもかと伸ばした学院長オスマンが地を這っている。威厳も何もないが、彼はこれでもトリステインの重鎮で、百年生きたとも三百年生きたとも言われる高齢のメイジ。

彼の適当な訓辞を聞いて、入学式は滞りなく終わっていった。

今は交流を深めるためのお茶会。その雰囲気はまるつきり社交の会場であり、僕のような人間にはかなり敷居が高く感じられ、居場所に困る。

学院で決められた行事の予定では、近日中に新入生歓迎の舞踏会もある。入学早々、社交ダンスなどという高尚なものを踊る予定まで立っていた。勉強する間もなく本番とはこれ如何に。子供を学院へ通わせるような貴族連中にとって、この程度の教養は既に通り過ぎたという事か。

「デルフ、社交ダンスの踊り方とか知ってる？」

「剣に聞くんじゃないよ」

くっ、役立たずめ！

本で研究はしてみたものの、図解が無いのだ。本当に文字だけで表現されてるから、常に相手の存在がある社交ダンスを完全に学ぶのは困難。

「あら、黒い髪に黒い瞳なんて珍しいわね」

声の方に振り向くと、赤い長髪の映える褐色肌の女性が立っていた。

左右の肘を持つようにして組まれた腕が、彼女の大きな胸を更に強調していて、哀しいかな僕の視線はフラフラと胸元を彷徨ってしまつた。

「あー、言われてみれば、数人しか見た事がないかな。君のように鮮やかな赤い髪も珍しいね。

僕はミカド・ド・ラエモン。以後お見知りおきを」

彼女は僕の心理を読み取ったのだろう、浮かべていた笑みを深くしている。

女の子の制服は黒く短いプリッツスカートと白いブラウス。彼女は上着のボタンを胸の半ばまで外して、大きな乳房を強調しているのだ。僕より六、七センチほど低い彼女の身長を履いているヒールが補い、位置的にもジャスト。

辺りは彼女のフェロモンに惹かれたであろう男性が数人。

彼女は自分の肢体を武器として認識しているようだ。眼福です。

「ふふつ、いいでしょう？ 燃え盛るような情熱の赤はフォン・ツエルプストーの証なの。私はキュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルツ・ツエルプストー。キュルケと呼んでね、ミスタ」

ながつ。何人が一発で覚えられるんだろうか。言ってる途中で息継ぎが必要かもしれない。名前で呼ぶ許可が貰えてよかった。

「ではキュルケと。僕もミカドと呼んでくれればいい。

ああ、そうだ。この剣はデルフリンガーという名前だね、インテリジェンスソードなんだ。紹介しておくよ」

「デルフでいいぜ娘っこ」

流石デルフさん、ぞんざいな挨拶ですね。あまり波風を立てて欲しくないんですが。

しかし、僥い願いと裏腹に、貴族たちの視線が僕へと集まっている。こっちみんな。

「あら、よろしく。剣を持ってるなんて、あなたくらいだったわよ」

「そう？　僕は田舎の貴族だから軍の訓練にも付き合ってたんだ。無いと落ちつかない」

「戦う男の人って素敵。ご教授願いたいものだわ」

妖艶な笑みを浮かべながらも、その眼は鋭い。雰囲気だけでもマスト並みのメイジを予感させる。でもまさか、最初に挑発を受ける相手が女性になるとはね。

この好戦的な空気……この娘、火系統……ッ！　ってさっき燃えがどうのと言ってたか。

「あははっ、機会があればね。それじゃ、失礼するよ、キュルケ」  
「ええ、またね、ミカド」

そして数人の男を連れたキュルケは去っていった。あの肢体から滲み出ている魅力に抵抗できない男は、すべからく彼女の装飾品となる運命なのだろう。

僕のような純日本人からすると、彼女は少し濃い。

ざっと人間観察を済ませてみると、目立つ人物はキュルケの他にも数人居た。

まず、桃色ブロンドの腰の下まで伸びた髪が綺麗な、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。彼女はトリス

ティンきつての名門ラ・ヴァリエール公爵家のご息女。身長百五十前半と小柄で痩せ型。凜とした清涼感ある風貌に、令嬢を思わせる上品な所作。完全無欠なお嬢様だ。

次に目に付いたのは、青いショートヘアと眼鏡が特徴のタバサ。身長も体格もルイズ嬢より小さく、身長より大きな木製の杖を持つ女の子。周りに関心が無いのか、本を読み続けていた。

金髪のゴージャスロールが脚まで伸びているモンモランシー嬢。身長百六十五前後だろうが、長身でありながら細身。近寄ると特徴のある香水がかおる可愛い子。でもゴージャスロールが超目立つ。

薔薇を咥えて女性を口説く男、ギーシュ・ド・グラモン。耳を覆う程度の長さの金髪。身長はモンモランシー嬢より高く、僕より数 سانت 低い。体格は痩身。フリルの付いたブラウスは特注品らしく、ボタンを胸元が見えるほど開放している。美丈夫であるが故に残念な青年。

そして給仕の中に黒髪の女の子が居た。アジア系の顔つきで瞳も黒。確かにハルケギニアでは珍しい風貌で、僕も同じ様な扱いなのだろう。

学院は優雅な紳士淑女の交流を、重要な教育と位置づけている。若いうちから領内の有力貴族と知り合い、貴族間の関係を学んで後に生かしてもらうためだ。僕もそれを求めて入学している。

でも、基礎教養を少しは教えて欲しいと、切実に願っています。無駄っぱいですね、うん。

「今年の新入生は残念ながら不作のようだ」

一言目からパンチのある言葉を生徒に投げたのは、ギトーという名の教師。彼は教壇に立つと生徒たちの顔を一人づつゆつくりと眺め、皆の注意を引いたところでそう言い放った。

「自らの系統も定まらない者やドットが大半。ラインは少数、トライアングルに至っては数人。風のスクエアである私の講義を受けるに値する生徒など、風系統で優秀なタバサとヴィリエ・ド・ロレーヌただけだぞ。この学院」

風が大好きなのは冒頭で理解した。聞くに堪えない話を魔法で全面カットしておき、目を閉じて時が過ぎるのを待つ。

生徒たちの様子も辟易してきた頃、元に戻してみるとまだ続く。

「であるからして、風は四系統でも最優の魔法という事実を分かってもらえただろうか。今からその最たる論拠となる、風の魔法をお見せしよう」

誰もが聞き飽きて睡魔に襲われ、語られる言葉を右から左に流していたその時、教室の扉が勢い良く開く。教室へ入って来たのは、河童のような天辺ハゲの男性教師。

「ミスタ・ギトー、今日は顔見せです。教師たちも順番を待っていますぞ」

「ふんっ、分かりました。それでは私の授業の時間を楽しみにしている」

ギターはフワサツとマントを靡かせると、風のように颯爽と教室を出て行った。動きまで風を意識してるならば、話の方もそうしてくれないかな。片手落ちもいいところだ。

「私はジャン・コルベール。みなさんの入学を歓迎します。トリステインの未来を担うため、立派な貴族となるため、この学院で必要なものを身に付けていって下さい」

先程とは打って変わって真つ当な演説。

眼鏡と頭の毛が寂しい事で印象は中年親父そのままな彼だが、中肉中背に見える体格もなかなかガツシリしているし、誠実そうで教師っぽい。

「今日のところは講義も行いませんし、これなんかどうでしょうかね？」

彼が取り出したのは木製の箱。その箱の蓋をパカッと開けると、中身はプツプツと小さな突起物がある円柱状の金属の上から、薄い金属板が被さったような感じ。用途は全く不明だ。

「この箱の横にある穴へ棒を差し込んで回すと……」

何かの旋律を奏でているように聞こえなくもない音が教室中に響き渡り、皆は耳に手を添えて苦情を訴えている。調律の知識がないのか、不協和音で酷い事になっているのだ。

「どうですか！ 魔法を使わずにこのような事も出来るのです！」

目を爛々と輝かせて、満足そうに喧伝しているが、どう見てもマツドな開発者の類ですね。確かに発想は見事だし、この世界の科学

技術を鑑みれば天才の部類かもしれない。だが、テーマは駄目だ。

とまあなかなか癖のある教師たちの自己紹介は続いた。

トリスティンの貴族についてマストから聞き出すたびに、貴族の格式と魔法で全てが決められる印象を持ったものだが、良くも悪くも個性的な教師たちを見ると、どこも変わらないように思えて安堵した。

それなりに楽しい学院生活となりそうだ。

トリスティン魔法学院は系統魔法の属性である火、水、土、風、虚無の五つになぞらえて塔が配置されている。その塔同士は壁で繋がられ、空から見下ろせば五角形。この形を見ると五稜郭を思い出す。

講義代わりの挨拶も終えて、暇を持て余したしまった僕は図書館へ向かった。ミスタ・コルベールから聞いた話では、国立図書館に勝るとも劣らない量の蔵書を蓄えていて、生徒は閲覧を禁止されているような書物もあるとのこと。

図書館へ入ると司書のような人が居る。彼女は僕の姿を確認すると、すぐに持っていた本へ視線を落とした。

置かれている本棚の高さは暗くて見えず、“フライ”や>レビティション<で浮かびながら本を探している人物もそこかしこに居る。魔法を使えない人間など考慮していない潔さ。流石の魔法学院だ。

まずは普段全く使っていないなかった木製の杖で>ライト<を使い、本棚の並びと基準を調べ歩く。

「ここは歴史かな。あ、デルフデルフ」  
「なんでい？」

今のデルフは鞘を新調して、いつでも喋れるようにしている。前に拘ねた時、この鞘でご機嫌を取ったのだ。黒を基調とした木製の鞘は、切っ先と鐔の付近を銀の装飾品で覆い、日本刀を納めるような意匠に仕上げている。

「前にガンダールヴの左腕って言ったよね？」

「それがなんだ？」

「使い手の名前がガンダールヴ？」

「いいや、使い魔のルーンだ。ガンダールヴのルーンを持った奴が使い手だな」

デルフリンガーは六千年以上も昔に作られた剣。最初の使い手が生きているはずもなく、次にガンダールヴのルーンを持つ者が現れるまで、あの武器屋で待つていた？

歴史にぴったりの話だから試しに探してみると、該当する本が数冊あった。大まかな内容は始祖ブリミルの伝承に関するもので、ブリミルが使役していた四の使い魔のうち、一つがガンダールヴと判明。その左手がデルフだとしたら、歴史的価値のある貴重な魔剣だ。更に魔法吸収の能力を加味すると、とんでもない価値になりそう。

「あなた、何者？」

「ん、はい？」

件の本数冊に没頭していると、抑揚の無い声で質問される。青い髪の小さな女の子タバサが、浮かぶ僕を見上げていた。失礼かと思いい、とりあえず目の前まで降りてみる。



「僕は今年の新入生ミカド・ド・ラエモン。よろしく」  
「タバサ」

こくと顎を引くようにして頷いた彼女は、名を名乗る。図書館だからという訳ではなく、常日頃から静かな少女は本を二、三冊抱え込み、ジッと僕を見つめた。

「通常、メイジは同時に二つの魔法を使う事が出来ない。あなた、何者？」

寝耳に水だ。

「一度に別の系統魔法を使う奴は見た事がねえな」  
「私も無い」

おろろ、どうしたものか。

「昔から飽きずに練習していてね、出来るようになった。てへっ？」  
「……うそ」

半開きの目でこつちを見つめないで下さい。見た目は可愛い子なんだけど、声は張らないし表情の変化に乏しい。お人形さんっぽい印象を受けてしまう。

「まあ、出来るものは出来る。タバサも練習してみれば？」  
「……そう」

長い間をとってそう告げた彼女は、数冊の本を>レビテーションで浮かせながら去って行った。手に光の灯るマジックアイテムを

持っているから、図書館ではそれが当たり前なのだろう。高さを考えたら当然か。

「はあ……ま、いつか。デルフはガンダールヴに使われてた武器？」  
「そうだぜ」

「デルフは使い手を待ってたんだよね？」  
「まあ、そうだな」

デルフリンガーはこの可能性を知っている、という事になる。

「ブリミルの使い魔じゃなくても、ガンダールヴのルーンが出てくる可能性があるんだよね？」

「虚無の担い手が召喚した使い魔なら、四つのうちのどれかが出るんじゃないか？」

打てば響くような軽さで答えたデルフの言葉で、ハルケギニアの伝説は伝説では無くなった。

系統魔法の始祖「ブリミル」の使っていた、伝説の系統「虚無」。五つのペンタゴンの一角を担うそれを、扱う者は誰も居ないはず。貴族でなくとも知っている、常識だ。

デルフは将来ガンダールヴが現れる事を知っているからこそ、それをずっと待ち続けていた。僕はどのメイジでもガンダールヴのルーンを刻む可能性があると考えていたが、それも否定。デルフの言葉はもう、虚無使いが何処かで生きていると言ったに等しい。一般的に伝説の中でしか存在しない虚無をだ。

実在する系統となるならば、伝説は伝説たり得ない。死んだ英雄だけが真の英雄って誰かが言っていた。ソースはたぶん、僕の最初の記憶。碌なことを覚えてないな、僕。

「ふんふん。ガンダールヴが現れたなら、デルフを渡せばいいのか

ね？」

「そうしてくれたらありがたいね。ま、いつになるか知らねーけどな」

あ、六千年だもんね。そっちも忘れてた。いつか虚無使いが生まれるのか、気の長い話だこと。

なかなか面白いテーマだから、とりあえずこの図書館で情報を集めてみる。いまだ見ぬ虚無の魔法とやらの正体を、この手で暴いてみせようぞ。じっちゃんの名にかけてっ。

## きゅわ

近頃とみに感じることもある。形式のある式典などの特殊な作法はともかく、一般的な礼儀作法はよほど格式高い貴族を相手にする時以外そこまで必要とされない、ということ。

新入生のグループ分けでソーンという名のクラスに振り分けられた僕は、タバサ嬢と同じの教室で講義を受けている。彼女は初日から講義と無関係の本を読み続けており、最近では>サイレント<を使って雑音と一緒に教師の声も遮断している。

僕も似たようなもので、複製しておいた王立図書館や魔法学院の書庫の本を読み、時には寝る。自らの存在感を薄くするため、認識障害の結界を張っているから気付かれない。魔法の講義内容を二度聞いたところ、内容が精神論ばかりだと気付いてからそんな調子。

大抵の教師の言葉づかいは綺麗だし教え方も丁寧。しかし、その内容が「やればできるっ！ イメージ！ イメージ！ なんて諦めるんだっ！」という具合で技術的な講義はほぼ無い。コルベールの珍妙なカラクリが一番の技術的講義という有様。

これならば、溜め込んでいた書物を読む方がよほど意義がある。

「デルフー！。舞踏会どうしょ？」

授業中の態度はともかく、貴族として最低限の嗜みを勉強するなら、やはり社交ダンスは避けるべきではない。しかし困った事に、肝心の教師が全く当てに出来ないのだ。由々しき事態である。

「誰かに教えてもらえばいいじゃねえか」

「はあ、人選が難しいんだよ。シユヴルーズとかいいかもなあ」

男性教師は不安要素がありすぎる。かといって若い女性教師に頼むのも、気が引ける。既婚者っぽいシユヴルーズならば問題はないかもしれない。

でも、前にあのくらいの人が未婚だったんだよね。

## 第九話

### 決闘

新入生歓迎の舞踏会は広いホールで行われている。準備の方は上級生や使用人がやってくれたようで、僕ら新入生は今回お客様に近い扱い。装飾された壁や煌びやかなシャンデリア、贅を尽くした料理の数々、ここは正に貴族を象徴するような場所だ。

若い淑女たちは綺麗なドレスを身に纏い、宝石や貴金属で作られた装身具をちりばめる。化粧は薄く上品なものにとどめていて僕好み。紳士諸君も負けじと燕尾服を着込んだ者や、この日のために仕立てたであろう特注の服が多い。それぞれが違った個性で異性にアピールしていく。

僕も失礼にならない程度フォーマルから外した、ファッション性重視のスーツを作って貰っていた。頼んだお店は以前百エキュートの服を仕立ててくれやがった、トリスタニアにある貴族ご用達のところ。

しかし、いかんせんダンスを踊れず、皿に盛った料理とワインを抱えてベランダへ逃亡中。

教えを乞ったシユヴルーズは執筆活動に勤しんでおり、忙しさを

理由にやんわりと断られたのだ。他にアテも無かったためズルズルと時間だけが流れ、この日を迎える。

「美味しいな。高い給金を払って雇った料理人は伊達じゃない」

「ミカドんとも雇えばいいんじゃないか」

「んー、検討しとく」

考え事をしながら周囲を見回すと、タバサ嬢を発見。彼女の前には沢山の料理が並んでおり、それを次々と口に放り込んで、小さな頬を一杯に膨らませている。リスか。

ダンスホールではキュルケとラ・ヴァリエール嬢が異彩を放っていた。どちらも魅力的な女性らしいドレス姿。妖艶な健康美を好むならキュルケ、幼さを残す可憐な美少女を好むならラ・ヴァリエール嬢。男たちは二人の周囲に陣取り、誘う機会を狙っている。

ベランダ側ではヴィリエ・ド・ロレーヌがソーンの女の子たちと一緒に会話中。あまり目立つ顔立ちでは無い彼だが、なかなかハーレムしている。ギーシュも同様に複数の女の子を侍らせながら、様々な女の子に声を掛け続けているようだ。

みんなよろしくやってるわけですね。

トリスティン魔法学院への入学は礼儀作法を学ぶのが主旨。この事実がある限り、舞踏会からの逃避は許されていないのである。他の貴族のご子息ご令嬢からすればなんでもない行為だろうが、僕にとっては鬼門。

本を読むことでしか学べなかったダンスを、今は観る事で覚えている。足運びの順さえ覚えてしまえば、確かになんでもない踊りな

のだ。何曲が終わる頃には単純なダンスならば踊れる、気がしていた。

日本では武将たちがこぞって日本舞踊を踊っていたという。足運びを綺麗にすることが、武道に繋がるからだと聞いている。真実はどうだか知らない。

余裕も出来て人間観察に戻ると、ラ・ヴァリエール嬢が壁の花となっていた。誘ってくる男どもを二言三言で蹴散らしながら、綺麗な形の眉毛を歪めている。対照的にキュルケは次から次へとパートナーを入れ替え、既に五人目と踊り始めていた。僕の参考となった踊りはほとんどが彼女のもの。

曲調は激しいものではなく、溜めのあるゆったりとしたテンポに乗せた優雅なもの。揺ら揺らと振れ幅を自在に操り、美しい音色の弦楽器を奏でれば踊り手も乗せられてゆく。

そしてまた曲が終わり、踊り場から人が引いている途中、妙な風の流れが湧き起こる。それは僕の見ていたキュルケの方へと進み、彼女の綺麗なドレスがその風によって引き裂かれた。幸い出血は無いが、胸を支えている部分が切れてしまい、彼女の豊満な胸が観衆の目に晒される。

「>加速<」

片手で胸のトップを隠して堂々と立つキュルケに、後ろから回り込んでマントを被せる。彼女は一切の恥じらいを見せず、鋭い笑顔を浮かべたまま振り返った。

「あら、ありがとう。残念だわ、あなたのような紳士と踊れないなんてね」

毅然とした態度を崩さず、そう言っただけ。

「そいつは重畳。ほら、僕って田舎の貴族だろ？ 社交ダンスは踊れないんだ」

「ふふっ、いいわ。お礼に私が踊り方を教えてあげる」

とても意味深な表情で言われてしまった。そういうお戯れをなさると、男どもの暑苦しい視線を一身に受けてしまうのですが。

少し表情が柔らかくなったところを見ると、余裕もできたようだ。

「またの機会にね。マントはいつでも結構」

「それじゃ、また後日。御機嫌よう」

胸を強調するような形になるよう、片腕でマントを抱きしめたキルケは優雅にドレスの裾を持ち上げて一礼。そのまま舞踏会場を後にする。僕は僕で隠していたデルフが丸見えになり、変な注目を集めてしまった。潮時だということで、彼女の後を追うように舞踏会場を出る。

「あなた、何者？」

「またかよっ」

渡り廊下を歩いていると、前フリも無くのっけから質問してくるタバサ嬢。沢山の本を読んでいるはずの彼女が、やたらと短い言葉を繰り返し使うのは何故だろう。

「はあ、今回はなに？」



「昨日の舞踏会。彼女の後ろに突然あなたが現れた」

虚無は失われた伝説の中にだけ存在する魔法だ。

僕も調べる際に図書館の禁じられた本さえも読み漁ったのだが、具体的な魔法を記す書はなかった。どうしても気になった僕は、魔法の種類だけ『いつでもどこでも検索エンジン』で調べ上げ、似た魔法を使っている。

四系統の魔法を優先で使うようにしてるけど、咄嗟に出てきたのがあの魔法。少々不味かったか。

「僕って軍の訓練をしてたでしょ。動きも早い方だから見落としじゃないかな？」

「……………」

ジツと見つめないでよねっ。

どうせ真実には辿り着かないのだから嘘で十分だ。伊達眼鏡でも掛けた小学生の名探偵でも連れてくれば、話は違ってくるかもしれないけどね。

「ちょっとお邪魔するわよ」

「お、キュルケ？ どうした、怖い顔をしてるぞ」

彼女の厳しい視線はタバサを捉えたまま動かず、僕の方を少しも見ようとしない。今にも決闘を始めそうな空気のまま、再びキュルケが口を開く。

「あなた、昨日の事は覚えていらして？」

「……………」

「聞いたとおり、まるで人形みたいな子ね」

キュルケの言葉を聞いたタバサは僅かに、その体を反応させた。瞳には今まで見なかった感情が浮かび上がっている。

何に反応したのかが分からない。まさか本当に犯人というわけでもなかるう。第一、メリットが無い。しかし確実にタバサの表情は変わってきていた。

「どうしたの？ 怒っちゃったかしら？ 誤魔化してもダメ。私のドレスは風の魔法で破られたわ。ドット程度でも使える魔法だったから、誰がやったのか分からずじまい。でも、周りに見ている人が居たのよ。あれだけ人が集まっていたんですもの、当然よね。ふふっ、このフォン・ツエルプストーに恥をかかせた報い、必ず受けて貰うわよ、お人形さん」

舞踏会の時のような微笑を浮かべ、タバサを凝視するキュルケ。胸中に渦巻く感情の昂りを抑えようとせず、目の前の小さな女の子に叩きつけている。

「私は人形じゃない」

「いいえ、人と情熱は切り離せないものよ。それが足りないあなたには、人形で十分」

キュルケを睨み返したタバサの瞳にも、確かな色合いがあった。キュルケが真つ赤な情熱の炎なら、タバサは冷徹で青白い氷を想わせる。紙縫りの先のように細く繊細で穿つような気迫が見えた。

両者共に引く気は無い。

「決闘を申し込むわ。今日の夜半に森の前までいらっしやいな。それでいいわね？」

「いい」

既に僕との会話も覚えてしまい。

タバサは威風そのままに静かな足取りで去って行く。それを見送ったキュルケもまた、ゆっくりとタバサの逆側へ歩を進めた。

草木も眠る丑三つ時。撫でるように吹く風は未だ冷たく、咲く花々も露の重みで頭を垂れ下げている。見上げれば青い月と赤い月。薄い雲がその顔を隠す。今夜の出来事を知っていたかと、勘ぐりたくなる空模様だ。

「悪いわね、付き合ってもらっちゃって」

「構わないよ。どうせ見届ける人も必要だろう？ 誰も居ないと危険だ」

僕らが来る前から、青髪の少女は待っていたらしい。ゆらゆらと風に靡く黒いマントで身を包み、ニメイルほどもある木製の杖を持つて平原に一人立つ。

「でも杞憂だったかな。それともこっちが本命なのか」

タバサの遙か後方にある森。月明かりも届かない木々の後ろで、複数の人がこちらを窺っている。魔法など唱えずとも、これほど光源が豊かなら見えてしまう。彼らのマントは全て黒、髪の短い男が一人、他の数人は髪の長さで女と予測した。

「何のことかしら？」

「水を差してよいのやら。まだ憶測の域を出ないからねえ。一つ聞

くよ、もしかするとキュルケに犯人を教えた人物って、ヴィリエ・ド・ロレーヌかい？」

彼の男は木陰に隠れて居ればよいものを、その顔どころか半身は木から出てしまっている。名前を覚えていたのは数少ない風のライオンメイジだから。今回の件、犯人は>エア・カッター<を使える人物に限られる。タバサという線も……無いよな、あの子はそういう事に興味を持たない。

「ええ、何故わかったの？」

「あそこに、居るからさ」

視線を森の方へ向ける。

「森の中？ よく見えるわね」

見えないか、資質によるものな。

「ほら、田舎の貴族だから、森とか平原で遠くは見えるんだよ」

「あなた、その台詞を何度使ったもり？ もう嘘にしか聞こえないわよ」

「社交ダンスを踊れないのは本当」

哀しいけど、それこそが本当。

「くっくっ」

「笑うなよデルフ」

「うふふっ。でも、もう遅いわね。この子の体から聞くことにしましょう」

言葉の届く距離まで近づいた赤と青の二人。

「ミカドは立会人よ。決闘のルールはご存知？」  
「知っている」

彼女の静かな言霊で風が蠢く。ルーンを紡いだ訳でもなくその力を発現させるほど、充実した力。一年生の中では一番の才能を持っている。幼くして争いの場に慣れているようだ。

「ふふっ」

薄く笑うキュルケからは不自然な熱を感じる。その獣性の表情でタバサの才覚をも呑み込もうとしている彼女。この拍子で威を放つ強かさ。

「頃合いじゃないかしら」  
「そうだな」

案外、似た者同士のように思う。持っている力も、方向性は違っているにしろほぼ互角。キュルケはもちろん、タバサも表には出さないが起伏に富んだ感性を持っている。

「僕が立会人をつとめる、ミカド・ド・ラエモン。一切の不正なく見定める事をこの杖に誓おう」

二人の中央に位置した後、木製の杖を天に掲げた。

「これは神聖なる決闘。取り決め通り杖を落せば負け。そして自主的に降参の意を告げても負けだ。死傷するほどの攻撃と判断した場合は私がその攻撃を止めに入り、立会人の権限で攻撃した者の勝ち

を認める。両者の安全のため最大限の努力は怠らないが、攻撃を止められずに死んでも恨むなよ。なに、僕は水のメイジであるし、特殊な秘薬も用意している。まず死なないから存分にやりたまえ。それでは、この杖を下ろした瞬間から開始とする。よろしいか？」

まずタバサの顔を確認して、次にキュルケを。両者共に軽く頷いて了解の意を伝えてきた。再び正面を向いた僕は、勢い良く杖を振り下ろす。

風上に立っているのはタバサ。軽いルーンの詠唱から風が生み出される。初手は短い詠唱の>エア・ハンマー<。まともに当たれば失神するほどの衝撃を受ける風の塊。風下のキュルケは横への移動を開始しており、風が来る前に>発火<のルーンを唱えて身を屈ませ、>エア・ハンマー<を流す。空気の性質を利用して風を逸らす、高度な戦闘技術。

初激いなししたキュルケは風下から風上へ移動。弧を描くようにタバサの横へ回る。その動きに並行する形で走るタバサ。さながら時代劇の殺陣のような光景だ。

攻撃という観点で風系統と火系統は共に強い。

タバサの風系統は組み合わせに水がある。火も土を使うより相性は良いが、一般的に水寄りの人が多い。キュルケの操る火系統の魔法は土と相性が良い。土の>鍊金<を駆使すれば、とんでも科学のウルトラCまで独力でやってのける事も可能。仕合巧者の火系統は恐ろしく強い。

走りながら先に出したのはキュルケ。>ファイアー・ボール<が風を裂くようにして進む。その火の玉はタバサの発した風によってあっさりと防がれたが、次の詠唱は既に始まっていた。タバサ

が風で応戦した時は一メートルほどの大きさだった炎の塊が、すぐに二メートルほどまで膨れ上がる。これが当たればタバサの体は蒸発してしまうのではないかと危惧するほど、デカイ。

「喰らいなさいっ！」

放たれたそれは、誘導されたようにタバサの体を飲み込もうと動く。しかし突如、水分の蒸発する音が聞こえ、炎の玉から水蒸気が立ち昇った。その後でタバサの放った>シャベリン<が炎を消滅させ、残ったのは白煙のみ。

タバサは逃げながら水の初歩>コンデンセーション<を使って>フレイム・ボール<の軌道上に水を置き、その威力を削っておいたのだ。それから飛び道具による相殺を狙うことで、水蒸気の影響を避ける。水の盾や風の盾なら多少の火傷も負っていたかもしれない。対応としては満点。しかし精神の消耗はタバサの方が多く、キュルケに先制を許しては後に響く。

「やるわね」

「あなたも」

立ち止まった両者は息を整えて、相手の唱えるルーンに集中している。

「（ラグーズ・ウォータル）」

「くっ」

水系統の混ざった混合魔法であることは明白だ。再び後手に回ったキュルケは>ファイアー・ウォール<の詠唱を始め、それが完成する直前にタバサから氷の矢が飛ぶ。その数はかなり多く、たった一つでも当たれば人の体を傷付けるに十分な威力を持つ。

そしてキュルケの前にある炎の壁を抜けた溶けかけの矢が数本、彼女の体に届いてしまう。

「っく」

タバサも楽な表情はしていない。主に風でコントロールする類の魔法らしく、膨大な数の氷の矢を制御するのにそれなりの精神を使ってしまうようだ。

炎の壁が萎んでいく前に再び>フレイム・ボール<のルーンを唱えるキュルケ。火は彼女の誇り。自らの系統を純化した攻撃に拘っている。愚直なまでに炎の魔法を使ってきたお陰か、詠唱の速度も他に比べ段違いの速さ。彼女は二メートルオーバーの炎の塊を作り上げ、壁越しに投げつける。

「…っ」

炎の壁に阻まれて見えなかったのか、その壁から現れた先程より一回り大きい炎の塊を見て、タバサは咄嗟に後方へと身を投げた。>フライ<で地面ギリギリを駆け、距離を取ったら減速もせずには>フライ<を解除。足を草で滑らせながらバランスを取り、そのまま詠唱して水の盾を作り上げた。質量の無い炎は水の盾に当たって平たい形に変化、盾の端を抜けてタバサの体に襲い掛かる。

キュルケは脚と腕、脇腹に氷の矢を受け、炎を飛ばしたところで満身創痍。それでも倒れず、いつものように胸を張っている。そこから数十メートルの距離を空けた場所で、タバサもまた脚や手に重度の火傷を負っているのが見えた。顔への影響を防いでいるのは女の子の意識か、そちらの方が戦闘で有利なのか。

「ふふっ、酷い有様ね、お互い」



「……………」

「次で終わりにしましょう」

その声がタバサに届いていたか分からないが、二人は同時に詠唱を始めた。キュルケの選んだ魔法は当然>フレイム・ボール<。一方のタバサは少し詠唱が長い。トライアングルの魔法だ。

先に放ったのはキュルケ。飛ばした炎は更に大きくなっているように見えた。その炎の塊とタバサの距離が十メートルを切った頃、彼女の前に大きな竜巻が発生。風の渦巻くその中にキラキラと輝く氷の欠片も見えている。

両者の魔法が接触。炎は風の渦に巻かれ、氷によってその形を変えさせられた。白い蒸気を発しながら進む竜巻は衰えを見せず、そのままキュルケの立つ方へと向かう。胸を張ったままその竜巻を正面に見据える彼女の顔に、悔いた色は無い。

## じゅわ

夜中の森にひっそりと佇む、黒のマントを羽織った男女たち。彼らは目前に広がる野原に居る三人の貴族を、ほくそ笑みながら見つめていた。

肉眼で観察するには少し遠く、百メートルあまりの距離を空けてはいるが、風の系統魔法>遠見くを使う男にはさしたる影響もない。

そして、ついに決闘が開始された。

小手調べ程度の打ち合いを見た男は鼻を鳴らし、「つまらん」とでも言いたげな顔をする。事実、男の能力からすれば低い水準の魔法だった。

しかし、次に赤髪の女の作った巨大な炎の塊には目を奪われる。火系統の魔法>フレイム・ボール<である事は疑いないが、とてもラインメイジ程度の実力で可能な大きさとは思えない。

自然と握り込んだ男の手の平に、ジトツとした湿り気が増す。

男ですら焦燥を感じるその魔法を見て、女たちの想像は悪い方ばかり膨らみ、恐慌状態にまで陥る者まで出てきた。

「わ、わたし、知らないわよっ」

そう言つて立ち去ろうとするも、他の女に腕を握られ立ち止まる。

「みんなで考えた事でしよう!？」

「落ち着きたまえ!」

男の大きな声を聞いて、我にかえる女たち。

「なにも恐れる事はないさ。あの程度の炎ならば……なっ!？」

視線を平原へ戻した男は、言葉を失くす。

青髪の少女から飛ぶ無数の氷の矢。それを炎の壁で防ぎ、更に反撃で先程よりも大きな炎の塊を撃ち出す赤い髪の女。その塊から、フライで逃げ、水の盾で防ぎ切った青い少女。

どれも男にとっては致命的な攻撃であり、防ぐイメージが湧かなかった。だが、彼女たちは平然とその攻防をやつてのける。ここに来て漸く、男は自らが彼女たちに遠く及ばないことを知った。

「くっ……あの時だつて誰にも見られちゃいない」

「で、でも……タバサがキュルケに全てを話したら、ヴィリエは疑われるわ」

再び紅い光が発せられ、平原は昼日中のような明るさになる。

月の光できらめく竜巻が炎を巻き込んで紅く染まっていたのだ。それもすぐに白い蒸気へと変わり、衰えた様子を見せない竜巻はそのままキュルケへと向かっていた。

「しんじやうわっ！」

「まさかつ！」

まさか、死者を出すような事態になろうとは。

貴族の決闘とは古くから行われ、確かに過去の記録では何人もの死者が出ている。しかし、立会い人を置く決まり事によってその安全性は飛躍的に向上し、今では水のメイジさえ居ればそれほど危険でないという認識が大勢だ。

それを知っていたからこそ、ヴィリエは彼女たちを決闘へと導いたのだが、認識が甘かったと今になって気付く。決闘とはおままとではなく、貴族の誇りがぶつかり合った時に行う最終手段なのだと。

ヴィリエは巨大な竜巻に蹂躪されるであろう彼女を、ただ見つめている。

## 第十話

### 事の顛末

タバサの魔法はゆつくりとした速度で進んでいる。その光景を胸を張ったまま見つめるキュルケに、動く気配は無い。

僕に全幅の信頼を寄せてくれるのなら、立会い人としてそれに答える義務がある。とは言っても、少しは弱めの魔法にするとか、影響の無い場所に逃げるくらいして欲しいな。

「デルフ、吸い取れ」

言うと同時に、瞬間移動。キュルケと竜巻の間に入る。

「おうよ」

魔法はデルフに吸われ、その悉くが虚空の彼方へと消える。

キュルケとタバサは目を見張る、といった表現がぴったりの顔をしているようだ。

「残念だったな、キュルケ」

「ええ、ほんとにね」

笑顔に威圧感はなく、素直な気持ちが溢れていた。いつもこの感

じで居れば、あと数倍の男たちがキュルケの元に押し寄せそうなど可愛い。普段とのギャップでそう見えるのかもしれないが。さて、僕は僕の役割を果たさなくてはならない。

「立会い人として宣言する。この決闘はタバサの勝利だ！」

決闘の幕を引く。これで終わりだ。

キュルケの体の目立った傷を軽く>ヒーリング<で癒し、彼女を連れてタバサの方へと向かう。火傷を負ったタバサは動くのが億劫なのか、その場で杖に寄りかかったまま動かない。

遠慮せずやれと前口上を垂れたのは僕だが、よくぞここまでやったものだ。

懷に手を忍ばせ、以前に買っておいた水の秘薬を二本用意。皮膚が炭化した部分や氷の矢で凍傷になっている部分など、若干ながら治しづらい所をちゃっちゃと元に戻すためだ。

毛筋の一本ほどの傷も残さないほど入念な治療を終わらせると、彼女たちの様子も柔らかくなっていた。貴族として相手に弱みを見せず毅然とした態度を取るのは、政界に入るなり領主として周辺との折衝に望むなりする場合、必要な技能だ。我慢強いというのもあるが、彼女たちは優秀な貴族らしい。

「あなた、何者？」

「そうよ！ 魔法を消しちゃうなんて！」

僕が言うのもなんだけど、タバサも大概で同じ台詞を使う。

「デルフの力だよ。僕は何もしてない」

「おう、嬢ちゃんたち。なかなかのメイジだな」

一年生でトライアングルは数人って話を、あのクドクドと風最強説を語るギトーが言ってた気がする。この二人がまさしくその数人の中の二人のはずだ。

僕は水系統のラインで入学している。

「魔法を消す剣なんて凄いじゃない！ レアものよ！ 鞘も綺麗だし気に入ったわ」

「見る目あるじゃねえか」

相手してもらったデルフは上機嫌だ。六千年も前に作られた癖して、やたら淋しがりだからなあ。無視するとすぐ拗ねるし、なんか現金な性格だ。確かに凄い剣だけどさ。

「違う。あなたはキュルケの前に突然現れた」

そりゃま、>瞬間移動<の名を持つ魔法だから、それに倣って瞬間移動するようアレンジしたもん。実際の虚無が本当にそうなのかは分からない。ルーンも長いようだから、唱える気は無い。

「>フライ<でこうピューツと飛べば数十マイルくらい一瞬だよ？  
タバサ嬢もやってたじゃない」

「…うそ」

「ほんと」

「…うそ」

「ほんと」

無限ループって怖くね？

「それよりさ、彼らが逃げそうな感じだけど？」

杖を森の方角へピツと振りかざし、>ライトくを使って照らしてあげる。月明かりを遮っている部分に居る数人の人影は、慌てたように動きが早くなった。

「止まれっ！」

強く警告しておき、タバサとキュルケを促して一緒にそちらへと向かう。観念したのか、森から出た彼らもまた、こちらへと歩いて来ているようだ。

どうなのかな、実際のところ彼らの計略という線でもいいのだろうか。証拠も無ければ動機も分からず、今の状況の不自然さだけがヴイリエたちを犯人と示唆する要因。他に何か無いものか。

「タバサにも一つ質問しておくよ。舞踏会の日のはあの会場で魔法を使っていないよね？」

「ない」

「唆されたとはいえ、あなたに酷い事を言っただわ、タバサ。でも決闘してみても良く分かった。あなたは表情に出さないだけで、本当はとても感情豊かな子よ。人形なんて言っただめんなさい」

頭を下げて真摯に謝っている。

「いい」

「許してくれるの？　ありがとうっ！　ああ、タバサって可愛いわね。とっても素直だし、もっと表に出せば男は放つとかないのに」「むぎゅ……」

一方のキュルケは一気に態度まで出てしまいうらしい。流石は情熱

が座右の銘なだけある。

しかし、タバサが大きな胸で溺れそうになっている。キュルケの背中をパンパンと叩いてアピール中だ。

「キュルケ、そろそろタバサが遠い処へ旅立ちそうだ」

「あら、ごめんなさい、タバサ」

「ふう……」

お互い蟠りも感じていないようで、穏やかな空気が流れている。拳で分かり合うなんて、随分と熱血思考ですね。

そうこうしていると、ヴィリエたちは目の前まで来ていた。逃げなかったというだけでも、貴族として評価すべきところなのかな。彼らの顔が暗いのは夜のせいだけではないだろう。

「やあ、ミス・ツエルプストー。今回は大変だったようだね」

「そうね、まさかこんな小石に躓くなんて、考えもしなかったわ」

盛大に溜息を吐きながら、キュルケは大きな仕草で肩をいさめて、両手を広げる。そしていつものように尊大な態度で、笑顔を浮かべたまま相手の言葉を待つ。

「正しくその通りだよ。タバサのような家名も持たないメイジに、よもや君が後れを取るなど……」

「あんたのことよ。小石ってのはね」

「くっくっ」

「笑うなよデルフ」

僕がカブセスキーと思われてしまうじゃないか。それに、今の位置で笑うのは死亡フラグを立てる三下の役目だ。僕を巻き込むのは止してくれ。



「後ろの子たち、私の取り巻きの男に横恋慕してるのばかりじゃない。男はね、自分が興味を持っていない女から言い寄られても、ウザったいだけなの。何度その男たちの愚痴を聞いてあげたかしら、あなたたちが原因なのよ？ まったく、少しは感謝してもらいたいものだわ」

空気が死んだ。

キュルケって僕の前で修羅場を作るの好きだよねえ。

「ゲルマニアの女に言われたくないわつ。誰とでも寝るような奴の癖に！」

へえ、ゲルマニアの貴族なのか。凄い長い名前ってことは、結構な地位の貴族のご息女になるっぽいな。確か間に挟む名前って、家系図に入って来た家の名前だったはず。僕もミカド・サクライ・ドラエモンを名乗ろうかな。

「女の嫉妬は見苦しいわね」

「男は？」

「みつともない」

即答でした。流石です、あねさん。

それはさておき、確たる動機はあったようだ。堂々と見物すれば良かったのに、わざわざ不審人物みたいな覗き見るから。あ、でもタバサが「違う」と言えば犯人探しになるのかな。

「さ、あなたはどう落とし前を付けるつもりかしら？ ミスタ・ローヌ」

「な、いや、何故だい？ 何もやましいことなんかした覚えは無い

んだが」

この期に及んで何を言ってるんだか。

「見苦しいとみつともないが同居して、金婚式を挙げた感じだな」  
「意味は分らないが、言ってる事は理解したよ。君は馬鹿にしているわけだ、このヴィリエ・ド・ロレーヌを！ いいだろう、ならば決闘だ！ 嫌とは言うまいね、ミカド・ド・ラエモン！ この薄汚いゲルマニア貴族風情が！」

ちよ、こつちに突つかかって来るのは何故なんだぜ？

「ふふつ、いいわよ、ロレーヌ。あなたがミカドに勝てたなら、今回の事は不問にしてあげる」

「言質は取ったぞ」

「ヴィリエ、その返事は『自分がやりました』と同義だ。この程度の誘導尋問に引っ掛かるようじゃ、王宮の爺どもから死ぬまで扱き使われるな。」

というか、そもそも何故キュルケが許可してる」

酷い馬鹿を見た。そしてキュルケ自重。

その彼と僕の間にはタバサがトコトコ歩いて来て、おもむろに杖を振り上げた。

「立会い人は私。杖を下ろしたら始める」

いえ、結構です。

「メリットが無い。負けても？」

「だあめ。真面目にやってくれなきゃダンスは教えてあげないわよ」

？

「ゲルマニア貴族のなんたるかを、トリステイン貴族に教えてあげなさい」

微笑みながら興味だけの眼差しで見られましても。

しかし、社交ダンスを教えてください。人材は捨て難い。以前に約束した事を再び餌にされるのは納得いかないが、物では無い以上、致し方ないのか。でも、それじゃやる気は出ないよ。

「ダンスの指導だけなのか？」

「あら、私が直々によ？ それとも夜のお勉強の方が好みかしら？」

この赤いのと青いのにとって、ヴィリエたちは瑣末事らしい。タバサも何か期待した眼差しで僕をジッと見ている。こっちみんな。

「逃げるのかね？ ミスタ・ラエモン。やはり水のライン程度では仕方なしか、くっくっ」

決闘で風系統を相手に有利な系統などあるものか。

戦争のような規模の大きい戦闘だと、火系統は風系統よりも大きな戦果を挙げる。しかし小回りの効く魔法は案外少ないから、風のように捉えづらい相手だと苦しい。スクエア同士ともなれば風の偏在くという、自らの分身を出す魔法で一方的な展開もあり得る。正直、水系統など論外だし、土系統も辛い。

「あ、デルフは私が持っていてあげるわ。重いでしょ」

「おう、頑張れよ、ミカド」

重くないです。なに了承してやがりますが、このブルータス駄剣め。

急にかつたるくなってきた。

「もういいや、もうやっちまおう。僕、この決闘が終わったら布団と結婚するんだ……」

「始め」

短く開始宣言するタバサ。

「（デル・ウインデ）」

空気の刃物が襲ってくるも、所詮は>エア・カッター<。身のこなしで避けられるような、小さい刃物なのだ。この手のドットでも出来る魔法はマスト相手に散々訓練した。彼は火のラインだったが、土も風もわりと使える器用なメイジ。才能はあるんだろう。

数度飛ばして来た空気の刃物を避け、ヴィリエの頭上に>コンデション<で水の玉を作っておく。その落下と同時に>シャベリン<で牽制。彼の立ち位置を操作する。

「ふははっ、避けるのは得意なようだが、そんな狙いでは当たらんぞ」

「上から来るぞっ、気を付けろ！」

「は？」

あっち向いてホイをしている訳でもないのに、ヴィリエは上を向いた。作っておいた一メールほどもある水の玉は、自由落下で彼の顔を直撃。素直な男の子は好感度高いですね。

攻撃力はもちろん皆無。しかし、これほど嫌らしい下準備もないだろう。いくら春でも、夜は露が滴るほどの寒さ。水を浴びせられただけなら堪らない。僕なら帰る。

「貴様っ、舐めているのか!？」

「風の系統の男つてのはみな早漏なのか？ 闘いなんてものはね、勝てばいいんだよ」

彼は体中が水に濡れてしまい、吐く息は真っ白。

魔法を使えるからって、自然を舐めすぎだ。

「ほら、走って体を温めろ。凍えてしまうぞ」

「き、貴様っ!」

怒りに任せたヴィリエの魔法を避けながら、僕は只管に逃げの一手を打つ。それはもう、決闘が成立しているのか怪しくなるほどに魔法も使わない彼が僕に追いつく道理は無い。僕って体力の概念すら無いもの。

風の系統魔法には、拘束くという魔法がある。その名の通り対象を縛る魔法であるため、こういった場合に有効な気がしてしまう。しかし、一対一の戦闘の場合、拘束している間に対象から攻撃されるとい、致命的な欠陥を抱えた魔法だ。

僕などは忘れがちになるが、魔法使用中に別の魔法は使えない。

よって、彼は走って僕を追うか、>フライ<で一気に近づく以外に無い。寒さで凍えてしまいかもしれないが、>フライ<ならば追いつく事は可能だろう。

「くっ、卑怯者めっ！ 逃げずに闘え!」

だが、断る。

彼の胸中では、>フライ<を使うか、使うまいかという二律背反がせめぎ合っているはずだ。その、使わない方の理由立てを、嫌がらせや長期的な不利によりミスリードするというのが僕の課題。要は擬似餌で釣りしてるようなもの。

「くつくつ、寒かろう、悔しかろう。」

僕はこのまま逃げ回ってもいいんだが？」

「貴様アアアアッ！！！」

紅潮している顔を大きく歪ませながら、雄たけびを上げたヴィリエ。今この瞬間だけは寒さよりも怒りが勝っているようだ。

彼は>フライ<のルーンを唱え、ニメートル弱の高さに浮上。風のラインに相応しい速度で僕の方へと向かって来た。

「（ラグーズ・ウォータル・イス・イーサ・ハガラス）」

僕は初めてともにルーンを唱え、出来上がった横長で平べったい>シャベリン<を、>フライ<で接近中のヴィリエに向かって飛ばす。

最速で真っ直ぐ向かって来ていた彼は減速することもしないうちに若干横向きに姿勢を崩して>シャベリン<へと激突。その衝撃によって氷が割れ、彼は魔法が途切れたにも関わらず、残った勢いだけで僕の前まで転がって来た。

横たわったまま動かない彼の体に、僕は容赦なく足を乗せて宣言する。

「ういなー」

杖を高々と掲げた。

「酷いわね」

「そっちの坊主がかわいそうになってきたぜ」

「勝ち」

タバサは僕の右手を持って掲げてくれた。  
勝者には祝福を。真面目な良い子ですね。

「本当につまらない男ね。遊ばれて寝ただけじゃない」

夢の国へ旅立ってまでキュルケの言葉責めに遭うとは、南無南無。  
タバサは足でこっそりヴィリエを小突いていた。完全に同類ですよね、この二人。

「タバサ、キュルケ、もう帰って寝よう」  
「そうね」

タバサは軽く頷く。

「あ、君たちもヴィリエを起こすなり連れて帰るなりして、さつさと寮に戻りなよ。それから次は、僕もフェミニストで居られないから、そのつもりでね」

白い歯を輝かせながらニコツと笑ってやったのに、彼女たちはポツとならない。何故だ。規則は守ったはずだぞ。ガッツが足りないのかな。

決闘騒ぎは幕を閉じた。

その後のソーンのクラスは以前と変わらず。タバサとキュルケはトライアングルのメイジとして勇名を馳せたが、女の子たちからは敬遠され気味。男からは尊敬と熱の籠った眼差しを受けているようだ。

唯一、変わったと言えば、僕がゲルマニアの成り上がり貴族ということで有名になり、評判を落として男の友人が出来なくなったこ

とか。

キュルケとタバサには責任を取ってもらい、友人として輪に入れて貰った。理不尽だ。



## じゅうち

魔法学院に通う生徒たちの大半は、比較的地位の高い貴族の子供だ。門戸は広く、入学金と学費を支払う能力があるのなら下級貴族の子供でも入学可能。しかし、現実問題としてそこその収入源を持った貴族でなければ、支払う学費に困る。

下級貴族と称したが、実際にはそのような地位は公に存在しない。単に王宮の文官をしているような大貴族や古くからある広い領地を持った貴族たちからすると、下働きをする兵士諸君や代表的な貴族に扱き使われる立場の低収入貴族は下々の者らしい。

ド・ラエモン領を保有する僕とは言えば、下級か中級といったところ。

領地の財政赤字はやっと黒字になったばかりで、領主である僕の懐に入るお金はともすればキュルケのおこづかい並み。学院への支払いも領地の収入ではなく、博打の儲けで済ませている。

例えていながらんだけど、キュルケの経済状況をそれほど詳しく知っているわけではない。ちょこちょこ散財する場面を見るに、月五百エキューから千エキューというところかと予想している。

学院に入学生徒の中で爵位を持つ者は珍しく、地位という観点で見れば僕は最高位に属する人間。もちろん、実際にはキュルケやラ・ヴァリエール嬢の実家の地位を鑑みて、僕の方が格下と見られる。

「世の中の不条理を感じる」

「なに、急にどうしたの？ ミカド」

虚無の曜日はみんなの休日。その日、学院を飛び出て向かった先は王都トリスタニア。馬で二時間ほど走れば到着する、魔法学院が

らは最寄の遊べる都市。

事の始まりはキュルケが暇を持て余して「町に行きたい」と言い始めたところから。

いつものように図書館で本を読んでいた僕は、あっさりと拉致された。それからタバサの自室へ向かい、施錠された扉を>アンロックくという寮内では禁止されている魔法で決じ開け、>サイレントくを使ってまで静かに本を読むタバサの脇に立って、大きな仕草で猛アピール。断るかと思いきや、呆気なく首を縦に振ったタバサも連れ、三人で馬を借りて町まで来たというわけだ。

## 第十一話

### 午後の紅茶

貴族専用のカフェテラスで優雅にお茶を満喫しながら、街行く人々をウォッチングして楽しんだり、美味しいパイを摘んだり、他愛も無い世間話に花を咲かせると、貴族という立場を実感する。学院内でもそれなりに感じてはいるものの、既に慣れている。

それにしても、タバサはこんな場所に來てまで本を読み耽っている。でも、付き合いの悪い子じゃないんだよね。不思議。

「僕ってこれでも伯爵なんだよね。ある意味で辺境伯という名に相応しい領地を持つ伯爵だけだよ」

「まだ二十歳にもなっていないのに、領地を持つって珍しいわよ？」

それはそうかもね。元は財政赤字を抱えた領地だったけど。しか

も二つの国と国境が近いという、商業的に見れば旨味の有りそうな土地柄の癖して、直接の行き来が可能な街道や航路が無いという駄目っぷり。軍事的なデメリットしか無いとか、それどんな苛めですか。

「ま、それは置いといて、働いてるのにキュルケの小遣い程度しか収入が無いなんてねえ」

「あら、大変なのね。でも売っている領地ってそんなものよ？ 採算の合わない地域を領から切り離して、別の領として売るっていうのはよく聞くわね」

詐欺もいいとこだな。領民は捨てられた上に、買った人物から重税を課せられて、それでも駄目ならまた売りに出るか。買った当初の領民が腐った肉を食ったのも、そこらへんだよねえ。僕にとっては都合の良いシステムだったから利用したけど。

「正しく、その領地を買ったのが僕だよ。二年前は領内も荒れてたからね」

内陸地域で農地がそれなりにあっただけまだ良い方が。もっともあれより悪い領地だと買い手が付かないから、苦肉の策で付けたのだろう。ラステン侯爵め。

「ミカド、税を上げたの？ あまり賛成できないわよ、それ。

確かに私は多額のお小遣いを貰ってるけど、これは見栄よ。上級貴族の子供が集まる学院で、自分の家が裕福だと知らしめる事が出来るのだから、ここは見栄の張り時。私の貰っている仕送りの額は、赤字だった領の税収なんかより多くて当然なの」

意外に冷静で頭も良い子だね、キュルケは。情に厚い部分もあ

るし、良い男が見つければいいんだけど。でも風評を全く気にしないから、貴族としては奔放すぎるのか。

「領民を心配してくれてありがとう。けど、安心していいよ。僕がラエモン領を購入してから減税をしてね、今では周囲の領より少し低い程度の税で維持してるよ。黒字になったのは新しく産業を発達させたからさ。」

ラエモン領はトリステインとアルビオンとの国境に近い領地だけど、海ばかりで戦略的な価値はほぼ無いからね。軍備を最低限にして、軍役はお金でパスするつもり。維持費が少ないから税收が減っても平気なんだよ」

「あら、ド・ラエモンってラステン侯爵のそこから分領されたの？」  
「そうだよ」

代々貴族の家系なら、税を上げるイコール収入を上げるって発想がまかりとおるかも。僕のように領地を買って成り上がったなら、その領地を復興させなければ重税を課しても無駄。領民が逃げるか死ぬかして減るだけの悪手にしかない。

「キユルケも内政を考えたりするの？」

「領地を持つ貴族なら誰しも通る道よ。でも、確かに私の家を持つ領地は考えなくても儲かるわね。政治に関わるような貴族って大半がそうじゃないかしら。フォン・ツェルプストーの場合は戦で功を成し、その褒賞として下賜された領地が元になってるの。」

あなたの領を売ったラステン侯爵も軍門の家系で、以前はフォン・ツェルプストーと肩を並べて戦っていたらしいわよ。今は仲が悪いけどね」

近代史か何かで見たな。都市国家だったゲルマニアは版図を広げるため東征を続け、今ではトリステインの十倍もの領土を保有する

国。利害関係で集まった貴族が中心だから、皇帝の求心力は王族に遠く及ばず、国内でも勢力争いが激しいとか。

僕の領地を欲しがる貴族は居ないから、全く関係の無い話だ。

「流石はフォン・ツエルプストーといったところだねい。僕もキュルケの小遣いよりは多く稼げるよう努力するでしょう」

「男ならもっと大望を持つべきよ。フォン・ツエルプストーを超えろと言いなさい」

「無理」

日差しを傘で遮っただけのテラスには、僕ら以外にも沢山の若い貴族がたむろしている。明るい色合いの華やかなテーブルクロスと特徴的な曲線を描く美しい椅子。店内の装飾も高貴な印象を持たせる工夫が凝らされていて、それが他の店よりも男女の組み合わせを多くする理由だろう。

「ところでタバサ、今は何を読んでる？」

積極的に会話をしない青髪の少女へ、なんとなく話を振ってみる。よほどのくだらない質問でもなければ、彼女に無視されるようなこととはない。

タバサはその本の表紙が僕に見えるよう、少し立てて持つ。

「魔法関連の本じゃないなんて、珍しいわね」

「『イーヴァルディの勇者』って物語かな。面白い？」

彼女は頷いて再び本を元に戻し、読書を始めた。

魔法の本は授業中に散々読んでいるはずだから、虚無の曜日は勉強以外の本を読むのかな。

「デルフはイーヴアルディの勇者って知ってる？」

「さあな。剣は本なんか読めねーぜ」

手が無いものな。眼が無くとも見えるのはどういう原理なのか、詳しい説明を求めたいところだ。聞いても無駄なのは分かっているから聞かないが。

あ、領の仕事を貯めてたの忘れてた。どうするかな、かつたるいな。今のポカポカ陽気じゃやる気も出ないから、夜になったら本気出す。

「あ、そうだ。うちの領に興味があったら来てみる？ 海岸沿いの一帯はほぼ独占してるから、新鮮な海産物を食べられるぞ。僕がきつちり捌き方から調理法まで伝授した料理とかあるし、刺身も食べる。他じゃ味わえないよー」

「行く」

タバサが食いついた。何が彼女の琴線に触れたのかサッパリ分からなかったが、こつちとしては釣る気の無かった大物を釣った気分。愛い奴め。

「サシミって聞かない料理ね。どういうものなの？」

「特定の部位に切り分けた、一口大の魚の肉だよ。それを生で食べられる。一応、忠告はしておくけど、普通の魚は無理だぞ？ ちゃんと寄生虫の居ない種類の魚じゃないと、お腹を壊す可能性がある。特に川や湖で獲れた魚はやめた方がいい」

醤油の材料は揃っていても、作るのが難しいから自作と称して自分だけ使っている。皆はこちらにもある調味料で食べたりするようだ。

「生で食べるのはちょっと抵抗があるけど、面白そうね。夏休みにもお邪魔するわ。タバサもそれでいいわよね？」

「いい」

噂では東方に色々和日本独特の物が点在していると聞く。もちろんそれを日本独特と断定できるのは、この僕を置いて他にいない。

最初に出会ったのは緑茶で、領と取引のある商人に珍しい物を求めたら、渋みのあるお茶という事で出てきた。ハルケギニアでお茶と言えば紅茶だから、緑茶を淹れる際も同じ淹れ方をしてしまうのだ。それでは緑茶の旨味や香りを引き出す事が出来ないため、在庫として残っていたから全部買い取った。他にも茶碗などがあり、この分だと醤油と味噌くらいはどこかにありそうだ。

「くつくつ、よかろう。度肝を抜いてやる。覚悟しておくといい」

「あなたが自信満々にしてるのなら期待できそうね」

「無論だ」

僕の趣味は食べる事と、創作活動と、ダラける事なのだから。そこに一切の妥協は無い。

流石に調味料や特殊な食材については僕限定の話であって、領民の調味料まで全てどうにかするのは無理。作るのも難しいからね、発酵食品ってのはさ。

ナットー菌とか麹菌とかややこしくていけねえや。大雑把な欧米人には向かねえ。

唐突に思い立って勢いだけで約束したけど、なかなか楽しい夏休みを過せそうな気がする。学院の休みはかなり長いし、その間も交流を深められるなら嬉しいね。

友人の招待が決まって後日。僕は執政室で館の使用人の構成を考えていた。

特に心配だったのが、たった一人で毎食十人以上の料理を作っている女将さん気質のおばあちゃん。体力的にもこれ以上の負担は掛けられないから、いつそ以前のデルフが提案した料理人の増員と、ついでと言ってはなんだが他の部署も人を雇おうと考えている。

とはいえ、僕も現状をしっかりと把握しておらず、秘書兼内政官としてその辺りも管理しているのであろうエルサに話を聞く。

「エルサ、今度さ、友人が来るんだよね。それも、結構なお偉いさんの娘が。」

この際だから使用人を増やそうと思ってるんだけど、今の使用人の状況って分かるかな？」

「はい？　んー、掃除婦のみなさんは不満も無いみたいですよ。今は守衛さんも軍と兼任してます。そっちも大丈夫みたいですね。あ、でも料理を作ってるおばあちゃんは、村でゆっくり孫の世話をしたいてばやいてました。息子夫婦もおばあちゃんくらい養えるから、帰ってくるよう言われてるらしくって」

件の料理人はラステン侯爵が雇って置いていった領民のおばあちゃん。僕もなにか懐かしい味が好きだったから、そのまま使用人の食事なども任せっきりだった。孫の件は初耳。

「よつし、料理人を雇うぞ。仕事を終わらせたら、ウィンドボナへ直行だ。お菓子も作れるような、バラエティーに富む料理人を探す」

ぽかーんと口を開け、クリクリの碧眼を見開いたエルサが、突如



として羽ペンに集中し始め、さっきの倍ほどは早い速度で書類に何か書いている。おい、ちゃんと読んでからサインしてるのか。

「あ、私は乗馬って出来ませんよ？ 馬車も無いですから、借りるしかありませんが……」

徐々に勢いを失っていく彼女の言葉に、憐憫と哀愁を感じる。今時、僕の領内で乗馬が出来ないって。農民でも馬や牛を動力として利用してるのに、ってあつ、僕の館に馬が数頭しか居ないからか。使用許可を求められた事も無い気がする。

それはともかく、貴族の嗜みとして最低限の馬車は用意した方がいいかもしれない。

なにせキュルケに嫌な予感がする。上級貴族の見栄の張り方は異常だ。

「僕がエスコートするよ、今回は人材探しがメインだから。雇った料理人の準備が出来たら、買う予定の馬と馬車で連れてきて欲しい。それでいいかな？」

「はいっ！ 馬十頭と馬車三両くらいなら財政に影響はないですねー。利益はもつと大きいのですが、軍の装備が借入金だったので、返済に回すと余裕はそこまで。後は冬の色々に少し余裕があるくらいです」

確かに余剰金をプールしろとは命令してるけども、真面目にやってたんだね。エルサもかなり出来る経理担当になったもんだ。

「どうせ軍用馬も考えなきゃいけないから、馬の管理人なんかも雇うさ。厩舎は僕が造る。今回は急だけど必要経費と割り切ってくれ。なにせ名門フォン・ツェルプストーのご息女ともう一人のご令嬢が来るからさ、それなりのもてなしも考えなきゃ」

う、急性かつたるいが発病しそう。  
逃げちゃ駄目だ。

「そ、そんなに偉い人なんですか？ ラステン侯爵よりも？」  
「さあ？ ラステン侯爵がどの程度の地位か知らないから、なんとも。でも、ゲルマニア軍じゃ有名なしいよ。ああ、マスト隊がマルケス隊の誰かが知ってるかもしれないな。後で聞いとけばいい」  
「うう、怖いです……」

引き気味の台詞を吐く癖に、手は止まってない。余裕だな。  
僕の方の書類も片付けてしまつて、さっさと行つてしまおう。

仕事を終わらせた僕たちはすぐに支度を整えてウィンドボナへ、文字通り飛んで行つた。最初に向かつたのはお世話になつたマスターの酒場。もちろん、情報通の彼の事だ、なにかしら得になる話があれば聞かせてくれる。

「料理人ねえ、丁度いいのが居る。しかし、これはこっちから頼まなきゃならんな」

そこそこ期待しながら彼に話をする、そんな言葉が返ってきた。別にきな臭い話でもなかつたに、真剣な表情でこっちを見ている。

「と言うと？」

「実はな、息子が料理人になりたがつてゐるんだ。うちの料理場じゃ

それなりの腕にやなってるし、客に出す料理の大半は作れる。しかしあいつがなりたがってる料理人ってのは、貴族の豪勢な料理を作ってるようなのらしい。

ま、酒場の料理なんてのは大味で、塩の加減さえ間違わなきゃ誰が作っても同じだからな」

なるほど、僕の話は渡りに船だったということか。ならば話は早い。

「厨房をいきなり任せる訳にはいかないが、きちんと勉強する意思があるなら雇うよ。これからベテランの料理人も雇うから、教える人材も欲しいけどね」

「すまん。料理人の方は俺が当たつとくから、何人欲しいのかだけ教えてくれ」

いい親父さんしてるなあ。

「人に教えるほどの人は二人も要らない。料理人ってのは頑固なものだから、喧嘩しても困るんだ。代わりに料理補助の出来る人間が十人ほど。多少前後してもいいから、ベテランの料理人に聞いてみてくれ。うちの館だと作る料理の量が、使用人に二十五人から三十人分、貴族の食事は二人分くらい。そう伝えれば適度な人数にしてくれるだろう」

今は使用人だけで十人だし僕は学院生活。今回の増員は目標が二十人、つまり使用人だけで三十人を目指している。そのうち十人が領内の人間ではないが、料理人ばかりは難しい。志す人間が領内に居るかも怪しいのだ。

「分かった。来週までに良い料理人を見つけとくぜ。息子のこと、

感謝するよ」

「こつちこそ助かる。それじゃ、また来るよ」

約束は取り付けたから、早々に切り上げて馬と馬車を探す。こちらには売っている場所が限られているから、探すというほどの物でもない。

「良かったですね、すぐに決まって。どうやって探すか心配だったんですよ」

「僕も。酒場のマスターが駄目だと、後は料理店で手当たり次第だったからね」

それでも金を握らせて紹介させれば、数人の候補は出ると踏んでいた。たまには貴族らしい手段を使ってもいいと、僕は思うのですよ。成金貴族なのは事実だしさー。

「おーおーっ。凄いです、何ですかあれ？ あんなケーキは見た事がないです」

「なんだ？ 買ってみるか？」

言った途端に店の扉を開くエルサ。見境が無くなるほど甘党だね。

店内に入ると甘い空気と小麦を焼いた香りが交わって、とても脳を刺激される。ケーキの専門店ではなく、パン屋と兼任している。見た感じでチーズケーキやシフォンっぽいパンともケーキとも言えないものもある。少し甘いものが欲しい、三時のオヤツってやつかもしれない。

「どれにしますー？ おーおーっ、私はこれとこれとこれがいいですーっ」

白い粉の掛かった円形のパンっぽい何かと、シフォンっぽい何かと、果物が乗ったクリーム付きの何かを選ぶエルサ。全部ケーキだろうけど、判別つかないから僕も同じのを頼んだ。

ストレートの紅茶と各種ケーキが運ばれてくると、エルサのテンションはうなぎのぼりに上昇。

「わっ、これ凄いですー。中にピーナッツバター。こっちは生クリーム」

「ほほー。見事なもんだ。パン職人も一人必要かもしれないな。ケーキはパン職人の領分だろうし」

後でマスターに話しておこう。

しかし、流石に三つも頼むのは無謀だった。

馬と馬車は問題なく手に入れる算段が付いたから、料理人を乗せて館へ連れてくる予定だ。パン職人については料理補助の一人が専門らしく、菓子作りも出来る料理人団の完成。他の使用人についてはフラーマの方に任せ、領民から雇い入れる事になっている。

今まで頑張ってもらった料理人のおばあちゃんにも、あと少しだけ付き合ってもらい、今度来る料理人に郷土料理をご教授願う予定だ。本人も快く引き受けてくれ、最後の大事な仕事だと張り切っていた。貢献度の高い人物で孫も居るから、特別報労金を送る予定になっている。

「おふくろの味とか故郷の味ってさ、凄く大事なものなんだよね。」

本人たちは全く意識してないけど」

「そうですねー。思えばミカド様って貴族の豪勢な食事は作らせてないですねー」

僕は元が高貴なもんじゃないから。必要に駆られて料理人を雇ったけど、あの郷土料理は好きだ。もちろん女将さん気質のおばあちゃんも。

「学院で食べてるよ。朝からあんなの食べるとキツイけどね。中年貴族が太るわけだ」

「それはそれで嫌ですよねえ」

君は甘い物を控えないと、太るよ？

「彼らを連れてくる日はエルサも同行するようにね。馬車の護衛で軍の衛兵も数人出すから、御者は誰か馬の扱いに慣れてる人に任せればいい」

チラッとエルサを見たら、酷く嫌そうな顔をしていた。  
何かあったかな？

「空を飛ぶのはもう嫌です……」

「でも帰りだけで数日は掛かるから、仕事が滞るでしょ？ 処理できるといいけどさ」

「うう、もうやあ……」

本気で嫌がついているらしい。今度は重力と空気抵抗を無効化して、楽に連れて行ってやるかな。あんなに気持ちいいのに、飛ぶのが嫌いなんで勿体無いねえ。

「次は優しく運ぶつてば。あ、そうそう、馬車つてお尻が痛くなるからさ、座布団を作つてやるよ」

「ザブトン？　なんですか、その奇妙な名前は」

「そんな変かな？　ま、いいや。布団と同じ材質を使つて作る、お尻に敷く専用の布団だよ。これなら馬車に乗つても少しは楽でしょ」

「はあ、馬車なんて乗つたことはありませんけど、ありがたく頂戴します」

うちの領民つて……。この子は領内でもトップクラスの所得なのに……。

その日は心の汗を流して、数十枚の座布団を作った。かーさんがーよなべーをしてー！。

## じゅうにわ

キュルケとタバサの来訪に備えた使用人の増員は、料理人が九人、馬の管理人が一人、他十人の一般的な使用人となった。彼らに必要な部屋などは予め集合住宅という形で作っておいたから、すぐに館での生活を始めている。

領地の仕事という理由で休学を許可されていた僕は、ちよくちよく休みを取って、新しい調味料の使い方やそれを使ったレシピを料理長に教え込んだ。当初は嫌な顔をされていたものの、料理に関することだからと話を聞いてくれる。

新しい調味料とは「さ・し・す・せ・そ」の酢、醤油、味噌のことや、その他の香辛料。

「この順番で入れるのも理由がある。砂糖は一番味が染み難く、塩の後に入れると同じ場所に入るから効果が薄くなるそうだ。塩が二番目なのは味の基本だから。早くもなく遅くもなく、適時。酢は早すぎると酸味が飛ぶ。醤油と味噌は風味を楽しむものだから、煮物などの例外はあるけど遅くかな。」

うちの領は新鮮な海産物がメインだから、煮物も重要。郷土料理については前任のおばちゃんに習ってくれ」

僕は料理なんて知りませんけどね。検索すればいいですよ。

「む、確かに言われてみれば、塩より砂糖を先に入れた方がいい味になると、他の料理人からも聞いたな。」

しかし、貴族の坊ちゃんから料理を教わるとは、人生わからんもんだよ」



料理長は四十代で太めのオヤジ。料理人は大体この年齢だと太ってるね。職業病の一種だろうから仕方がないけど、気を付けて欲しいもんだ。

「レシピの方は料理人が作った代表的なものばかりだから、最初は賄いでも練習してくれ、調味料の味とか癖、使い方も分かるから。貴族用の食事は必ず毎回一食は作って、きっちり勉強させるように夏にはかなり偉いとこの娘が来るから、腕の見せ所だぞ、トムズ」  
「へっ、どこの貴族が知らねーが、俺っちの料理で泡噴かせてやるぜ」

「その意気だ」

頼もしい返事で安心した。本当に泡を噴かせたら困るけど。

貴族に出すのを怖がるような料理長だったら、明日にでも馬車で送り返したところだ。

「あ、デルフデルフ」

「あ？」

ガラわるっ、不良ですか。

「六千年前も魔法はあったんだろう？ デルフを作るほどの魔法技術も。なのに全く文化が向上してないからさ、デルフなら理由が分かるかなと」

「いやー、変わってんじゃねえか？ 昔はもっと人が少なかったぜ」  
「まぢで」

魔法は科学的アプローチを阻害している分だけ、インフラに貢献してるのかな。

「ミカド、おまえさん虚無の魔法を使っただろ……どうやった？」  
「調べたよ」

急に何を言うかと思っただけ、今更なにを。

「知ってりゃ使えるってもんじゃないぜ」  
「使えるんだよ」

僕の魔法は「魔法を自由に創れる道具」と「嘘が本当になる道具」の効果による副産物。

具体的には存在すると認識した能力が自動登録され、それを特定の言葉「キーワード」と想像「イメージ」によって発動するよう制限している。他にもあるが、系統魔法で流用しているのは主にこの部分。

そういえば、虚無も似たような話があったな。全ての理を制御できるとか何とか。

「……おでれーた」

## 第十二話

### リンクする世界の影

領地の仕事がひと段落してから学院へ戻ると、使い魔たちの品評会が開催され、既に終わっていた。春の使い魔召喚の儀式で召喚される多種多様な使い魔に芸を仕込み、それを評価してもらうという

行事だ。

久しぶりの講義は大した変化も無く、いつものように適当な本を読んでいると終わっていた。

午後のお茶会に集まったメンバーは例の二人と僕の三人。

日差しを避けるように、屋根付きの場所でのんびりとお茶をする。会話もするけれど、普段はキュルケが男に誘われて何処かへ行くし、タバサは本を読んでいるから、僕も自然と本を読むようになっていた。今日はキュルケの周りも落ち着いているようで、彼女もゆったりとしている。

「やたら小動物が庭に出てるけどさ、やっぱこの不思議生物たちも使い魔？」

「たぶんね。どこかにルーンがあるわよ」

今や中庭は使い魔の巣窟。

あの品評会とやらが終わると、飼い主たちは途端に放任主義へと変わった。以前は庭に居たとしても主人と一緒に、静かに座っているようなのばかりだったのに。

「使い魔って放し飼いが主流なわけ？」

「食事の世話は使用人たちがやってくれるわよ。中にはそこから獲って来る使い魔も居るかしら」

「ったく、排泄物の掃除も金が掛かるっていうのに」

うちの領では随分と人件費が掛かっている。将来的にペイ出来る計算だけだ。

もしかやトリスタニアの裏通りが臭うのも、これを平民が片付けるまで放置するからか。

「え、なんで？ 使用人が片付けるでしょ？」

「キユルケ、君んちは人が出す排泄物をどう処理してんの？」

「消臭の秘薬を流してるわね。後はどうしてるのかしら？」

確かに香水を作つてるとそういう秘薬もあつたけれども、僕の領じゃ値段が現実的でない。この分じゃ大きい方は>錬金くでもしてるっぽいな。土のメイジの二、三人は常備してそうだ。金持つとるなあ。

「町は？」

「さあ？ 川に捨てたり、土に埋めたりしてるんじゃないかしら」

ぎゃあーす。

「絶対に病気が発生するぞ。それにくさいだろう？」

「うーん、大通りはたまに馬の糞が落ちてるから、少しね。路地裏なんて何処も汚くて、入る気も起こらないわ」

一度痛い目に遭わないと理解できないのかな。

衛生管理に金と人員を費やしているのは僕の領だけかもしれない。

「ま、いつか。それよりも、召喚する使い魔って気にならない？」

この本に色々と使い魔の種類とか、ルーンの種類が載ってるんだよね」

「気が早いわねえ」

などと言いながらも、本を見ている。いつのまにかタバサの視線もその本へと向けられていた。学院の敷地内で様々な使い魔を見る機会があるから、一年生にとって関心のある話題なのは間違いない。そこはちよつと他人と違う感性を持つ彼女らも変わらないようだ。

「これ」

タバサが指差したのは風竜。最も空を速く飛ぶ種類の竜だ。

「今の学院で竜って居ないな。餌代が高そう」

「ミカドって所帯じみてるわよね。貴族は見栄を意識しなきゃ駄目よ？ 凄く滑稽に見えるから」

「いいんだよ。僕は見栄を張るため貴族になったわけじゃないから」  
「くつくつ、こいつにゃ言っても無駄だぜ」

だまらっしやい。

「残念ね。もう少しちゃんと貴族してれば、それなりに人気も出るのに」

「それはそれで後始末が面倒だろう？ ギーシュ・ド・グラモンやキュルケを見たら分かる」

そう、あのフリフリのシャツを着て、薔薇の杖を持った気障な男も、女性に声を掛けては遠乗りに出たりしている。彼を見ていると、いつ懇意にしている女性たちがニアミスするのかドキドキだ。

「あんなのと一緒にしないでちょうだい。確かに良い男だけど、ギーシュは頭が足りてないわ。いつも同じ口説き文句で迫ってくるんだもの、あれで惹かれる女も女よ」

たった数ヶ月で何をやらかしたんですかね、ギーシュ君。酷い評価を受けていますよ。

視線をその目立つ男に向けると、茶色いマントに身を包んだ女性とお茶をしている。その手にはいつものように薔薇が添えられ、胸

元は開けっぴろげ。

「お茶のおかわりはいかがですか？」

「お願いするわ。あとケーキも一つ。タバサは？」

タバサは首を横に振って、本に視線を戻した。

「僕も紅茶とケーキを頼むよ」

「畏まりました。少々お待ち下さい」

黒髪で黒い瞳の女の子は、すぐに厨房の方へと歩いて行く。彼女の名前はシエスタ。お互いに珍しい色素を持っていたから、少しだけ話をしたことがある。出身地はタルブという名の村で、特産品はタルブワイン。葡萄畑が広がっている田舎なのだろう。

「あの子も黒いわよね。学院じゃあなたとあの子くらいよ？」

ブラックストマツクみたいに言わないでよねっ。

でも確かに黒の色素は珍しく、金ブロンドに碧眼や茶系なんかが多い。タバサのような青く映える髪やキュルケのように炎っぽい赤もそれなりに珍しいけども。それに、アジア系の顔立ち自体が珍しい。

「ハルケギニアでは元から黒が存在しなかったんだろうね。あの子の家系に異邦人が居るのは間違いない。黒は優勢因子だから元からあるなら、かなりの数の黒髪が居たはずだ」

この大陸って東の方は砂漠だし、そこに住むエルフのお陰で東方「ロバ・アル・カリイエ」とは国交が断絶。物流も貧弱で、物好きな商人が色々珍しい物を持ってくる程度だ。

やはり、どの観点から見ても人の流入は起きていない。

「ユーセイインシ？ 聞かない言葉ね。ミカドってたまに意味の分からない言葉を使ってるわよ？」

うえ、その場で言っただけだよ。

「ああ、簡単に言えば優先的に出る色の順番が決まってるんだよ。流石に全部は知らないけど、金髪碧眼に対して黒は強いから、黒髪が生まれ易い。青、赤、桃なんかのブロンドはどうだか知らない」

ここまで特徴的な色が遺伝し続けるなら、一族の証として認められそうだけでも。

キュルケはそんな事を言ってたかな。

「聞いたことないわね。本に載ってたの？」

「私も無い」

「いやいや、黒髪が居ないんだから検証のしようがない。ハルケギニアの人は知らないんじゃないかな。僕は前に居た国で勉強したのさ」

タバサも興味あるのか。妙な事を知りたがるもんだ。

「紅茶のおかわりとケーキをお持ちしました」

「ありがと」

「私も」

今になって欲しくなったらしい。愛い奴め。

シエスタはタバサの紅茶も注いでいる。ケーキの方は僕のをあげて、もう一つ頼むことにしよう。

「それで？ この給仕の家系に異邦人が居るのよね？ ほんとかしら？」

ねえ、あなたの親族にハルケギニア以外の所から来た人って居る？」

一瞬キョトンとした表情を見せたシエスタは、再び笑顔に戻る。

「あ、はい。どうしてそれを？」

「ミカドが絶対にそうだって言うから」

全員の視線を浴びた。

変な趣味に目覚めそうです。

「本当だったのね……どんな人なの？」

「私と同じ黒髪と黒い瞳で、変わった響きの名前のひいおじいちゃんです。東の方から『竜の羽衣』に乗って来たって聞いています。皆からはインチキ扱いだったらしいですけどね」

「その人の名前は？」

「タケオと言います……どうかなさいました？」

紅茶のカップに口を付ける直前でそれを止め、シエスタの方を凝視したら若干ながら引かれた。懐かしい響きの名前だったからつい。

「苗字があるんじゃないの？」

「は、はい。ササキタケオと本人は言っていたみたいです」

日本人。ていうか、国交断絶してる中世ファンタジーに日本人？  
今はまだ情報に乏しいから、考察しても答えは出ないかな。



「ササキタケオさんの持ち物とか残ってる？ 凄く重要な事だから、教えて欲しい」

「は、え、はい。大切にしていた持ち物と、その『竜の羽衣』って言われている大きな物が……」

不思議な名前をつけたもんだ。

しかも東方から飛んで来たって、本物の竜みたいじゃないか。

「見せて貰っていいかな？ 夏休み中は使用人も長期休暇があるだろう？ その時にでも」

「はい、構いませんよ。……あ、すみません、他の貴族様に頼まれたキーキを運ばないと」

「いいよ、引き止めて済まなかった。その事はまた後で話そう」

「はい、失礼します」

何かニヤニヤとしたキュルケの湿っぽい視線と、いかにも物欲しそうなたバサの視線が、視界の端に映ってしまった。嫌な予感しかしません。

「面白そうな話ね。私も一緒に行くわよ！」

「私も」

「暇なのか、暇なんですネ」

妙な所にはかり食い付きの良い娘たちだこと。

お茶の時間も終わり、お風呂と夕食を済ませれば後は寝るだけと

なった。個人的にシエスタと話があつたから、お風呂の方は魔法で体を清めて済ませ、厨房の方へと向かう。

「すまないが、シエスタを呼んでくれないか？」

適当に歩いている使用人を選んで頼むと、彼は大きな声で彼女を呼びつけた。すると他の使用人からも僕に対する妙な視線が集まる。貴族がシエスタを呼び出して、一体何をするつもりなのかと、好奇というよりもむしろ嫌悪に近い感情が垣間見えた。

「お待たせしましたっ」

「仕事中にすまない、忙しいなら後でも構わないけど？」

「い、いえ、大丈夫……」

シエスタが僕の後ろに居る使用人へと視線を飛ばす。

「平気です」

「そうか、なら少し彼女を借りていくよ」

宣言してすぐに厨房を出た。建物の裏手の方にまわって、薪が山積みになった場所まで移動。

厨房の人間は貴族を毛嫌いしているようだから、やりにくくて仕方がない。気持ちには分かるけれども、貴族の子息たちに八つ当たりしたところで、後から痛い目を見る平民が増えるだけだ。

「お茶してる時の話だけだね、都合の良い時期なんかを聞いておこうと思って」

「ああ、そうでしたか。えっと、私が村に帰省するのは、夏休みに入ってから一ヶ月後くらいの予定です。変更になる可能性もありますけど、その辺りから一ヶ月ほどの休暇ですね」

それなりに余裕はありそうだ。  
あの二人も一緒、特にキュルケの方が気になるけど、問題ないかな。

「なるほど、訪ねても平気なのかな？ そのタルブ村とか、シエスタの方は」

「はいっ。でも、本当に何も無い村ですから、家もあまり綺麗とは……」

貴族って面倒だ。

領内でも僕が行けばそれなりの対応はしてくるけど、それは貢献してきたって前提があつてこそ。他の領地の平民に対して、貴族風を吹かそうなんて考えは持っていない。

もともと、僕が特殊なのは重々承知している。貴族にも平民にも理解はされないだろう。

「そこまで構う必要はないよ。僕の事情でお願いしてるんだからさ。それじゃ、シエスタが帰省する時期に立ち寄る。その時はひいおじいさんの持ち物の件を頼む」

「はい、分かりました」

彼女は仕事を途中で放り出したらしく、話が終わると急いで厨房へ戻って行った。

用事が済んで寮へ帰っていると、途中で小さな振動と共にドンッ

という爆発音が聞こえてくる。かなり大きな音だ。断続的に数回ほど聞こえたその発信源は、どうやら塀の向こう側にある平原。

学院の塀は>固定化<の魔法が掛かっていて、ちょっとやそつとじゃ壊せない。何かの襲撃だったとしても、飛ぶか正面の門から入る方が建設的だ。

「続くね……デルフ、何これ？」

「さあな」

考えている間にも、その音は回数を重ねてゆく。

興味の湧いた僕は>フライ<で上空から様子をうかがってみた。すると、そこに見えたのは桃色に映える長い髪の子。ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールだ。

彼女の後ろに降り立ち、少し話を聞いてみる事に。

「なにを」

ドンツと再び爆発が起こる。

「……なにを、しているのかな？ ミス」

過剰に驚いた様子の彼女はゆっくりと僕の方を振り返る。かなり力んでいるのか、その体はプルプルと 生まれたての小鹿のように 震えていた。

「なあ」

「み、み、見たのね！？」

言葉が被る。

天然で相性が悪いのかな。

「見ましたとも。何か不都合でも？」

「い、いえ、そんなことはなくてよ。ほほほっ」

口に手の甲を当て、見本の様なお嬢笑いをする彼女は、とても白々しい。

少しジト目で見つめながら間を置くと、モジモジとしながら居づらそうにしている。

「あの爆発は」

「な、な、なんのことかしら？ 私、身に覚えがありませんわ」

「ああ、ミス・ヴァリエールがやったのか」

「ぐふっ」

一人で自爆している。

なにこの可愛い生き物。

「ミスタ……」

「ミカド・ド・ラエモン。ミカドでいいよ」

「わ、分かったわ。ミカド、ここで見た事は内緒にしておいて頂戴」

「ああ……ま、いいけど。もう日も落ちるから、遅くならない内に帰った方がいいよ」

「ええ、ありがとう……」

ルイズ嬢と言えば、トリステイン貴族の中でも格式高い公爵令嬢であり、本人も例に漏れず「真つ当なトリステイン貴族」をしていた。更に、連日キュルケとの争いを繰り返しているから、ゲルマニア貴族を毛嫌いしている事は間違いない。

まさか、僕とまともに会話するなんて、思いもしなかった。

しかし、長居は無用。原因が分かったところで満足して飛び上がる。

下から僕を見上げるルイズ嬢は、心なしか羨望の眼差しで僕の方を見つめているような気がした。

じゅっさんわ

夏休みの開始。それは僕にとって、領主としての仕事の開始に他ならない。

幸いな事に、領主一年目から内政に関わる書類仕事を、応接秘書から内政官まで成長進化したフラーマとエルサに押し付けていたこともあり、僕の負担は週一回ほど書類を整理する程度のもの。

キュルケとタバサの来訪までは二週間以上の猶予がある。彼女たちの相手を務める為にも、領内の仕事を終わらせておきたい。

「エルサ、あの商人の三男はどうなってる？ 教育はフラーマに任せただけ」

執務室には僕と彼女の二人だけ。

黙々と書類を眺め、時折なにか書き記すエルサ。そのキャリアウーマン風な雰囲気は喋り始めると同時に崩れ去る。

「えーっと、もう随分と仕事を任せてるはずですよ？ ラエモンの商人の息子さんですから、町に関する書類を中心として塩関連の商いも」

「今の仕事量はどうか？」

「むーっ、少し長い休みが取れるようにして欲しいですー。ウインドボナは無理でも、お隣の領地まで買い物に行ける程度の」

領内に店舗を構える商人が居ないから、最近はこの手の「何か買いたい」という要望が増えていた。

ラエモンの商家は中卸が主な仕事で、生産者と小売店のお得意先を行き来しているし、今現在まではミカド商会でも小売店を営んで

いない。

行商人などが来た時くらいしか買物が出来ず、選んで買うほど商品も無いのが現状だ。

「ミカド商会でラエモンとシサイに店を出すよ。運営は商家の次男と三男に任せるつもりだから、読み書き出来る人間を雇う手続きだけしてくれ。それでミカド商会の仕事は全て無くなる。」

欲しい物があれば、仕入れの時に要望でも出しとけばいいよ」

「おーおーっ、それはいいですねー」

商家の息子たちの名前は何なのか、今更ながらに気になってきた。

「店も建てておくよ。書類は……はい、これ」

「はあい。あ、ミカド様、家畜の被害が出ていますよ？ 解決の要望書が届いてます。場所はラエモン領との境にある森近辺」

エルサから書類を受け取って読むと、端的に集村の代表の名前と被害報告、それに解決のお願いだけが記されている。二頭ほど牛を持って行かれているが、それほど切羽詰ってはいないようだ。

昨今、肥料を撒いて耕した荒地に牧草を植え、増やした家畜を放牧している。その中でもラステン領寄りの土地で起こった事件らしい。

「軍を動かす。後は頼んだ」

「はあい」

軽い返事に見送られて執務室を出た。



## 第十四話

### 面子と実利と

領主の館の二階には内政を担当する人間の集まる部屋がある。吹き抜けのホールに面した部屋は軒並み応接間や客間で占められており、少し廊下を奥に進むと日常で使用している実務的な部屋ばかり。その中の一つに僕の執政室があり、また内政に携わる人間の仕事場もある。

ダークブラウンの扉をノックする事もなく押し開くと、中には女性一人と男性二人。

ブラウンの長い髪でテールを作り、同色の瞳でこちらを見ている女性フラーマと、長身で比較的高身なガツリした体躯の、軍を率いる隊長マススト。もう一人の男は中肉中背の、商人の三男。

「や、仕事中すまない」

「あ、ミカド様」

「珍しいな、どうした？」

フラーマとマスストの挨拶を聞いて、皆の集まる木製の円卓へと向かう。商人の三男は無言で頭を下げていた。彼には片手を挙げて答えておく。

そして、持っていた住民の嘆願書をマスストに差し出した。彼は手にしていた書類を脇に置き、僕の渡した方を眺める。

「なるほど、住人に被害は無いんだな」

初っ端から口にしたのが民の事とは、僕は感動しましたですよ。普通、貴族体質が邪魔をして、心底そう言える軍人はなかなか居な

かったりするかもしれない。

「幸いなことにね。マストは今から隊の人間を連れて調査に向かってくれないか」

「了解。馬五頭を借りる」

「ああ、しつかり頼む」

彼は嬉しそうに躍動しながら部屋を飛び出して行った。少し、不謹慎な気もしているが、マストは火系統のメイジだし、体を動かしている方が好きなようだ。書類仕事でストレスを感じていたのだから。

「何があったのですか？ マストは嬉しそうでしたけど」

「ん、何かが家畜を荒らしたんだとさ」

書類をヒラヒラと揺らしてフラーマに渡す。

「ま、こっちは軍の領分だから。彼の方はどう？」

「はい、優秀ですよ。私も随分と楽になりましたから」

「いやあ、フラーマさんの教え方が良かったんですよ」

「いえいえ、エリッグさんが頑張った成果です」

エリッグ！ そうね、エリッグね、うん。

ま、いっか。

「そいつは結構。フラーマはエルサと一緒に雇用する人間の選別を頼む。最低でも読み書きの出来る人からね。」

君にはミカド商会ラエモン支部の方を任せる。兄はシサイ本部だから、上手く協力してやってくれ」

「え、でも、今でも塩の書類などはやってますが」

フラーマがジト目を寄越しながら溜息まで吐いている。  
べ、別にいいじゃんっ、仕事でしょおー!?

「店を構えて小売も始めるんだよね。仕入れは君の親父さんのところに頼む予定だ。」

書類はもう書いたから、フラーマも確認しといてね。僕は今から店を建ててくる」

「はい、お気を付けて」

呆然としている商人の三男を捨て置き、足早にその部屋から出て行く。

彼やフラーマの反応も分からないわけではない。碌にかおも合わせていない人物を、重要な箇所に置き過ぎると感じているのだろう。しかし、こと貴族と平民の間においては、あまりその辺りを意識しなくていい。

ハルケギニア六千年の歴史は貴族と平民の歴史。法的にも精神的にも、平民が簡単に貴族の物を横領するような事はない。よほどの覚悟や理由が必要な行為となるだろう。

ならばいっそ、その心理と立場を利用しておき、相対的に横領のメリットを低くするだけの給金を与える。少なくとも、エルサとフラーマと次男の三人に関しては成功している手法だ。

それに、僕は査察や視察を怠らない。働いている人の潔白を証明と犯罪抑止のため、ここは外せない。

ま、そんなことを言いながら楽をするのも醍醐味ではあるけどね。

領地の空を飛んで向かった先は、ラエモンから内陸方面へと伸びる街道。ラステン領とは逆の方向だ。

漠然と都市計画はあるから、それに従って一部を商用区にする予定。その足がかりとしてミカド商店を建てておき、仕事は小売と塩、それに二次産業を開拓していこうと考えている。

とりあえずは街道を綺麗にしておき、更にその街道に面する丁度良い土地を整地。そのまま店を>錬金くすれば、ミカド商会ラエモン支店の完成。

「スイーツ（笑）」

「なんだその『すいーつ』ってのは」

「俗語。今のは自嘲する気持ちと俺自重（笑）を兼ねた高度なスイーツなわけ、分かる？」

「……………」

目も無い癖して口ほどにものを言うかつ！ 貴様、見ているなっ！

「もう慣れたけどよ、やっぱミカドはオカシイぜ」

「だまらっしゃい」

大きな倉庫や厩舎などもいくつか設置。

塩の大口取引などにも即時対応できるようになるし、運搬も業務に関わってくるからその準備だ。

「さ、帰ろつか。土地の選別と道の整備に時間を取られた」

「マストの方はいいのかよ？」

「報告待ちかな。高い金で雇っているんだから、甘やかす必要はない」

「ミカドはほとんど人任せじゃねーか」

確かに実務は任せつきりですな。全部の書類や領のトラブルを一人で消化するなどという、馬鹿げた真似をしていた一年目の反動かもしれない。

「トップは大きな方針を掲げて、部下を動かすのが仕事。後は組織が健全かどうか見てればいい。」

それより昼飯の時間だから戻ろう」

「本当はかつたるいつてだけなんだろう？」

仰るとおりです。

比較的小さい我が館の食堂も、貴族としての体裁は保っている。

縦六メートル、横二メートルのテーブルは質の良い木を使ったシンプルかつ優美な造形。置かれた椅子もそれに見合う物。

ミカド商会ラエモン支店の建造を済ませて館に帰った僕は、その食堂で豪勢な貴族ランチを秘書の二人と味わい、食後のお茶を楽しんでいた。

しかし、その優雅な一時は勢い良く扉を開いたマストによって壊されてしまう。

「食事ならトムズのおやつさんに頼んでくれ。マストに用意してた分はエルサとフラーマの腹に納まった」

「もうっ、そういう生々しい言い方はやめてー」

エルサは恥ずかしそうに主張しているが、フラーマよりも多くの

皿を片付けていた。

こいつが太らないのは何故なのか、理由が分からない。主に胸が。

「それよりも、調査の報告だ。現場には馬の蹄「ひづめ」と車輪の形跡が残っている。跡を追ったら街道をラステン領の方へ伸びていたから、領の境目までしか確認していない」

「おいおい、勘弁してくれよ……」

亜人でも出ればいいと考えていたら人間、しかも馬と荷車を持っている。

通り魔的な賊の犯行ならまだしも、ラステン領の人間だと面倒だ。

「今は重点的に哨戒するよう指示を出している」

「それでいい。ラステン領との境は超えないよう皆に注意しておいてくれ。向こうの衛兵との間で何か問題を起こしても助けてやれんよ」

思わず溜息を零してしまう。

ラステン侯爵など領の購入の時以外、顔も見えていない。経営の資料で見た印象は、重税を課してでも軍備に金を回す人。以前に領を買った商人から、再び領を買い戻しているという事実もある。

「マストはこの件が落ち着くまで軍を優先してくれ。休める時に休んでおくよう心掛けて欲しい」

「了解した。それじゃ俺も飯にする」

よほど腹が減っていたのか、マストは足早に部屋から出て行つた。彼も貴族の端くれだ。軍の鎧を着たまま現れたのも、迅速な報告を優先したからだろ。これが同じく隊長としてシサイ周辺の海岸沿いを任せるマルケスだと、ラステン侯爵の事まで気が回るか分か

らない。やはり蛇の道は蛇ということかね、あーやだやだ。

「ミカド様、この件はラステン侯爵に報告した方がよろしいのでは？」

「ん、手紙を書いて送るよ」

内容は簡潔に事件のあらすじを記す。そして、犯人の調査の要求と、やむ得ない場合におけるラエモン軍侵入許可の申請、といったところだろうか。

直に手紙を渡すのは難しいから、ラステン領の衛兵にでも渡す事となるだろう。貴族からの手紙だから衛兵も職務を全うすると考えていい。しかし、本人に届いたとしても、無視される可能性がある。この場合は……確信を持つてのスルーという事で。

お茶の時間はすぐに終了。執政室に戻った僕はすぐに手紙をしたためる。

手紙はすぐにマスト隊の副隊長に渡され、その日の内に速達の任務を遂行してもらった。

家畜の被害が報告されてからしばらくは何も起こらず、マスト隊による夜間の巡回も空振り続きだった。普段の数倍もの人数を夜に働かせて人件費ばかりが嵩み、あまり望ましくない無為な時間ばかり過ぎてしまう。

ラエモン侯爵から手紙への返答も一切なかった。

動きがあつたのは最初の事件から約二週間ほども過ぎた、ある日

の深夜。

その日、僕は寝ている時間にマストから叩き起こされた。

「今、何時だと思ってるわけ？」

不機嫌だった。

でも睡眠を妨害されたら誰でもそうだよな。

「賊が出たぞ。人数は三人、馬一頭と荷車が一両。今は発見した部下二名が追っている」

「あー、ようやくか。またラエモン領側？」

「そうだ。前と少し場所は違うが、またあっちに逃げたらしいぞ」  
「場所を正確に言ってくれ。僕は飛んで行く」

マストは部屋の壁に掛けてある地図を指す。それを横目に見ながら位置の確認と出発の準備を終わらせ、窓から文字通り飛び出した。僕に追従したマストは、待機させている馬の方へと向かう。>フライ<で件の場所まで飛ぶと精神を消耗しすぎるからだろう。妥当な判断だ。

「俺もすぐに行く、無茶するな」

「ナマ言っんじゃないっての。早く来ないと褒賞も無くなるよ」

彼に発破を掛けておき、そのまま件の方角へ飛ぶ。

犯人が現れてからどれくらい経ったか分からないが、賊を追ったマスト隊の衛兵らは領の境目付近まで到達しているはず。

捕まえたならそれでいい、逃がしていたら………かつたるいな。



シンと静まり返った森の上空から、人の声が聞こえてくる方へ近づいてゆく。囲いを破られた場所は街道と離れており、犯人の逃走経路として森が使われたようだ。

距離を詰めてからは森の中へ降り立ち、>加速<を使つて走る。程なくしてド・ラエモン領の軍用防具を着けた衛兵を一人発見。倒れたまま呻いていた。

「ミカドだ。何があつた？ もう一人は？」

「おおつ、犯人にメイジが一人居ます。刺激しないよう密かに追っていたのですが、私は見つかつてしまい攻撃を受けました。もう一人は隠れたまま見つからず、今も追跡中です」

「ご苦労さん。僕は今から追う。お前はマストが来るのを待つてからだ」

彼は>エア・カッター<か何かで脚を狙われたらしく、関節部の隙間から出血していた。応急処置として>ヒーリング<を掛ける。魔法は鈍らな西洋剣などと違い、綺麗な傷を作るから治療し易い。

「ありがとうございます。私は大丈夫ですから、後を追つて下さい」  
「ああ、行ってくる」

周辺にある蹄と車輪の跡を追い、走り始める。

ラステン領とラエモン領との境に柵などは設置していない。それに加えて森の中であるため大雑把な感覚だが、どうやら境を越えてラステン領に入っているようだ。

犯人を追ったラエモン領の衛兵がこの先で暴れたり、ラステン領の軍人といざこざを起こす前に捉えたい。ラステン侯爵に送った手紙の返事はいまだ無いのだから。

「デルフ、相手にメイジが一人居る。魔法は頼んだ」  
「ちったあ気合の入った魔法を吸いたいもんだね」

付属する紐で担いだ黒色の鞆を左手に持ち替え、腰に添える。百五十サントの大柄なデルフを鞆ごと手に持つ必然性は無い。ただ、なんとなくだ。

前方を見据えると、漸くそれらしき人影と馬、それに荷車が見えてきた。そこから>加速<の状態で走って僅かに数秒後、ラエモン領の衛兵の前に立ち、戦闘の前口上を述べる。

「ミカド・ド・ラエモンだ。おまえたちが領の家畜を殺し、奪った犯人だな。」

素直に投降するならばよし、抵抗するなら少々痛い目に遭う」

「ミカド様っ!? ど、どこから……いえ、助かりました。あの小柄な男はメイジ、お気をつけ下さい」

話をしている最中に、そのメイジから>エア・カッター<が飛んできた。自領の衛兵にも当たる角度で放たれたそれを避ける選択肢は無く、デルフを盾にして吸い取らせる。

「なっ!」

驚く小柄な中年メイジをよそに、他の体格の良い男二人は馬を動かそうと必死に鞭打っている。

そのまま捨て置くわけにいかず、>シャベリン<を車輪に撃ち付けて凍らせると、その二人の男は荷車を諦めてこつちを襲う構えを見せた。

「しょっぱい魔法だぜ。腹の足しにもなりやしねえ」

「口が悪くなつてないか？ デルフ。おまえたち、警告はしたぞ」  
「お、おまえ、ここはもうラステン領だぞ！」

彼の言葉で二人の男の動きが止まる。  
襲つて来ても構わないのに、律儀なことだ。

「それがどうかしたか？」

「私はラステン領の衛兵を任せられている隊長だ！ ド・ラエモンの  
ような下級伯爵が侯爵に楯突くつもりか！？」

「阿呆。犯罪者を捕まえるのは立派な権利の行使だ。証拠もあるか  
ら言い逃れも出来ん。」

おまえは仮にも貴族だろう？ ラステン領の衛士がうちの衛兵を  
傷付けたその行為に、どれだけの意味があるのか分かっているのか  
？」

自分の事で精一杯といった顔をする三人に、こんなお喋りは不毛  
だったらしい。

「もういい、動くなよ。これは最後の警告だ。次に逃げた時は五体  
満足で居られると思うな」

これから考えると暗い気持ちになるが、過ぎた事は仕方がない。  
彼らにはきつちりと責任を取ってもらう。他の犯罪者予備軍へ、  
ラエモン領での犯罪は例え貴族でも裁くという姿勢を見せつけ、資  
料として残った判例を後の礎とする。堆肥に埋もれて溺…いや、鼻  
が？ げるほどの悪臭でも喰らつてろ。

大人しくなつた彼らは縛つて荷車に積み、館までの道のりを家畜  
とランデブーさせてあげた。後から来たマストは悔しがっていたが、  
今回の褒賞は上手く追跡した二人の衛兵に贈る。

館に帰ってから三人を適当な厩舎の小屋に監禁しておいた。処理を終えて自室に戻ると、少しマストと話をする事に。

「まさか軍の隊長が、他所の領の家畜を盗るなんてな、呆れるぜ」  
「まだ、自称だけだね。それに、ラステン領の軍はウチと比べて規模が大きい。隊長なんて言ってもマストとは別物だよ。平民の兵を従えてるなら、せいぜい下士官つてところじゃない？」

それも彼の妄言なら嬉しいんだけどねえ……頭が痛い問題だよ。ラエモン伯爵に出した手紙の返事、来てないしさ。今回も報告の手紙は書くけど、どうなるか分かったもんじゃない」

ラステン侯爵のプロファイリングしてみると、結構な金ゲバ。

前回、ラエモン領を売買した時に、偶々なのか狙ったのかは定かではないが、売った時の三割ほどの値段で買い戻している。期間も半年だから相当な儲けが出たはず。

僕が領地を購入した当時、ラエモン領を十年経営しても購入した金額が戻ってくる目算は立たなかった。領の物資を全部引き上げられていたり、軍も全てゼロからのスタートだったり。そして、農民を多く残して行ったのも同じ目的の嫌がらせと仮定すれば、一応の説明が付いてしまう。

つまり、販売する予定の領地を破綻する程度の収支にしておき、売買の差額で儲けようという狙い。帰納的憶測では確実にそうと言いつけないが、あわよくばという考えはありそうだ。

「向こうの出方次第だな。捕まえた三人はどうする？」

「裁判が終わり次第、刑務所に送る。労役させるから堆肥施設をちよいと改修する予定。」

管理は軍の仕事になるからね。よろしく頼むよ隊長さん」

諦めの境地に達しているのか、マストは深い溜息と同時に小さく

悪態を吐く。

「ま、仕方ない。無い方がおかしいんだからな。牢屋くらいはあったんじゃないのか？」

「あるにはあるよ、館の地下に。でも、使う気も使った事も無い。盗る物すら無かったから、犯罪も起きなかったんだろっね」

当時、農民は個別の財産など持っていなかった。今でも家畜や農地は集村で共有しながらやりくりしている。

家畜の飼料にすら困っていた頃の名残がそこかしこにあるのは、僕が細かい事に口を出していないからかもしれない。農業の手法や渡した道具と施設の使い方は半ば強引に教えても、その辺りは彼らが満足ならそれでよかった。

「そうか。まあ、管理は任された。俺はそろそろ寝る」

「ご苦労さん、おやすみ」

全く面倒な話になったものだと、久しぶりに溜息を吐きながら机での作業を開始。

今回の手紙は無視してくれるといいな。

自称「ラエモン侯爵に衛兵を任された貴族」の男を尋問したところ、素直に喋った。

彼は風のドットメイジ。ラステン侯爵に徴用されていたのは事実だ。残りの二人はその隊の民兵。

「鬱だ……」

「どうしたんですか？」

ラストン侯爵へ宛てた手紙に対する返答だ。今回は速達レベルの早さで僕の元まで届いた。この世界の手紙で返答が三日以内という事態は、相当に重要な件でしかあり得ないと思う。

「ほら、見るか？ ラステン侯爵からだ」

「なにになに……うえ、どうするんですか？」

いい歳の女の子がそんな声を出すんじゃない。

しかし、それは僕の気持ちを代弁してくれたとも言える。何故ならその手紙を読んだ僕も、似たような声が出そうなところを強引に引っ込めて呻いたから。

手紙の内容はこうだ。

『うちの衛兵の隊長になにしてるわけ？ なに、うちと戦「ヤ」るの？ こっちが領を分けてやったの忘れて、恩を仇で返すなんてサイテー。そいつが何かしたなら裁判してあげるから、証拠と一緒にそいつ送り返してくれない？ いいよ、ね？ こっちも勝手されたんじゃ下の者に示しがつかないんだし、それが筋じゃない？ 返答を待つ』

「裁判はこっちでやるし、罰も受けてもらう」

「いいんですか？ ちょっと不安なんですが……」

「ラストン侯爵の立場からすると、圧力で押し切るのは上策だろうけど、僕の方がそれに乗ってやる必要は無い。そもそも、ここで引いたら向こうのゴネ得じゃないか。捕まえた男たちも、ラストン侯爵の庇護に期待してる。ここで許せば、もっと露骨な略奪行為が行する可能性もあるね」

皇帝の名の下に国内の侵略行為が許されていない以上、領地同士の争いでは軍の戦力差などあって無いようなもの。ラステン侯爵もそれは知っているはずで、手紙の内容を威圧的に書いたのも手が出せないからだろう。

後日、再びラステン侯爵へ宛てた手紙の内容は、向こうの要求を完全に拒否するという形で書いた。更にラステン領の軍に対しての嚴重な抗議も記す。全くのノーリスクで居られると高を括っている彼に、責任者は責任を取るために居ると認識してもらう。

裁判の方は平民二人に刑務所での禁固二年、組織の長であり二人を扇動した隊長には禁固五年及び解放後の永久追放で決定。これはラエモン領の衛兵に対する傷害を含む。本来ならば貴族の名を奪って追放などになるが、僕には権限が無い。

服役中の態度を鑑みて、早目の釈放も考えているから、出来れば更生して欲しいものだ。

ド・ラエモンのように貧弱な領地を見ると、頭から食って掛かるのが貴族。ヴィリエの一件然り、他への体裁を悪くしないなら厚顔無恥な振る舞いも是とする者は多い。政治の世界と関わりの濃い者ならば尚更だ。

それは分かったから、僕を巻き込まないで欲しい。ワリと切実に。

じゅっよんわ

「あつ」

という間に時間は過ぎ去り、キュルケとタバサの来訪はもうすぐだ。準備に追われる使用人たちを見ながら、僕はいつものようにのんびり。

「給仕は誰がやる？ 一応、この館の勤務歴からするとフラーマとエルサかな？」

以前は応接秘書だった彼女たちも、すっかり内政官で定着している。ここ数年は応接もご無沙汰で、ろくに覚えていないのではなからうか。

追加で雇った使用人たちはまだ経験が浅く、貴族の応対などをさせられなかった。僕を訪ねる貴族など居ないから、僕の責任でもある。仕方のないことだ。

「ううー、私はそういうの苦手なんですよーっ」

少し長くなった金髪と細腕を、机に放り出して突っ伏すエルサ。

この我がままさんめ。

「フラーマと大違いだな」

「私はもう七年ほど務めておりますから」

館の中で最も長い勤務歴だ。

思うに彼女は彼氏を作らないのだろうか。薄茶色の長い髪と瞳に、



その女性らしい肢体。フラーマは男を誘うに十分な魅力を備えている。にも関わらず、全くそういった噂を聞かない。

「僕の友達として来るんだし、そこまで畏まらなくてもいいよ？」

「そこが不安なんですよー」

「お二人とも女性なのでしょう？ ミカド様も隅に置けませんね」

少しの棘もない言葉が、逆にアウトオブ眼中と宣言されたようで悲しい。

「ははっ、色っぽい関係じゃないよ。学院でトラブルに巻き込まれてね、色々あって仲良くなっただけ。というより、そのトラブルのお陰で、トリステイン貴族に睨まれちゃったんだよね。」

本当なら男友達でも誘って、幻想種でも捕獲してみたかったな」

野生動物とは違う、奇妙な生き物の集まる場所があると、書物などにも記されている。幻想種を捕らえるために派遣した軍が、返り討ちにあつたなどという話も。

「危ないですよー？ 人間を食べる種族だっているし。」

ミカド様が倒れたら、領主様が変わっちゃうじゃないですかーっ」

エルサの青い瞳に、若干ながら不安が滲んでいる。

そこまで慌てるような話だったかな。

「いやいや、食べられないから。」

それにさ、僕が仕事しないの知ってるでしょ？ どうにでもなるよ、実際」

「ミカド様……次の領主様も良い施政をなさると、私どもは期待しております。まず搾取され、金にならないと分かったら売るでし

よう。貴族になる者なら、それが当然のことなのです」

瞳を睨で覆ったフレームが少し頂垂れてそう言った。

「僕がいつまでも居られると考える方がいいよ？ 貴族が戦死なんてありふれた話で、僕には継がせるべき人間も居ない。君たちも、もしもの時の身の振り方は考えておくべきだ」

例え戦争に出なくても、戦争からやって来る位置にある領地だ。

他にも亜人討伐などで討ち死にしたり、つまらない賊に襲われる事もある。もつとも、僕がそれで死ぬかと言えば、全くそんなことはないのだが。

僕だつて頼られるのは嬉しい。でも、依存されると困ってしまう。僕がいつまでもここに居られるのならそれで構わないが、そうもいかない。

「嫌です。次に領主が交代したら辞めるもん」

「僭越ながら、私もエルサと同じ意見です。幸い身に余る給金を頂いておりますので、小さなお店でも開きますよ。でも、館で働く用人ほど余裕のある領民ばかりではありませんから、なるべく危険な事はお慎み下さい」

「分かったよ」

やはり、平均的な技術レベルや制度を逸脱するような、近未来を先取りする政策は控えるべきなのだろう。これ以上は「過ぎたるはなお及ばざるが如し」というやつだ。

平民が自ら技術の水準を押し上げなければ、彼らの生活に発展の時は訪れない。何故なら、例え僕が何か与えたとしても、それを維持できないからだ。一代をもつて潰える技術に頼った発展など、後の害悪にしかない。確実に弾けるバブルのようなもの。

貴族の連中は魔法以外の技術に興味を示さず、他の技術そのものに唾する。これは学院に通って嫌というほど知っている。但し、コルベールを除く、と注釈は付くが。問題は貴族が興味を持たない限り、技術の発展を望めないことだ。

僕が領内で広めた技術に、細かい理屈はいらない。丸覚えで十分な効果が期待できる。それが平民の維持できる技術の限界。

いつかこの世界にも社会制度の根本を変えようとする、革命児や英雄といった類の者が現れる。その者の導きによってハルケギニアは革命の時を迎え、平民の文化が台頭してくることだろう。

もし、僕がその時までこの世界に居たなら、求めに応じて協力するかもしれない。

僕自身が扇動者となるような、かつたるい真似はしようと思えるだけでかつたるい。だから、誰か頑張つて。汚いな流石僕汚い。

## 第十四話

夏休みは友人と

ゲルマニアの中心部に繋がる街道から、ラエモンの町を抜けてラストエン領に至る、非常に重要な街道がある。その道の幅は大きく、交差路には道標も立てており、日々どこぞの商人が幌馬車を引いて行き交っているようだ。

領主の館までの道も、当然ながらその街道からの支流で、道幅も広い。しかしながら、あまり有効に使われているとは言えず、閑散としている。商人が交互に鉢合わせるようなことは滅多と起こらないし、所有する馬車を動かすこともなかったから。

しかし、流石にフォン・ツェルプストーは格が違った。

その日、僕の館に現れた馬車は五両編成。護衛の衛士も十人ほど馬に跨っており、一見するとどこぞの姫のような登場。館の周辺に詰めていたマスト隊の兵士たちは圧倒されてしまい、口を開けたまま佇んでいた。

「マスト、向こうの衛士と挨拶がてら軽く打ち合わせしといて」  
「ああ、了解した。フォン・ツェルプストーと聞いて覚悟はしてたんだが、娘の外出だけでここまでするかよ。まったく、伊達にラ・ヴァリエールと張り合ってる貴族じゃないな、大したもんだ」

僕の領からすれば来ただけで一大事。

以前にキュルケも言っていた、見栄の張り時つてのが今なのだろう。マスト隊や使用人たちの不安気な表情を見ると、その効果は疑いようもなかった。海千山千の閣僚貴族どもが金集めに腐心するはずだよ。

「ミカド・ド・ラエモン伯爵は居られますか？」

護衛と見られる衛士の一人から声が掛かる。

腰にはレイピアが携えてあり、メイジであることが窺えた。

「僕が領主のミカド・ド・ラエモンだよ。護衛の任、ご苦勞様」

「はっ、職務ですから。つきましては私たちの滞在許可を頂きたい、もちろん。窮屈だろうけど、ゆっくりして欲しい。」

詳しい事はうちの軍の隊長マストに任せているから、そちらの方で話をしておいてね」

「はっ、ありがとうございます」

マストと共に立ち去る彼を見送る。

すると、馬車からキュルケとタバサが降りて来た。

「二人とも、長旅ご苦労様。とりあえず、お茶にしようか？ 疲れ  
てるでしょ」

「ええ、ありがとう。案内お願いするわ」

タバサは暇つぶしに読んでいたであろう本を閉じ、小さく頷いて  
後から付いて来る。

館の方も使用人の準備はさせていたから、応接室でお菓子の時間。  
僕も最近の仕事に忙殺されていたから、色々と楽しみだ。

ふかふかのソファに座った三人の貴族たちが一つの卓を囲み、  
お菓子と紅茶と談話で過す午後の一時。そんな、いかにも貴族らし  
い振る舞いを見せる僕。

そしてその僕を、気持ち悪いモノでも見るかのような視線が貫く。  
給仕をするフラーマとエルサの二人だ。使用人の中でも応接経験の  
豊富なこの二人が、皆に推されてこの仕事に就いていた。

突っ込みたい気分ではあるものの、貴族のマナーで使用人を意識  
しないというものがある。部屋が付属品のような扱いをするのが正  
しい姿なのだ。当然、僕のようなにわか貴族でないキュルケとタバ  
サの態度は、給仕の二人の存在を完全に無視している。ここで僕が  
給仕に視線を送れば、彼女たちもその禁を解いて反応するだろうか  
ら、なるべく避けていた。

「何よ、赤字の領地だって言うから、もっと寂れてると思ってたわ。  
町も街道も綺麗で活気もある良い領地じゃないの。あなたの給金が

安いのって使ってるからでしょ？」

実際は純利益と別に貸付金の返済も貰っている。別の計算をしているから、いつもは含めない方で考えてしまう癖が付いているのだ。

「確かに住みよい領地のためならと、色々な所で使っている。でも結局のところ、それは将来の税となって返ってくるようになっていくんだよ。情けは人の為ならず、だね」

「え？ 領民のためにやってるのに、人のためじゃないの？」

諺って稀に通じないんだよね。この場合は直訳でも分かっちゃいから、意識の方をキャンセルしちゃってるのかもしれない。変な話、難解なものほど通じるようになっていく。

「古い言葉でね、要約すると情けは巡り巡って己のためになるものって意味だよ」

「ふうん、東方の言葉なのかしらね」

「初めて聞く」

「僕の国の言葉だね」

何時でも何処に行っても、自分の国は日本だと言うのだろう。殊更、愛国心に満ち満ちていた訳でもなく、悪い部分も沢山知っているとこのくに。自国の良い部分は外に出て気が付くとどこぞで聞いたが、本当らしい。

「それはそうと、今日の晩餐は楽しみにしているわよ？」

「ああ、良い食材を用意している。タバサもキュルケも楽しめるはずだ」

「期待している」

真剣な表情で視線を寄越すタバサ。半分以上それが目的で来たのだろう、いつになくご執心な様子。アジコを餌に釣ったカンパチで、更なる大物を釣りあげた気分だ。

現在、そいつらはマグロを筆頭に寿司のタネとして魔法で冷凍保存している。暇な時に釣ろうとして駄目だったから、強引に引っ張りあげて来た。

料理人たちに寿司を作らせる試みでは酢飯すらまともに作れず、握りも不可能。こればかりは僕が少々ズルをして作るしかなかった。

「予定としてはいつ頃にタルブへ向かう？ 来月からシエスタも休暇で帰省するはずだけど」

「ヘイムダルの週の虚無の曜日あたりに到着するように出発すればいいんじゃない？」

要するに来月の二週目の休日に到着予定で出発か。  
いいかも。驚かないよう先に手紙を送っておくでしょう。

「エルサ、手紙の用意をしてくれ」  
「畏まりました」

静々と従い、お手本通りの礼をして退出。  
なかなか様になっているじゃないか。

「かわいい使用人を雇っているのね。もしかして夜の方も？」  
「まさか。分別も節操もない貴族と同じにしないでくれ」  
「あははっ、ごめんなさい。あんまり可愛い子だったからつい、ね」

ハーレムを作ろうなんて……お、お、お、思ってへんわっ。  
後を考えたら、娼館のプロにでも頼んだ方がいい。お互い金で割り切つてるところなど、非常に好ましく感じている。運営している

のが奴隷商と大差ない人間、という事実を目を瞑れば。

「そついえばタバサの付き人は居なかったね。帰したの？」

「最初から居ない」

やぶへびっすか。

「私の所に居るなら必要ないわよ」

「それもそうか。馬車を五両も用意した上に立派な護衛まで居たものな」

「あなたに配慮して半分にして貰ったのよ？ お父様が連れて行けって煩かったんだから」

ホワッツ？ 何故？

僕のような弱小領主にまで見せ付けても、特に利は無いはずだ。

「何処に行くにも連れてるのか？ 金持ちの考えは分からん」

「失礼ね。最低限は見せなきゃ示しが付かないわよ。ここは元々ラストン侯爵の領地だって話でしょう？ あまり仲が良くないのよね、あそことフォン・ツエルプストーは」

前もそんな話をしていた気がする。

領主として聞き出す義務があるのかな。

「何か因縁でもあるの？ ラ・ヴァリエールなら話は分かるけれども」

ゲルマニアとトリステインの国境沿いに領地を広げるフォン・ツエルプストーと、同じくトリステイン側の国境沿いに領地を持つラ・ヴァリエール。彼ら 冠詞は女性だが 何か起こるたびに、



戦争の中で突付き合う関係なのだ。

ラステン侯爵の領地も国境沿いなのだが、トリステインに隣接する地域はそれほど広くない。恐らく複数の領地に狭い国境沿いを分け、ゲルマニア側の戦力維持を図っているのだろう。

「ゲルマニアの歴史は知っている？」

「多少は」

「東へ領地を広げていく以前から、ツエルプストーとラステンはあったのよ。両家とも軍人家系でね、褒賞のため我先にと前線に立っていたらしいわ。で、戦時ならともかく平時の今は軍の価値も低く、褒賞も無い。元々が利害関係で仲良くしていたのが、今度は内側の利を奪い合う関係になっちゃってるのよね。ゲルマニアの現状はそんなもんよ」

ド・ラエモン領を巻き込まなければ、勝手に潰し合ってくれて構わない。しかしこの調子だと、ラステン領から色々とちょっかい出してくるかも。

「折角ハルケギニアでも大きな戦力を保有する国の一つなのに、今じゃ他所と戦争するどころじゃないわよ」

「ご愁傷様」

「あなたもゲルマニアの貴族でしょ！」

そうでしたね。

「失礼します。お持ちしました」

「ありがとうございます」

インク、羽ペン、羊皮紙を卓に置いて話を続ける。

「まあまあ。ラステン侯爵が軍の拡大と金に貪欲な理由は分かった。僕も少し前に難癖付けられてさ、正直なところちょっと困ってたんだよね」

「どんな？」

彼女たちが来訪するまでに起こった、ラステン侯爵絡みのいざこざの全てをキュルケに話す。彼から送られてきた手紙の内容や、ドラエモン領の取引に関する裏話なども、赤裸々に告白した。

全てを聞き終えたキュルケは、若干ながら呆れた様子。

「狡猾って話は聞かされているわね。確かにやりそうなのよ、あの男なら。私が公爵の爺さんへ嫁がされそうになった時も、色々と工作していたようだったし。結局は私から断るつもりだったから問題にもならなかったけど」

「政略結婚にしても、相手が爺さんってどうなの」

「どこの貴族も大変って事よ」

軽く言って溜息を吐いている。

世襲制の貴族は名を残すのに必死なのかな、僕には全く共感できない。否定も肯定もしない。ただ、そう遠くない未来に変わってゆくハルケギニアを想像させられる。貴族の箱庭と化したこの世界も、今のままで居られない時期が来るだろう。

その後はキュルケが頭の痛くなる話を嫌い、単なる世間話に終始した。

二人を僕の領内で連れ回せば、色々な意見が聞けるかもしれない。少し入れ知恵してやるのも楽しいかもしれないし、せいぜい珍しい物を見せてやる事にしよう。

お待ちかねの晩餐会。場所はもちろん食堂で、無駄に豪華と見ていた部屋が、初めて役に立ったような気分だ。

僕はテーブルに席を置いているものの、基本は給仕をしている。僕にしか出来ないことが、多少なりとも存在するから。

「これは何？」

「気に入った？」

コクコクと顎を上下させるタバサの眼鏡が、盛大に曇っている。彼女が手を付けている、白い四角のプルプルした物体、それは豆腐だ。味付け次第で化けるのだが、今日は昆布だしの湯豆腐。

「豆腐っていう食材だよ」

「信じられない。フォン・ツェルプストーの屋敷で食べられない物がゲルマニアに存在するなんてね。それでも大抵の食材は知っているのよ？」

「井の蛙「かわず」をもって海を語るべからず」  
「何？」

本を持っていないタバサは反応が良い。前菜つぼく出した土鍋の豆腐を取り皿で冷やしながら、こちらの話にも興味津々なようだ。豆腐だけでお腹一杯にならないかな。

「井戸の中に住む蛙は井戸の中しか知らない。故に海の話をしても理解できないし、その蛙が海を語る事は出来ない。大海を知ることが出来て良かったねってお話だよ」

「嘲るような話ではないのね」

ん、そっちが気になるよね、やっぱり。

「世間知らずを指す言葉として使われる事もあるから、違うとも言えないかな。」

僕に他意はないよ。珍しくて美味しいでしょ？ 僕の国の料理」「美味しい」

「そうね、薄味なのにしつかり風味がある。大味な料理の多いゲルマニアじゃ見ない料理だわ」

楽しんでるようでありにより。

続いて料理長たちの自信作が出て行き、僕の方もちよくちよくと料理を摘みながらメインの魚を用意し始める。ブロックに分けておいた魚を切り身に仕上げ、皿に乗せた大場と大根の上に。醤油は作っておいた刺身専用のものを醤油さしに入れておく。寿司の方はもう準備して握るしかないから、ガリなどの重要な物だけ用意。

「貴族が給仕をするなんて、聞いた事も見た事も無いわね」

「僕しか握れないから仕方がない。一人前の寿司職人になるまで数十年は掛かるって言われてたよ。握りは十年ほどだったかな。料理長にも許可は貰ってる。彼の顔を潰すつもりは無いからね」

チラッと料理長を見ると、胸を張って直立していた。

あまりでしゃばるのも良くないから、これっきりにしておう。

「さ、小さな皿に溜まってる黒い液体を付けて食べるんだよ。お好みで緑色のやつを少量だけ付けてもいい。それは付けすぎると後から酷い辛さと鼻の痛みに襲われるから注意ね。寿司は僕が少しづつ出していくから、まずは料理長が作ってくれたタマゴね」

こればかりは気合で覚えて貰った。何度も酢飯と合わせて調節してもらい、彼の納得いく寿司の味に仕上がっている。

「凄いわ、これがタマゴ料理？」

「次はなに？」

満足してもらえたようで、料理長もホツとしている。僕のようにズルをせず、本気で挑んだ彼は緊張で固まっていたのだ。

給仕など眼中に無い二人は、次に出す物を楽しそうな表情で待っている。

後は予定通り淡泊な味の方から出す。刺身も鯛から出しているし、きちんと味わえることだろう。飲み物も日本茶を淹れており、最早この食卓は日本食に占領されている。トロまで出した段階で、赤身の刺身や他の濃い味の物を出した。

全体的にあまり濃いものを出していないが、ふたりは十分に満足してくれたようだ。ハルケギニアの食文化で、夕食は比較的軽い。それが功を奏した一因。

全種類の寿司を出した後はリクエストのあった物を握り、満足したところで晚餐会を終えた。

軽いからと調子に乗って食べていたふたりも、少し動くのが億劫になっっているようだ。

「全部いままで見た事の無かった料理だったわ。ミカドが自信满满になるはずよね」

「チャワン・ムシが美味しかった」

「ほほお、あれは僕も好物なんで力作だったんだよ。気に入ってよかった。ぎんなんっていう木の実が入ってるんだけど、少し癖があるから嫌いな人も居るんだよね」

「あれが好き」

変わった味が好きなのかな。

「寿司や刺身はいつでも出せるものじゃないけど、茶碗蒸しならうちの料理人が覚えてる。言ってくれば出すよ」

滞在中は積極的に日本食を出してやろうと考えている。味噌汁やお吸い物もスープとして絶品だし、煮魚や南蛮漬け、塩窯焼きやホイル焼きなんかも練習してくれたから、料理長には感謝の言葉もない。

僕とラエモン領は高々二年の付き合いだ。期間は短くとも、愛着は出てくる。地元自慢をキュルケとタバサには聞いてもらう事となりそうだ。

ド・ラエモン領こそ至高です。

じゅっわ

透きとおるような青い空、サラサラの砂浜、穏やかに揺れる海。  
夏の代名詞と言えるその光景は、ラエモン領の特権。シサイから海岸沿いの道をトリステイン方面へと向かえば、いつでも天然のビーチがお出迎えしてくれるのだ。

「ふふっ、いいわねえ。夏の海は」

ふたりの貴族とその従者を従えて、綺麗な砂浜へとご案内。ビーチパラソルと折りたたみの小さなテーブル、それにビーチチェアを準備したら、後は遊んでくつろぐだけだ。

目のやり場に困る類の水着でご満悦のキュルケと、選ばれたきわどい水着に文句も言わず、本を読むタバサ。彼女たちもそれぞれ楽しんでる様子。

しかし、赤い髪に映える黒いビキニのキュルケの体と言ったら、男の視線を根こそぎ持って行く破壊力がある。タバサの方もキュルケが選んだだけあってセパレーツ。真っ白な布地は儚い少女を思わせ、小柄で静かなタバサに良く似合う。

「んー、『場違いな工芸品』って何でも扇情的な水着があるのかね、デルフ」  
「知るかよ」

法外な値段だったが、納得できるかもしれない。  
ま、キュルケ以外に薦めたら、間違いなく着てくれないけれど。

「あらミカド、何よそれ？」

「ふっ、海と言えば浮き輪っ！　これ宇宙の真理」

風の魔法で空気を吹き込み、ドーナツ型にふつくと膨らんだそれ。ついでにバナナ状の乗れるタイプも作っているから、水上スキーのような楽しみ方も出来る。動力はもちろん魔法。

これは僕が作った。この発想はまだあるまいよ、くっくっ。

「この穴に脚を通してだな、後は持ったまま海に入れば分かる。こっちの黄色い棒状のは上に乗って楽しむものだ」

「初めて見たわ、こんなの」

「私も初めて」

>フライクを使える事もあり、この二人ならば救命胴衣などいらない。沖に出た程度で動じるタマでもない。頼もしい限りである。

「海で潮の向くまま浮かんで、大海の偉大さと自らの小ささを知るのが人というものなのだよ」

「広いわよねえ、水溜りにしては」

「いや、間違つて……ないな。でも腑に落ちない」

陸地より大きい水溜りですか、無駄にスケール大きいですね、キルケさん。

一方のタバサは既に沖の方へ出てしまい、ゆっくり揺られながら本を読んでいる。表情を見る限り、その状況が気に入っているみたいだ。

「これ、少し胸が苦しいわよ。そっちの黄色いのにしましょう」

脇に添える形で浮き輪を持つキルケの胸が、押し上げられて上



向きに何か主張している。非常にけしからんですね。

「跨ったら左右の取っ手を握ってくれ。僕も乗って海まで飛ばすから」

「ふふっ、いやらしいわね」

「待て、それは誤解だキュルケ」

ハプニングなんて期待してへんわっ。

嘘です、ごめんなさい。

## 第十五話

水際でオフサイド

僕らが遊んでいるあいだに、護衛の皆や使用人の連中はバーベキューの準備をしていた。料理の仕込みは料理人たちが済ませているから、擬似クーラーボックスの中には串刺しの味つき肉や野菜が保管されている。油物ばかりではしつこいかと気を利かせ、味噌汁を作って大きな鍋に入れておいた。暑い時期に熱いスープを出すのもどうかと思っただが、海で遊ぶならば問題ないだろうとの予測だ。

「おい。そろそろお昼のご飯にしよう！ 戻って来いタバサーっ！」

呼びかけた瞬間に浮かび上がり、腰の浮き輪を持ったまま浜辺まで飛んで来た。ご飯の時は凄く反応がいいな、この食いしん坊さんめ。

「お昼は何を用意したの？」

「うん、僕の居た国では夏に浜辺でバーベキューが定番なんだよ。肉や野菜の刺さった串物を焼いたり、海老、蟹、イカ、タコなんかもあるね。とにかく、立食パーティーに近い？ 簡易テーブルも用意してるから、そっちで食べてもいいよ」

他にも力キ氷をデザートで出す予定。

貴族っぽくはないね。

「へーっ、何か行軍中の食事みたいね」

「準備はして貰ってるから、もう焼けるんじゃないかな？ スープもあるよ、飲む？」

「飲む」

見た目が茶色だからか、二人ともしばし眺めた後で口にしている。味噌汁の具には近辺で獲れる小さな貝類を使っている。アサリとは少し違った味わいだ。

「美味しいわね、泥水っぽく見えるのに」

「酷いな。それに使っている味噌という調味料は作るの難しいんだよ」

「おかわり」

食器などは流石に使い捨てではなく、貴族らしい立派なものだ。金網、鉄板、グリルなどは>錬金<で作っておいたから、終わったら砂に戻せばいい。魔法万能すぎて困る。

使用人たちが焼けた物を持ってきてくれるから、僕たち三人は簡易テーブルで大人しくしていた。大きなパラソルも立てていて、日陰が丁度いい感じなのだ。

「あ、これ開発した飲み物。レモネードって言うんだけどね、飲む？」

「綺麗な色ね、一つ貰うわ」

「私も」

薄っすら白色の液体に興味を示しているようだ。原料はレモンと蜂蜜という単純な組み合わせで、それを飲料水で割る。魔法で作っておいた透明の氷もお好みで入れると一層おいしい。残った氷は後で削ってカキ氷にする。

「おいしい……」

コクコクと喉を鳴らして飲むタバサ。小動物っぽくて癒される。

「あなたの領って色々良い物があるのね。ラステン侯爵もなんで売っちゃったのかしら」

「僕の居た国にあった物を作ってみただけだよ。前に言ったとおり、最初は酷い状態だった」

「良い領主してたのね、ミカド」

「まーね」

随分とインチキ紛いの建物を作ったり、買わなきゃ手に入らないようなアーティファクトを自作した。そして何より平民向けの実用的な技術を流布したから、二年と少しでここまになっっている。

僕は急ぎすぎたのかもしれない。

満足するまで食べたところでお待ちかねのデザートである、練乳をたっぷりかけたカキ氷を作ったあげた。作り方は企業秘密という事にして、シロップも僕が用意している。キュルケはイチゴ、タバ

サはブルーハワイ、僕は何故かパイソ。黄色キャラがお似合いなんでしょかね？ 特撮が基準なら緑は影が薄くて嫌だけど。

「これが氷なの？」

「細かく削つてある氷に甘い物を掛けてる。ま、食べてみたら？ 夏の風物詩だよ」

怪しげに見つめているキュルケの傍で、黙々と口に運ぶタバサ。

「タバサ、一気に食べると頭が痛くなるぞ」

「……もうなつた。痛い」

こ、これは撫でポツ！？ チャンスなのか！？

「あら、大丈夫？」

「アーツ！ それね、一時的な現象だからすぐに治るさ……」

キュルケに先を越された。

ここで何も考えず撫でることのできる猛者だけが、あの技を習得するというわけか。なるほど、僕のような理屈っぽい男には向かないんだね。

「治つた。美味しい」

「気に入ってもらえてなにより。少しづつ口の中で融かしながら食べるといいよ」

「分かつた」

くつ、今こそ僕は確信した。この小動物を手懐けられず、故に主役たり得ない。なれば変革せしむ何れかを、己が内に上梓「じょうし」せしむそれを僕に……っ！ くつ、右腕が疼きやがるっ！

「なに突っ立ってるのよ、ミカド」

「いやなに、ちよっと古傷が痛んで邪気眼してた」

「は？」

むしゃくしゃしてやった。別に後悔も反省もなかった。

「それより、何処か見たい場所でもある？ この辺りは塩田しかないけど」

「エンデン？ 何よそれ」

「塩を作る前段階で必要な施設かな。技術的な説明は出来ないから、見るだけになる」

「面白そうね、少し休憩したら行ってみましょう」

割と何でも興味を示すらしい。タバサも結構のりのりな様子だ。招いた礼儀として飽きさせないプランを作った側にとって、彼女たちの反応は嬉しい。

のんびりと友人同士で過せるのも、領の仕事をしてくれる皆が居てこそだ。その感謝をなんらかの形で領内に残していこうと、再び決心をする。

ま、仕事も残すんだけど。

ラエモン領のトリステイン側は深い森におおわれている。その地域は国境沿いであるために、ラステン侯爵の支配領域となっており、結果として僕の領からトリステインへ行くには、ラステン領を通ら

なければならぬ。

塩田を作ったのはその森の手前からシサイ方面までの、ラステン領からは肉眼で見えない海沿いの広い地域。国境沿いに警備を置く義務があるため、住民の数と比較して軍人の数が多くなっている。

どちらかと言えば、トリステインよりもラステン領を警戒しているのだが。

「赤い……水？」

「この白い砂が塩なわけ？」

「んー、うん。赤いのは水じゃなくて微生物、つまり小さな生き物の集合した色」

雪のように白い砂状の塩が畝のように盛り上がっていて、その間にあるかん水は好塩基性微生物により赤潮状態。正直、僕も知らなければドン引きしそうなほど奇妙な景色が、塩田一帯に広がっている。

しかし、彼女たちは嫌がるどころか食い入るように見つめ、身動きすらしていない。

「あの建物は？」

「汲み上げた海水を網に垂らす施設だね」

塩田を造って早二年。自然の天日で結晶化している部分も多くなり、かん水の塩分濃度は十分に高まっている。それに伴い塩の製造も右肩上がりに増産中。

「塩田ってこういう物だったのね」

「綺麗」

「見た感じ綺麗でも、やっぱり細菌とか多いから食べないっ！そこっ！」

ズビシッと指をさしてみただけで遅かった。

某推理探偵漫画の主人公のような仕草で、自らの指をペロツと舐めた彼女は僕に向き直る。

「これは……塩……っ」

「当たり前だ馬鹿者」

「……カキ氷も赤かった」

天然さんめ。あんまり可愛い行動ばかりしていると、お兄ちゃん的な人が攫うぞ、攫っちゃうぞ。まったく、油断も隙もあったもんじやないな。

「フォン・ツエルプストーでも常に塩は備蓄してる。最も重要な物資の中のひとつと習うわ。

ラストン侯爵は無能ね、ここを捨てるなんてあり得ない」

心底馬鹿にした風に言つてのけるキュルケ。

確かに塩田ごと放り投げたなら、侯爵など名乗る資格も無いほどに阿呆だ。

「いや、僕が造った施設だよ」

「あら、そうだったの。これがラエモン領を黒字にしたのね」

「Exactly、その通りでございます」

ただ広がる塩田をひとしきり眺めると、街道に待たせてあった馬車へと戻る。

様々な見る機会の少ない施設を中心に社会見学するのも、貴族という立場なら楽しめるだろうと考えて領内見物に出たら、なかなか反応もよろしかった。この分なら完全休養を挟んで二、三度連れ回

せばタルブ行きの期日になる。

「ただいまデルフ」

「なあ、塩田なんか見せて楽しいのか？ デートにしちゃあ色気がねえ」

これがデートだったら振られてるかも。

「友人だからね。デルフもまた見たかった？」

「あんな場所に居たら錆び付いちまうぜ」

「だよな。ま、馬車に乗ってるうちはゆっくり喋ってればいいよ」  
「おう」

待っていたデルフも案外素直である。その彼を連れて馬車へ乗り込むと、キュルケとタバサが並んで座っていた。今日はもう疲れただろうから、このまま領主の館へ帰る予定だ。

道中キュルケの膝を枕にして眠るタバサがちょっと羨ましかった。

友人ふたりとの充実した夏休みは、領内観光と新しい食の探求に終始した。個人的には風車、水車、サイロ、公衆浴場、堆肥施設なども案内しようと考えていたが、考えていた以上に食べ物が好きなふたりだったから妥協。

そして月の変わり目を迎えた頃、滞在していたキュルケの護衛と馬車を連れてタルブの村へと出発。僕の所有する馬車や軍は邪魔になりそうで、出すのを辞めた。



「タルブは葡萄の産地らしくてワインが特産品って話だよ」  
「学院でも出しているわね」

大きな馬車の中には僕、キュルケ、タバサが乗っている。もちろんデルフリンガーも一緒に持って来たから拘ねるような事は無い。以前から作っておいた座布団を尻に敷いても、悪路を行く時は少々痛む。自分の馬車だけでもサスペンションを付けるべきかもしれない。

「よく馬車に長時間乗って大丈夫だな。これも貴族の嗜みなら、僕は貴族じゃなくていい」

「大丈夫じゃないわよ。あまり遠出はしたくないもの。あ、でもこの座布団は良いわよ、楽になったわ。どうしてこういう物を作ろうとしないのかしらね」

魔法にばかり捕らわれるから、材料があっても発想の飛躍がないのさ。突然変異的な異端児でも現れない限り、ハルケギニアに産業革命は訪れないな。農業の方だけでも理解させるのに時間がかかったし。

「下働きしている人間の方を見ないからね、貴族は。権力闘争と金集めとは考え方の方向性がまるで違う。今あるものを奪い合う事に長ける人間には無理さ。ミスタ・コルベールなら何かを成せるかもしれない」

「あの講義でガラクタばかり見せる彼？ とてもそうは見えないわね」

確かに工学的な学問を知らなければゴミ同然のガラクタだね。今は小学生が夏休みに作る工作より酷い物ばかりでも、魔法の要素を

組み合わせれば一気に五百年分は飛躍した技術になる。

例えば風石というフネの燃料がある。ラエモン領でも採掘可能な風の魔法の力を閉じ込めたような石だ。他にも火、土、水と種類も豊富で使い道も様々。化石燃料など必要としないクリーンなエネルギー技術だし、他はともかく風石なら簡単に採れる。

次に考慮すべきは、特定の系統魔法の効果を装身具に閉じ込める技術。扇風機など風の魔法を含ませれば比較的楽に出来る。永続させるには燃料が必要だが、風石でも据えれば確実だ。

「いつの時代も天才は理解されないらしいよ」

「優秀すぎるのも考えもの？ でも理解はされるわね」

「虚無の魔法を使えますって人が現れても、すぐには理解されないって意味だよ」

僕の場合は虚無で何が出来るのか大体把握しているから、特に迷う事も無く信じられるし、理解も出来るけれど、貴族に言えば最悪は異端審問だ。

「それはそうね。上手な例えだったわ、ミカド」

「どうも」

僕とキュルケばかり会話しているのは、タバサが僕の所有している本を読み続けているからだ。魔法学院には無い本も、王立図書館になら存在したりするから、その類の本を貸している。

馬車の中で他愛も無い世間話から、ゲルマニアの情勢と各領の状況など、キュルケに教わる事はかなり多い。僕の方もそれなりに良い情報を譲渡しながら、お互いに楽しく時間を過ごせた。

馬の歩く速度で悠然と進む僕たちの馬車はラステン領の方へと入る。領の境に特別な関所は無く、見回りの衛兵などが散見される程度のもの。

少なくとも僕の領の軍では警戒させてはいなかったのだが。

「貴殿はミカド・ド・ラエモンですか？」

ド・ラエモンの軍は動かしておらず、馬車や護衛の衛士もツエルプストーの軍から派遣されている。しかし何故か車内検めなどを受け、僕は名乗ってもいないのに指名された。

周囲にはラステン領の衛兵どもが取り囲み、ツエルプストーの衛士は警戒しながらも待機。キュルケに何かあれば命に代えても守るだろうけれど、今はまだ様子見している。

「ええ、僕がそうですね。何か御用ですか？」

返答を聞くやいなや、その衛兵は他の兵に合図を送る。まあまあ見られる装備をしている彼は、下士官やその一つ上の階級と見ていいだろう。

「屋敷の方までご同行願います」

「断る、と言ったら？ 僕も友人と旅行中なんだよね」

「ラステン侯爵からは捕縛の許可も出ております。無用の争いは避けたいのですが」

彼はレイピアに手を掛けている。

「あー、タバサ、キュルケ、すまない。少し寄り道になりそうだ」

「いいわよ。あなた、フォン・ツェルプストーの馬車と護衛の一行を拘束したからには、相応の覚悟があるのでしょうかね」

その名に聞き覚えがあつたのか、彼はレイピアから手を離して頭を垂れた。

「も、申し訳ございません。ですが、これは任務。私の一存で変えられるものではありません故、なにとぞ穏便にお願い申し上げます」  
「ふんっ、案内しなさい」

酷く不機嫌な様子のキュルケ。当然か、ツェルプストー領もラステン領の隣だけあって、彼の男と付き合いはあるはず。その上で不仲であると明言したのだ。

しかし領主を拿捕する命令とは短慮が過ぎないか、ラステン侯爵。

「はあ、恐らくあの衛士を罰した件だ。話しただろう？」

「法を犯した部下の行いを詫びるところか、罰した相手を捕まえるですって？ 本来なら私の婿候補に名前が挙がってもおかしくない地位の人物なのに、呆れたものね」

外見だけなら爺の公爵だから遥かに有望かもね。

憤慨するキュルケを宥めながら馬車に揺られて数十分。僕たちはラステン公爵の館へ。

折角の旅行に水を差すような事が起こってしまい、原因の一端を担った僕としては非常に遺憾であるものの、キュルケの存在があつたのは僥倖と言えた。利用するのは気が引けるが、彼女にも利を用意しての取引であるなら、ホイホイ乗ってくれるのではないかと期待している。

好材料はあっても出たとこ勝負。領民の生活も考えると失敗は出

来ない。

## じゅうろくわ

ラステン領の軍に追従すること一時間あまり。侯爵の館まではあと少しといったところで、今もまだ馬車に揺られている。

どのみちタルブに向かうのなら通る道ではあったから、少しの休憩と思えばいいのかもしれない。座布団を敷いてもなお痛む、お尻の休憩だ。尾骨が、尾？骨が。

「キユルケ、提案がある」

「真面目な話みたいね。なに？」

「フォン・ツエルプストーの庇護を得たい。橋渡し役をしてくれな  
いか？」

彼女の性格を考えて、ズバリ言わせてもらおう。

遅かれ早かれ、この手の折衝や外交はあると想定していた。武力の有無によらず、仲の悪い相手やちよつかいを出してくる相手が出たなら、その周辺の領と連携するのが最も効果的と考える。よく言う「敵の敵は味方」ってやつだ。

もつとも、僕の領に武力と権力はないから、慌ててそれをするハメになっている。

「んー、何か目を惹くようなものを示さないと取り合ってくれないわよ？」

「塩を安く売る。その分、ラステン領には高値で質の悪い塩を流す」

塩の増産はそれほど必要ない。天日で自然と出来上がった塩の質はまちまちで、食用に向かない塩も多いため、それ进行处理してラス

テン領に回す。今までラステン領に流していた分は当然フォン・ツエルプストーへ。

おおっっぱらな関税をかけられないから、こんな歪曲気味の嫌がらせ。

「悪く無いわね。詳しいことは紙に書いておいてちょうだい」

「ああ、すぐに出せる条件を書き出しておく。悪いね、キュルケ」

「いいわよ。ラステン侯爵への嫌がらせなら喜んでやるでしょ。」

私も何かとトラブルを起こしてるし、仕事を持ち込めば体裁も良くなるわ」

話をしている間に侯爵の館へと到着。そのまま衛兵の付き添いで客室に通された。

任務を譲らなかつた護衛の衛士とキュルケ、そして僕はお茶を頂きながらラステン侯爵を待つ。捕縛という不当な扱いで連行されたにも関わらず、至極真つ当な対応してくる彼らを不審に思いながら。

## 第十六話

他所との関わり

二年ぶりに見たラステン侯爵は相変わらず痩せていた。貴族の生活の基準が学院の食事だと考えていたけど、案外そんな事はなかったのかな。隠れメタボ体型というだけかもしれないが。

皆は格式ばった挨拶を済ませて椅子に座り、護衛の衛士だけは立ったまま、脇に控えている。

「久しぶりだな、ミカド。良く領を治めているようだなによりだ」  
「ラステン侯爵もお変わりなく」

腹芸なんてものはお断りしたい。

でも、そんなわけにいかず、普通に返す僕。ヘタレですみません。

「驚いたぞ。ミス・ツエルプストーと知り合いだったとはな。一言、私に報告があってもよいのではないか？ 見よ、誤解を招くようなこととなっておる」

何を勘違いしているんだ、この似非ロマンスグレーは。髪を灰色にしてから出直せ。

僕は領地を賜った騎士でも、傀儡の領主でもない。商人だ、キリッ。

「ははっ、それは気が付きませんで」

「ミス・ツエルプストーも変わりないな。公爵殿との婚約話は驚いたよ、その後どうかね？」

「お陰様で破談となりましたわ」

キウルケの表情はにこやかにして冷笑という、あまり穏やかでない胸中が透けて見える感じだ。

その破談の裏側に、どんな謀略があつたのか気になる。

「うむ。では、君の隣は空いていると思つても？」

「それはお父様におっしゃって下さいな。」

それよりも、フォン・ツエルプストーの馬車に杖を向けた、その理由をお聞かせくだらない？」

微笑んでいたラステン侯爵の顔が硬直する。



「非礼は詫びよう。部下はド・ラエモンの手のものとは誤認しておつたのだよ。フォン・ツェルプストーに杖を向けた訳ではない」

「剣を向けられたのは事実。家の方に報告は致しますわよ」

「手違いであつたのは疑いないのだ。故にこうして館の主が出迎えておる。」

目的はこのミカド。ミス・ツェルプストーを引き止めようとは考えておらん」

「あら、奇遇ですわね。私の目的もミカドですよ？」

このやり取りを見るに、フォン・ツェルプストーの方が立場は優勢らしい。娘のキュルケに圧されるほどの差はあるようだ。

やり込められそうなラステン侯爵も、額に薄く汗を浮かべて不器用な愛想笑いをしている。

「ならば、私の用件を済ませるとしよう。その後は好きにすればよい。」

少々お待ちいただけますかな？ ミス・ツェルプストー」

「ええ」

「ではミカド・ド・ラエモンに聞く。いかような故あって我が軍の衛兵隊長を拘束しておるのだ」

説明するまでもない話を振る……確認というよりむしろ、脅し。

「私の面子はどうする」と問う事で身分の違いを前面に出し、圧力をかけてくる。

僕の方は彼らの拘置を認めさせるのが最低限のライン。本来ならば賠償責任と管理責任を問うところ。しかし、身分の差がある以上、キュルケの存在があつたとしても難しい。

「手紙に書いた通り、ラエモン領の物を不当に奪い、衛兵二名に傷

を負わせ、僕を殺そうとした罪により、法の裁きを受けてもらいました。主犯格という事もあって、彼の罪は一番重い。他二名の方も同様に罪科を問いましたよ」

「罪は償わねばならん」

「ええ、ごもつともです」

侯爵は紅茶で一息吐く。

なにも僕だけが建前に疲れるという事ではないようだ。ラステン侯爵の顔は怒気を孕み始め、平静を装った仮面の端々に痛々しい顔が洩れて見える。

「だが、彼の者は我が領の衛士である。然らば我が領の裁定に任せるのが妥当ではないか」

送られて来た手紙の内容からすれば、優しい物言いだ。フォン・ツエルプストーの名が見え隠れして無茶を言えなくなっているらしい。

もし、キュルケが居なければ、僕を投獄した上で、ド・ラエモンの購入を騙り、再び領地を取り戻す算段などもあったかもしれない。税を国に払うだけで領地を手に入れ、文句を言われることもない。なかなか、良い案じゃなからうか。

「ラエモン領で起こった事件ですから、侯爵様のお手を煩わせるまでもありませんよ。」

僕にとっても、良い経験となりました」

件の衛士を引き渡せば、彼は非常に軽い罪で済まされるだろう。それをする事で、ラステン侯爵は自らの権威を知らしめると同時に、庇護下の者たちを安心させ、更なるロイヤリティを得られる。

一方的に損を取らされるのは僕、というよりラエモン領の民。承

知できるか、そんなもの。

「いいだろう……今回はフォン・ツェルプストーに免じて貴様の顔を立ててやる……ログル！ 表まで送れ！」

私はこれで失礼する。またお会いしましょう、ミス」

「機会があれば」

キュルケに挨拶をしたラステン侯爵は早々に立ち去ってしまった。分が悪いと見るや神速の撤退とは、政治家というよりも軍人っぽい考え方をお持ちのようだ。

「災難でしたな」

人の良さそうな老執事はまだまだ現役のご様子。

「や、弱小伯爵なのは本当だからね、大貴族に吹っかけられるのは、犬に噛まれるようなもんだ」

「ほっ、犬に例えるとはまた豪胆な。ですが、ご無事で何よりでした。さ、お送りしましょう」

彼に連れられて行った庭先では、僕らの乗ってきた馬車と護衛の衛兵が待機していた。キュルケの存在が明らかになったから、長く引き止めるつもりも無かったのだろう。

馬車の窓からはタバサがちょこんと小さな顔を出して、こちらを見つめている。

「ただいま、タバサ」

「さ、出発しましょう。無駄な時間を過したわ」

頷いたタバサはすぐに座り、読みかけの本へと視線を落とす。傍

らにある長い杖を肩に寄せたまま。いつも彼女はその杖を手放さない。

「僕の領に来たら？ ログルなら大歓迎だよ」

「ははっ、私ももう歳ですからな。お勤めが免除されたときに、お邪魔いたします」

「ああ、待っている」

御者の掛け声と共に馬車が動き始め、外の景色はゆっくりと流れだす。

キユルケも少し精神的な疲れを感じているのか無言のまま、僕が見ているのと同じ窓の外を眺めていた。

侯爵の相手をした事で一日を潰した僕ら一行は、次の日にラステンの町を出て街道をトリスティンへと進んだ。予め計画しておいた日程とは少しずれてしまったものの、点在する宿場町を経由しながら順調な旅路は続いた。

タルブ村までは一週間ほどと見ていたから、もう今日明日にでも到着する予定。馬車に揺られながら本を読んだり話をしたりして過す。

「ねえ、この量の塩を出せるの？」

「問題ない」

両肘を両膝に置き、鼻を覆うように手を組んで言ってみた。

キユルケには暇な時間にちょこちょこ書いた、彼女の親父さん

に向けた手紙と書類を渡してある。

「ねえ、あなたの領の儲けは私の小遣い程度だって言わなかった？」  
「言った」

「どこに使い込んだらそこまで減るのよっ！」

「人件費が一番高いね。でも、まだ購入して三年目だよ？ 軍の装備を分割で買ったたり、馬や馬車も買った。他にも期間限定で、例えば牧草を植えた土地は囲いの設置でお金がかかったりね」

少し難しい顔をして唸っているキュルケがまた、可愛い。

「どうした？ 大丈夫？ 結婚する？」

「うん……するかっ！」

叩かれた。

赤い顔してこっち見ないで。

「もうっ、いいわ。これなら話を聞いてくれるはずよ」

「すまんね、キュルケ。自領だけで処理するのが理想とはいえ、ドラエモンにはその力が足りないからね。ラステン侯爵との決着は見ただろう？ あれがラエモン伯爵の現実というわけさ」

首を傾げたキュルケがまたイケる。ご飯二杯くらい。

「え、だって引き下がらせたじゃない。不満だったの？」

「当然。実害を被ったのは誰が見ても僕の領の民なんだよ。なのに、僕が侯爵を弾劾するどころか、彼の『仕方が無いから許してやる』っていうスタンスで決着してしまった。僕は民を守ってもいない、ただラステン侯爵の更なる攻勢を防いだけ。外交として見れば完全に僕の敗北だ」

端的に言つと「試合に勝つて、勝負で負けた」だ。

僕は今回ほど身分の差を感じた事はない。「上」からすれば「下」の者たちの「基本的人権」など、ありはしない幻想か実現しない妄想の類だ。決して覆らない、そう確信を持てる歴史が、ハルケギニアにあるが故。

「その考えは相手と同じ身分でしか通用しないんじゃないの？ 少なくとも、貴族は下々の者に軽々しく頭を下げるような事は無いし、私も小さい頃からそう習ったわ」

「ま、それはそうだね」

それが現実……っ！

貴族かつたるいです。

「しかし、馬車にも飽きた。もうそろそろ着く頃だと思っただけだな」

「そうね、予定では昨日到着だったから、この丘を越えれば見えるんじゃない？」

森林の多い丘をゆっくりと登っている馬車と、それに付き添う護衛たちの一行は場違いなようにも見える。この狭い山道を抜けた先にあるタルブの村はもう目の前だ。

村へ到着した僕ら一行を迎えたのは人の良さそうな村民たちだった。数こそ少ないが、広い畑を総出で管理する姿が目につく。

周囲を見ても特筆すべき物はなく、延々と畑や平原が続くのみ。山と森も。

噂を聞きつけたシエスタが僕らの前に姿を現わすまで、そう時間はかからなかった。

「遠路はるばるご苦労様です。見ての通り何も無い村ですけど、ゆつくりしていつて下さいね」

「ありがと、ゆつくりさせてもらつよ」

「お邪魔するわね」

招待されたシエスタの家も質素な感じの木造平屋。何故、彼女が僕ら一行を家に案内したかというと、タルブの村は宿屋が存在しないからだ。

貴族がこのような田舎に訪れる場合、領主に挨拶をして空いている部屋を借りたりするらしい。でも、僕らの中にトリスティン貴族と仲良しな人間など居らず、寝泊りは夜営か村民に家を借りるかだ。今回はシエスタと話をしていた事もあり、彼女の家の厄介になる。どうやらこの家に残るのはシエスタだけで、他の家人は友人の家などに泊まるらしい。

「ごめんね、シエスタ。追い出すような形になって」

「いえいえ、寄り合いのある空き家なんかもあるので、お構いなく」

につこり笑って返してくれると気が楽になる。

「間取り……も無いけれどまあまあじゃない？ 綺麗に掃除してあるみたいだし」

「あ、特産品のワインも用意してあるんですよ。よろしければどうぞ」

「気が利くわねえ。いただくかしら」

完全に接待です。本当にありがとうございました。

これはもう、貴族のフリをして堂々と滞在した上で、「余は満足じゃ。ほれ、これは褒賞、受け取るがよいぞ」みたいな感じでお金を支払っておくのがいいのかもしれない。シエスタが学院で使用人生活をしているのも周知だろうし、それでいくか。

「あら、おいしい。ミカドとタバサもどう？」

芳醇な香りが漂い始める室内。

タバサと僕の間もワインが注がれ、ちょっと気乗りしないものの一口飲む。

「おいしい」

「うまいな」

「ふふつ、自慢のワインですから」

得意そうに言うシエスタもなかなか。しかし、彼女は学院に居る時の格好そのままだ。仕事の気構えでここに残っているのなら、やはり長居するべきじゃないのだろう。折角の休暇が台無しになっては悪い。

「早速だけど、ひいおじいさんの遺品になるのかな？ 見せてもらえるかな？」

「はい、用意しておいたんですよ。でも、こんなのでいいんでしょうか？」

彼女の取り出した物は風防のゴーグル。しかも年代物で、僕にはいつの物か判断が付かない。>固定化<が掛かっているのか、目立つた劣化も無く状態は良い。



でも、これが必要とする場面って相当に限られるはずだ。何らかの乗り物は確実だろう、バイクとか。

「なにこれ、何に使う物なの？」

「えっと……目を覆うための大きな眼鏡らしいです」

「ふうん」

キュルケの感動が薄いのも無理はない。系統魔法というものは眼鏡のレンズも簡単に作ってしまう。

僕にとっては彼女たちと別の意味で珍しい物。

「なるほど、ありがとう。大事に保管しておくといいよ。それで、『竜の羽衣』というのは？」

「はい、少し離れた寺院にありますよ」

「明日はそこへ案内してもらってもいいかな？」

「もちろんです」

空を飛ぶ竜と比喻される物に乗り、東の空から舞い降りたササキタケオ氏。

彼はこの地に何を求めて来たのだろうか。何故、この地での生活を選び、祖国に帰ることなくタルブに残ったのか。

「その時、ミカドに電流走るっ」

「はい？」

「ほっとけほっとけ。たまにオカシクなっちまうんだ、ミカドはよ」  
「はあ」

デルフめ……。でもまあ、後は明日のお楽しみか。  
ササキタケオ氏の真実は分からない。『竜の羽衣』を見ても、それが何か語ってくれる訳ではないのだから。万が一、メイジの気ま

ぐれでインテリジェンス的な物になっていなければ。

僕も歴史家ではない。「百年の時を超え、真実の扉が今……開かれる」なんて事に興味も無い。そっとしておくのがいいのかな。

朝から『竜の羽衣』を見るために出発した僕ら一行は、近くにあるという寺院までゆつくりと歩いていた。

話によれば、近隣の山中では亜人なども出没するそうで、村人たちも積極的には行かないらしい。前フリがあつたから出るかなと、軽く考えていたら本当にオーク鬼が襲ってきた。

こちらの体勢は護衛の衛士、タバサ、キュルケと磐石。わざわざ来てくれたオーク鬼には可哀想だけれど、僕たちからすれば危機を感じるほどのものでもない。

「お任せ下さい、お嬢様！　おおおっ！」

勢い良く飛び出した衛士は手に持ったレイピアを構え、2メートルほどの体躯を持つオーク鬼の前に立つ。

彼の方は任せておいて、僕は扇状に周りを囲むオーク鬼の処理。一匹づつ>シャベリンくを頭にぶち込み、その醜惡な面を更に前衛的な形へと変えていく。

キュルケとタバサは普通に道を歩いていらっしやる。

「手伝つても良いと思うんだ」

「あら、私がやると火事になっちゃうでしょ？」

「……」

無言のタバサも目が「ダルい」と訴えている。  
僕もかったるいんですが。

「キーエーッ！」

変な掛け声の彼だが、腕はなかなかだ。

オーク鬼も僕らの強さが身に染みたらしく、数を減らしていく内に逃げるものも出てきて、遂には一匹も居なくなった。

「お疲れ様。良い腕してるね」

「いえ、ミカド殿も結構なお手前で」

久しくなかった漢「オトコ」っぽい会話を交わす。学院で男同士の友情分が補給出来ない僕からすると、こっぴった展開に憧憬を抱いてしまう。

学院じゃ風評被害がとんでもなく大きな障害となってるからなあ……鬱だ……。

オーク鬼が出て以来、特に何も起こらず観光がてら歩くと、すぐに目的地へと到着する。

「なに、あれ？ あんなの見た事が無いわよ」

タバサも無言ながら興味深そうに『竜の羽衣』を見つめて中へと進んでいる。

それは大きな羽を紡錘形の胴体の中ほど辺りから左右に突き出し、先端部は大直径の風車を引っ付けているという、飛ぶ鳥に似た形。また、胴の腹の部分から足が伸び、その先端に付いた車輪が接地している。体全体に緑を基調とした色が塗られ、その中に際立つ赤い丸が印象的。しかも、体を構成する主な物質は鉄ときてる。

「なるほどね……」

「知っているの？」

雷電？ 案外そうかもしれない。正式名称まで言い当てるほど、航空機に詳しくない事が惜しまれる。でも、タケオ氏はやはり日本人で、恐らく第二次世界大戦時代の軍人。

「この鉄の塊は空を飛ぶんだよね。僕も最初は揚力が分からなくて乗るの嫌いだっただ」

「ヨリヨク？ 何それ？」

「んー、風の力……かな。ごめん、適切な言葉が浮かばない」

気圧の概念とかあるのかな。

この世界で研究する主な課題とは「魔法」だ。研究や検証の結果からの考察をまとめた書物も、ほぼ魔法が主旨となっている。科学的な意見を挟む余地は一切ない。

タバサに借りた『風の力が気象に与える影響とその効果』という本がある。一見すると、気圧などを基礎知識としているようにも思えるが、あくまで風の力をどう使えばどんな現象が起こるというもの。結びは風の力をこう使えば効率的ですよ、と提示して終わり。

俗に言う「魔法ありき」という表現がしっくりくる。ハルケギニアは「いつも、どこでも、なんでも」そうだ。

「ほ、本当に飛ぶんですか？ その、信じてくれる人ってほとんど居なくて、おじいちゃんの変人扱いだったって。試しに飛んで見せろって言われても、一度だって飛ばした事は無いって……」

「飛ぶに飛べなかったんだよ。なんていうか、餌を与えないとこの竜は飛ばない」

そう、帰りたくとも帰れなかった。

ん？ 東の方は近代化が進んでる？ いやいやいや、第二次世界大戦で航空戦力が活躍する以前は大鑑巨砲主義？ だっけ、それくらい知っている。マゼランなんか居なくても新大陸発見するほどの技術があつて、ハルケギニアに來ない理由がない。

これは「場違いな工芸品」と同類項だ。有機物も無機物も例外なく、突拍子もなくこの世界に現れる。そんな素敵な召喚魔法を僕は知っている。事例も書物に記載されている。

「我がままなのね」

「仮にも竜だし。でもま、>錬金<で作れるよ。ちよつと触つてもいいかな？」

「あ、はい。どうぞご自由に」

風防の部分まで飛び上がり、コックピットを覗き込む。

非常にアナログな操縦桿やレバー類の数々と計器類。背もたれも機能的とは言いつらいものだ。その姿を見ると、何か訴えてくるような気がしてならない。

「状態は良い。>固定化<だな、すぐにでも飛べるよ」

「ミカド、これホントに飛ぶの？ 信じられないわね」

その気持ちは痛いほど分かる。

僕だつて鉄が空を飛ぶなんて、与太話にしか聞こえなかった。

「シエスタ、他に何か遺品があつたりするか？」

「その……遺言とお墓が」

「むう……先にお墓参りさせてもらう。案内してもらつていいかな？」

「はい、こつちです」

歩いてすぐのタルブの村人たちが眠る墓地まで行くと、先導するシエスタがとある墓石の前で立ち止まる。

その石に彫られた文字は少し古めかしい使い方の、見慣れた日本語。

「こちらです。彫られた文字はひいおじいちゃんの国の言葉らしくて、誰も読めなかったんです。遺言では、この文字を読んだ人に『竜の羽衣』を譲ると」

僕は手を合わせてしばしの黙祷を捧げる。

目を開いて、石に彫られた文字を朗読。

「海軍少尉佐々木武雄、異界に眠る」

「え？」

「僕もシエスタのひいおじいさんと同じ国から来た。母国語なんだよ、それ」

「あなたが他の国から来たって、本当だったのね！」

嘘だと思われてたのね。

ああ！ ひょっとしたら、学院の評判が怪しいのも、これが背景にあるのか。

「貰って……いいのかな……正直、かなり気が引ける」

「私は……私はそれがいいと思います。ミカドさんが嘘を言っているようには見えません。」

それに、もうひとつ遺言があるんです。もしもそんな人が現れたら、『竜の羽衣』を陛下にお返しして下さいと、伝えて欲しかったそうです」

昭和の天皇陛下という事になるのか。しかし、「海軍少尉佐々木

武雄が行方不明になった世界の日本」でなければ、返却する意味はない。

悩む。でも、今更ながら断るっていう選択肢があるのかな。無いか。仕方がない、何か方法を考えよう。いざとなれば強引に割り出せばいいし。

「分かったよ。安心して眠ってくれていい。必ず天皇陛下にお返ししておく」

「その、陛下ってどんな人物なの？」

「ハルケギニアで言えば国王陛下かな」

「げっ、あなた安請け合いしていいの？」

しかし、どうしてまたこんな風になったのかね。

「はあ……断れないだろう？ 同郷の人の遺言だぞ」

「ふふっ、そうね。頑張って返してきなさい」

「軽く言ってくれるな。ここじゃない何処かなんて、詩的な表現しか出来ない場所を探すんだ。それなりに時間と手間がかかる」

「……あなたはどうやって来たの？」

ちよっ、タバサさん、久しぶりに喋ると核心を突きますね。

アクシデント……ではある。

「ま、似たような理由だよ。彼と」

「ハッキリ言いなさい」

「僕にも分からない」

冷めた六つの瞳に囲まれ、凍えてしまいそう。

でも、シエスタは若干ながら理解してくれたようだ。

その後、佐々木武雄氏の親族一同に挨拶をして、あの航空機を引き取る事にした。飛ぶための準備が整ったらまた来るという約束をこしらえ、旅行の方へ戻る。

あれに乗ってタルブの空を駆けたら、武雄氏も喜んでくれるかな。



## じゅうななわ

あの後、旅行に戻った僕らはド・ラエモンに戻った。その数日後、再び僕の館で滞在していたキュルケとタバサの動向は一変する。なにやらタバサの方へ手紙が着たらしく、急に実家へ戻ることになったからだ。それに合わせて、キュルケの方も親御さんへの土産話を持って帰ってしまった。

予定にない暇ができて、僕も済んでいない用事のため、ひとりタルブの村を再訪する。例のものを引き取るために。

航空機を収容には苦労した。何がかというと、タルブの倉庫的な建物からあのデカブツを動かすだけの、外面的エクスキューズを得るのだ。

「それじゃ、持って行きますネーっ」と軽い調子で持って行けるほど小さな物でもなく、牽引するにも随分と馬力が必要になる。候補としては竜籠。片っ端から雇って、一週間ほどだろうか。多額の金貨に羽が生え、飛び立ってしまうのがネックだ。

色々と考えた挙句、『竜の羽衣』に備わる本来の自力で動かすと決めた。燃料さえ入れればすぐにでも動ける状態だったのが大きい。それが動く様を見ていたタルブの村人たちや佐々木武雄氏の親族も、クララが立った的なニュアンスで喜んでくれていたようにおもった。お陰様で、僕も素直に空の旅を楽しめた。

「どうかな？ 鉄の塊に乗って空を飛ぶ気分は」

「おでれーた。こりゃ、おでれーた」

壊れた蓄音機のように、同じ台詞を繰り返すデルフは忘れよう。

今この一時は突き抜けた雲海を目に焼きつけ、新雪を踏むが如く、雄大な空のキャンパスを想うまま駆ける。

## 第十七話

### 異世界と人の式

ラエモン領に持ち帰った航空機を、暇に飽かせて修理してみたり綺麗に洗ったりしてみた。機銃の弾数も少なかったが、もうこいつは軍役を終えている民間機だ。必要ないと断じてそのままにしておいた。

これから拓いてゆく荒地などに、灰を撒く作業をこれでやれば、随分と楽が出来そうなどと妄想もしてみたけれど、返却する以上は頼っても仕方がない。

僕は暇な時間を使って、>世界扉くの魔法自体を調べたり、出先の調査を済ませ、武雄氏の望みを叶える方向で動こうと思っている。

「ここも相変わらずだな……気味が悪りいぜ」

「亡くなった人も居ただろうからねえ……怨念とかって実在するか、きちんとお祓いをした上で結界を張ってる。何も心配はいらない」

僕の魔法研究は館の地下で行っている。そこは一切の自然光が入らない、孤独と静寂の住処。岩壁のしっとりとした質感と、ぬるりと撫でる冷やかな空気に、初見の誰もが恐れに囚われ、繋がれた罪人たちを想起させた。管理する以前はそうだった。

今はその面影も薄くなり、主人である僕を迎えるように、設置し

たアーティファクトによる焰が灯されている。柔らく暖かなそれは救いの炎にも見えるだろう。揺れ動くたびに感じる風の流れは、通気孔をそこかしこに作り、風石によって起こす大気の循環。

ここで行っている検証の方は順調だ。

試行回数は少ないが、>世界扉<を使うとほぼ確実に地球へと繋がった。同じ地球の同じ時間軸へとトンネルが開通する。中途の段階ではそのような見解だ。何か特別な指標があるのだろうか。毎回そこへ行くなら行くで、目印などがなければ不自然におもう。

そして、繋がる地球というのも、二十一世紀の社会。僕の記憶が正しければ、全くもって知らない地球という訳でもないが、若干の差異がある。

「ミカド……おめえ、どうやった」

いつものように軽い調子ではなく、言葉のひとつひとつを丁寧に人へ聞かせる重みを加えて、デルフリンガーは僕に尋ねる。

目の前に効果の現れた>世界扉「ワールド・ドア」<の事だ。

「聞いてどうする？」

「……ちつ、なんも話やがらねえ」

「いや、話すのは構わんよ。聞いても果てしなく嘘っぽいし」

と前置きをして、僕の使用する力の内容を語る。全部は記憶していないそれを、「いつでもどこでも検索エンジン」で詳しく調べ、口語として吐き出した。全て自動で。僕に覚える意思がないからだ。デルフリンガーも最初は興味津々だったが、途中から「あー……」などと声が漏れ始め、最後には相槌を打つこともなくなっていた。それもそのはず、某二十三世紀社会で説明されている部分だけでもハルケギニアの人間には重過ぎる。理解という言葉を空しい響きに

変えてしまうほどの超理論なのだ。

「僕が話した内容は理解できなくとも、僕が話したからない理由は理解できたろう?」

「まあ、そうだな……」

納得してもらえてなによりだ。

「どうしよ、行ってみるかな」

「大丈夫なのか? そんな簡単に決めちまってよ」

「デルフがあ地球をどう想像してるのか知らないけどね、ハルケギニアの万倍は安全だよ。ていうか、事故でもなければ道端で殺されるような事は起こらない。例え寂れた山中でも」

死ぬほど運が悪ければ、死ぬかも。それもハルケギニアより確実に。つまり機会は少ないが、起こってしまえば助かる確率も少ない。日本は銃器を法で規制しているから、まず平気。

僕としては地球に赴いて、武雄氏やあの航空機の情報を集めたい。その時期の新聞や歴史資料を見れば、何か分かりそうな気がする。

「うん、やっぱり行こう。デルフはどうする?」

「どっちでもかまわねえけどよ」

持っていくにしても、不可視の状態にするか、何かで隠すなどの対策は必要だ。現地到着と同時に銃刀法違反で捕まるなど、まっぴらですことよ。

「袋に包んでも、周りは見えてるの?」

「おう、あの暗いところじゃなきゃ問題ねえな、たぶん」

了解は得られた。デルフはいわゆる「透明マント」に使うような素材の布で包み、一般の人から見えないようにしておく。

「行くよ」

「おう」

僕の使う扉「ゲート」とは違う、虚無の>世界扉「ワールド・ドア」<で世界に孔を開けた。そこから見える場所は地球の日本だ。意を決して魔法でできた孔に歩を進めると、体に変化は起こらなかった。>世界扉<は移動用の魔法の中でも、空間干渉系ともいうべきスタイル。「どこでもドア」みたいな。

出た場所は誰も居ないような空き地。建材が野晒しで放置されていて、人の気配はまるでない。住宅街からもかなりの距離を空けているそこに、僕ひとりが佇んでいる。

「うん、無事に成功、かな」

「おでれーた」

またもや同じ語句をリピートし始めるデルフを捨て置き、>姿隠し<の魔法と>フライ<を併用して町へ向かう。行き先はまず図書館。新聞や本で、第二次世界大戦当時の航空機を扱っていた部隊について調べる。

身分の証明などは時間も惜しいので、記録の改訂をする方向で動く。自力でやると、勉強から始めなければならなかったため、今回は魔法で乗り切ろうと考えている。

歴史書や新聞を調べ上げて、佐々木武雄氏の名が登場する文献には出会わなかった。彼は多くのパイロットの中のひとりで、特別な何かを成した人物でもない。確実に見つかるとは考えていなかった。

そこで、航空機の失踪を取り扱った記事を探すと、これがヒットする。当時の新聞で、軍役中の航空機が2機、そのパイロットと共に消えていた。何故か、パイロットの名前が載っていないので、判断が難しい。行方不明の機体はこの2機だけという話だから、概ねこれのひとつが武雄氏なのだろう。

「おい、ミカド。みんな変わった服を着てるな」

「ん、ああ、これが普通……忘れてた……」

ボケたかもしれない。ハルケギニアの服そのままに、僕は図書館内を練り歩いていたらわけだ。町は後回しにしようと良かった。デルフの突込みがなければずっとこのまま過してたかもしれない。

それでも、無駄に注目を集める要素があるのはマントだけで、黒のスラックスと白のブラウスに問題はない、はずだ。それでも出来損なったコスプレを体現している事に、否定の余地がない。哀しいことに。

「どうするか……買うのが一番かな」

「調べものは終わったのか」

「まだだ。でも、変な注目を浴びるのも困る」

免許証や、それに連なる情報を貯め込んだデータベースへは、僕の魔法で虚偽の情報を覚えさせている。例え参照したところで、僕の身分に偽りはない。それにしただって、懐疑をかけられないに越したことはないのだ。

十分と言えない量の情報からでも、僕の居た21世紀とこの世界

の差異がはつきりと浮き彫りになっていた。ここは僕の知る「地球」ではない。

勝手の分らない郷で好きに振舞うと、いらない偶然に躓くらしい。そう、脳で働く小人さんが囁いている。迷信を笑い飛ばす僕も、予感には僅かながらの自負を持つ。

僕はそれを無視することなく、木目の床をコツコツと鳴らしてトイレへ向かった。生着替えタイムだ。

「視るなよーっ」

「……どうせ魔法で済ますんだろ」

ご明察。

服飾をこの世界にふさわしいものへと取替えつつ、お洒落は足元からと魅せる靴を創り、後は適当な腕時計と久しぶりのフレームオンリー伊達めがねを着ける。鏡の向こうに立つ人物は見まごうことない21世紀青年。

「じゃ、行こうか」

「おう」

プライベートルームに監視カメラはない、と高を括っていると馬鹿をみる。いづどこに田○カメラが潜んでいるのかは誰にもわからない。悪意のある電子機器に反応する>走査<の魔法を発して、確認だけしておく。

何もないと判明して数瞬の後、>姿隠しくと>扉「ゲート」<を使つて町へ繰り出す。目標は繁華街のある遊興施設。ネオンでギトギトの装飾と騒音で人々を誘う、レーティング規制のある店だ。

某所某店にて、体に障りそうなほどの強さで視覚、聴覚、嗅覚を刺激する遊具と戯れ、2時間ほど試練の時を過した。

単調なBGMと機械的に鳴る音、点灯を繰り返す明かり、おまけに空気が淀むほど大量の煙のにおい。それら悪条件に耐えて得たのは赤青黄色の、ひとつが掌に握れる大きさの景品。

「なあ、ミカド。ありやなんだったんだ。煩くてどうにかなりそうだったぜ」

「日本の文化、パチンコ。唯一の公営でない賭博施設。おっと、名目上は『景品』にしか替えてくれないから、大人の遊び場ってところかね」

「はっ、また賭博かよ」

デルフが呆れてしまうのも、無理からぬこと。ハルケギニアでの生活の大半を、領の運営と賭博に費やしてきたのは僕なんだから。デルフは剣だけに付いて回るしかない。

「どっこも変わんねーな。賭け事が一番の遊びなんてのはよ」

「人類が古くから賭け事やってたのは確かだね。でも、この国じや大っぴらに賭場なんか開いたら、官に捕まる。違法だから」

「やってたじゃねーか」

一般に違法と言え、あんな大きな施設は造れないよね。デルフの驚きは至極当然なものだ。

換金のシステムだって、小学生でも考えつくほど単純。パチンコ店では「景品」に替えてやり、別の業者がその「景品」を買い取る。パチンコ店を出て、ものの数メートルも歩けば、その「換金所」は営業中だ。



「法の抜け穴つてやつかな。奇麗事じゃないよ、何事もね」  
「はっ、ちがいねえーな」

変わらない。そう、何も変わらない。ハルケギニアだろうと、地球の日本だろうと、法の側に立つ人間が権力を握り、更にその中で勢力争いを続け、次第に身分とは別の、誰にも見えない無形の階級ができあがる。強い者が法を握れば、法はその者に都合よく働くのが道理。特別なことじゃない。政治形態、民族、宗教、国、ありとあらゆる属性に、逃れられない法が定まっている。例えばそれが、異世界であつても。

つまるところ誰が見ても黒であるものを、白と言わせる。それが身分、権力の本質。

「あー、ラステン侯爵を思い出す。ムカムカしてくるな」

虐げられる側を良く知る者にだけある憂い、かもしれない。知らなければ痛まない、そんな類のもの。いつそ何もしないのなら、何も知ろうとしない方がいい。たぶん、その方が悠揚に構えていられる。少なくとも、僕はそれを知るべきと言わない。

嫌な考えと自分も思うが、ハルケギニアの平民も有能であればあるほどに、見えていながら手の届かないジレンマに踊らされ、疲弊し、斃れてゆくだろう。そんなもんなのだ、世の中と称される化け物は。

あえて神を論ずるなら、その普遍なるものこそ神だろう。

「かつたるい。なにはともあれ金は稼いだ。ちよつとうさ晴らしにでも行くぞ」

「どこでも連れてけ」

そつけない言葉を投げたデルフも、珍しい物を見るのは楽しいのか、そういったニュアンスも端々にある。なれば遠慮も無粋かと、最初に思いついたデルフも一緒に楽しめる施設へと足を向けた。

独りで外食チェーン店の中に入ったりすると、何故かいたたまれない気分になる事がある。ラーメン店などでは感じられない、その独特な感傷。僕が今、ちょうどそのような気持ちでフロントの店員と話をつけ、デルフと一緒に楽しめる遊興施設の部屋を借りている。案内されたのは六畳ほどの洋室で、壁沿いには長椅子が置いてあり、それに合わせるかのような大きな長いテーブルが置いてあった。そして、部屋の入り口から見て最奥の壁際に、冷蔵庫のような長方系の物体が鎮座する。これこそが、この店から提供されている遊びの象徴。

「夢のおゝ武田さゝん」

「夢のおゝ武田さゝん」

歌っていた。デルフと一緒に。液晶テレビの画面にはどこぞのレールが撮影したであろう映像や、歌い手のための詞が流れる。完全にカラオケです。本当にありがとうございました。

「デルフも上手くなったねえ」

「おう、しかしおめえさんの国はすげーな。おでれーた」

「運が良かった。のかね……戦争はこつぴどく負けた国なんだよ？」

国民の数などを考えたら急成長だろう。

「勝った国はもつとすげーのか、こりやおでれーた」

「んー、もうこのレベルの文明になると、単純な武力だけではかれないよ。打算と倫理を度外視すれば、多くの国が人類自体を滅ぼせる。経済や政治でいえば、ここより優れた国は沢山あるよ」

「……個人じゃどうにもなんねーな。ミカドの言う抑止力ってのはそういうことか」

「そだよ」

だからって、ハルケギニアに全てを当て嵌めることはできない。

僕には余裕があるから、そう言っているだけの話で、適用するのは自分自身のみ。

魔法の力を侮るつもりはないけれど、フネの大砲が青銅製という時点で、その体質に問題があると分かる。鉄製が安いのも、鑄鉄技術の遅れからくるもので、本来なら>錬金<で真鍮と鉄の複合製にでもした方がいい。それを理解できないのだ、知識層である貴族がもつと科学しろっていう。

もし、この世界の科学者が>錬金<を手にしたなら……平和になったりして。実験に大型の施設が必要なくなつて、各個人のラボに籠ったり。またイチローか、みたいな事もあり得るけれども。

「よし、そろそろ調査に戻るかな。時間もなくなってきたし」

「そうだなー、灯りが多くて時間が分からねーな、この世界は」

「あー、確かにそうかも」

カラオケ店を出て、次に向かったのは服飾店。そこで店員に全身のコーディネート依頼。おかしくなつた僕の感覚ではなく、きちんと現代人っぽい青年の格好となつた。

そして次に行ったのがインターネットカフェ。もう、ここまで来ると自力で情報を引き出せよ、という感じになつてきたが、楽しみ

のためでもあるため、行ってみた。遊び惚けるのではなく、ネット上に置かれた彼らの情報を閲覧することも忘れない。

結論から言うと「消えた零戦の謎」という題で、神隠しの扱いにされていた。公式ではMIAとされていたようだ。乗っていたパイロットも同様に、戦闘中行方不明につき生死不明という見解で一致している。

僕にとって大事なのはその兵士の名前。

「ビンゴっ、海軍少尉佐々木武雄氏、二階級特進につき大尉へと昇進」

永い間、その行方を探していた人々や各機関も、時の流れに彼の生存を諦めた。もう半世紀以上も昔の話で、本人も亡くなっておられるのだ、そうなって当然だった。

ここは、彼の居た地球に間違いない。

「あとはどういう形をもって、零戦を返却するか」  
「飛んでくればいいじゃねーか」

馬鹿だ。馬鹿がいる。や、デルフにこの世界の、日本の常識を求める事はできないけどね。半ば正論であることも確かで、飛ぶ以外の方法はない。となれば、何処に着陸するのか、というのが目下の議題でありまして。

「空軍基地に置き去りにしたところで、それが武雄氏の言う返却に当たるとは到底おもえない」

「まーた難しく考えてやがる。おめえはいつも簡単に済ますだろ、考えたって無駄だぜ」

こ、このやろう……。でも、そうなんだけどねっ！

もういいや、もう天皇陛下がご在宅の日に、庭へそつとお邪魔しよう。武雄氏についての手紙を置けば、後は勝手にマスコミなり何なりが都合の良いよう推しはかるだろうし。

日取りは調べようもなく、自分の能力をもって日程を決めた。

ある天雨のそそぐ庭で、音もなく現れた旧大日本帝国の遺物。零戦。そのコックピットに置かれた書を、どこメディアも伝えなかった。どういった扱いになったのか、僕は知らない。由緒書きと共に、武雄氏の暮らしと残した遺言を記した。それだけだ。

味付けなど必要ない。ありのまま。それがいいと、僕は思っている。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8293j/>

---

猫は多世界解釈派

2010年10月9日11時23分発行